

が無いとはいはれないかも知れません。この陣營に居る人々は現代的といふ考に酔うて居ります。現代的といふ事も結構ですが、併し永遠といふ事はそれ以上に善い事でありませぬ。私はその人々が永遠といふ事の正當な價値を認めて居ないのではありませんかと思ひます。基督の教會は行政及び政治の上に於けるカトリック教徒の聯合運動から大なる力を得る者だと思はれて居ます。而も斯ういふ運動は争闘に終るのであります。之に反して、基督者が銘々一個人として爲す所の善行の光から得らるべき力の信頼すべき事は充分に認められて居ませぬ。而も天の父はこの善行の光を通じて崇められ給ふのであります。人類の最大の目的は天の父を崇める事でありませぬ。そして人は愛と平和と智慧と清淨と堅忍との精神を有つて居て、他人の爲に自分の活力を捧げる者の父を崇めます。カトリック教の信仰を告白し、之を實行する、斯くの如き義人唯だ一人は、多くの會議や、多くの俱樂部や、多くの政治上のカトリック教徒の勝利よりも、父と基督と教會との榮光を顯はす上に一層大なる貢獻をなすのであります。

今し方誰か「併し社會的運動は如何する？」と呟かれたのが聞えました。友よ、社會的運動は正義や、親和を助長する事業として確に有益なものであります。併しながら、カトリック教徒の中には、社會主義者のやうに、社會運動に自己の宗教上、政治上の意見の印を捺して、假令好意を有つて居る者でもその印を受けない者は仲間に入れないといふ人々があります。彼等は善きサマリヤ人を撥ね付けます。これは神の憎み給ふ所でありませぬ。彼等は又利を得る手段である所の事業にカトリック教の印を捺します。之亦神の憎み給ふ所でありませぬ。彼等は富の公平なる分配の必要を説きます。これは善い事ではありますが、彼等は動もすれば心の貧しき事の必要をそれと同時に教へる事を忘れます。若し彼等が之を教へないのは金を愛する卑しい動機から出るのであるならば、之も亦神の憎み給ふ所でありませぬ。諸君の行動から斯ういふ厭はしいものをお除きなさい。凡て好意を有つて居る人の助力をお求めなさい。就中正義と愛との事業に於ては左様なさい。そして諸君自はその事業を始めたといふ事だけに満足なさい。諸君は言葉を以て、又自實行の範を示して、富める者にも貧しい者にも等しく心の貧しき事の必要をお教へなさい。

聴衆は彼方此方に混亂して、動搖した。ベネデットは兩手で顔を覆つて、暫時考へて居た。

「諸君は如何したならば宜いかと云はれるのですな？」



と彼は双手を顔から離して云つた。それからもう暫時思案して、話を續けた。

「私は未來に於いて僧侶でないカトリック教徒が基督の爲め、真理の爲めに熱心に奮闘し、現在とは異つた各種の同盟を組織する手段を見出すのを豫想します。彼等は何時かは聖靈の戰士として奮ひ起ち、科學、藝術、民事、社會の各方面に於いては神と基督教道徳とを協力守護する爲めに、宗教の方面に於いては正當なる自由を協力守護する爲めに、團結するでせう。彼等は共産生活又は獨身生活ではありませんが、或る特種の義務の下に立つてせう。そして彼等はカトリック教々役者の職務を改新するでせう。そして彼等は僧位を受けたる者としてではなく、カトリック教の信仰を實行する上に於いて唯だ個人として教役者の中に列するでせう。この事業を企つる人々の魂の中に、之に關する神の聖旨が顯されるやうにお祈りなさい。若し神がこの事業を喜び給はないといふ事を示し給ふならば、その人々の魂がこの事業を發案したといふ凡ての誇と、その完成を見たいといふ凡ての希望とを喜んで棄てる事が出来るやうにお祈りなさい。又若し神がそれを喜び給ふといふ事を示し給ふたならば、其時には人々がその事業の凡ての點を、神の榮光が一層顯されるやう、また教會の榮光が一層顯されるやうに、組織する事を學び得るやうお祈りなさい。アーメン！」

彼の話が終つても誰一人動かなかつた。凡ての眼は實に神秘に、又雄大に響いたこの最後の意想外な言葉に次いで來るべき言葉を待ち望む熱心の色を浮べて、彼を凝視めた。沈黙を破つて口を開き度く思つた者も多かつたけれども敢て然する者は無かつた。ベネデットが立ち上つて、聴衆が皆恭しく環を作つてその周圍に集つた時に、赭顔の白鬚の老紳士も亦席を離れて、感情に聲を顔はしながら云つた。

「貴方は人々に侮辱せられ、打擲せられるでせう。貴方は荆棘の冠を冠せられ、苦き杯を飲ませられるでせう。貴方はパリサイ人と異教徒とに嘲弄せられるでせう。貴方は貴方の願ふ所の未來を見ないでせう。けれども未來は貴方のものです。貴方の弟子の弟子がそれを見るでせう！」

彼はベネデットを抱いて、その額に接吻した。一番近くに居つた人々の二三人が怖々手を叩いた。すると高い拍手の音が急に起つて室に満ちた。ベネデットは大に心を動かされた様子で、自分と共にこの家へ來た美しい髪を有つた青年を手招きした。青年は感動と喜悅との色を顔に漲らせて、彼の側へ急ぎ寄つた。

「弟子！」



と誰か、囁いた。他の者が又低聲で之に附け足した。

「左様です而も愛弟子です！」

この家の主人はベネデットーの前に、殆ど平伏せん許の有様で、尊敬と感謝との辭を滔々と述べ立てた。其時一人の僧が勇を鼓して進み寄つて、顛ひ聲で云つた。

「先生、私共に何も御忠告下さる事は御座いませんか？」

ベネデットーは猶心の騒の治まらぬ様子で答へた。

「先生など、云つて下さいますな！此處に居る若い人々の上に、我々の牧者の上に、又私の上にも、光が照らされるやうお祈り下さい！」

ベネデットーが室を出て行つてから、よく響く朗かな聲や、断れぐの嘖れ聲など、色々の聲の私語が聞えた。人々の感奮した心は驚嘆の爲めに猶その働を止められて居たのであつた。聽て此處彼處に強い興奮が起つて、八方に擴がった。感嘆の聲が凡ての唇を漏れた。ベネデットーが用ゐた斯ういふ言葉が好かつたとか、彼が語つた斯ういふ思想が面白いとか云つて褒める者もあれば、又、彼の目付や聲の調子を批評したり、清淨の氣が彼の顔に輝いて居たのみか、彼の手の先からも流れ出るやうに思はれたと云つて驚嘆する者もあつた。間

もなくこの家の主人は散會を告げた。彼の並べた言葉は山ほどあり、彼の言葉は頗る感奮でありはしたが、それでも彼が惶しく客を送り出す様子は、殆ど禮を失して居る様に思はれる程であつた。

室内に自分の他誰も居ないやうになつた時に、彼は早速錠の下してあつた間の扉を押し開けて、敷居に立つて頭を下げた。

「さあ皆様！」

と云つて彼は扉を廣く開けた。

一群の婦人が翩々と空虚の廣間へ這入つて來た。其中の四十恰好の獨身女は、若い男の方へ自分の體を、文字通りに投げ遣るやうに走り寄つて、兩手を組み合はせながら叫んだ。

「本當にまあ有難う御座いました！まあ！なんて立派な聖者でせう！妾等が如何して此方へ駆け込んであの方に絶り付かなかつたのか、妾には解りませんわ！」

「そりや貴女、多分扉に錠が下りてたからでせうよ。それであの方もお助かりでしたわねえ！」

と一人の婦人が、美しい大きな眼に笑を湛へながら、ヴェネチア風に大人しい口調の中に諷



刺を含ませて云つた。

婦人の数は十二人であつた。この家の主人グアルナツチ教授は自分の父が彼等の中の一人、フェルミ侯爵夫人といふ羅馬人の總務代理人を勤めて居るといふ譯合から、自分の宅で開かれる筈の集會の事を彼女に話して、其序に、テスタツチ才邊で大變崇拜されて居る熱心な宗教演説家、又奇蹟を行ふ人として既に羅馬市中で大評判の、あの奇妙な人物がその席上で一場の談話をする筈だと云つた。侯爵夫人は是非自分の姿を人に見せずにその話を聴かうと思つた。そして萬事グアルナツチと打合はせた上で、三四人の友達をその陰謀の一味の中に加へたが、その友達が又銘々自分の友人を連れて來る許可を得たのであつた。彼等は奇妙に種々の人々の混り合つた一群であつた。多くは夜會服を着て居たが、全くクエイカーのやうな服装をして居た者が二人と、唯だ一人だけ黒服を纏つて居る者があつた。二人のクエイカー教徒は外國人であつたが、熱心の餘殆ど氣が狂つたかと思はれる許であつた。そして侯爵夫人——懷疑的で大變皮肉な婆さん——の言葉を聞いて大に感情を害せられた。侯爵夫人は落着き拂つて斯う云つた。

「左様ですね。大層上手に話しましたね。併し妾はあの人が話して居る時にその顔を見かけたのですよ。」

それから彼女は、言葉を聞いてよりも顔を見ての方が遙によく人物の鑑定が出来る、と偉さうな事を云ひ、又何故扉に穴を鑿けて置かなかつたのか、せめては錠に鍵を挿して置いて呉れ、ばよかつたに、とグアルナツチを責めた。

「貴方は餘り聖人すぎますわ。貴方には女の心が解らない！」

グアルナツチは笑つて、自分の父の主人に對して拂ふべき敬意を充分に表して説言を述べた。そしてベネテットは本當に天の使のやうに美しい人だと云つた。すると、「一體何しに此處へ來たのだらう！」と二人のクエイカー教徒が忌々しく思つた一人の薄遅鈍らしい若い女が、自分はベネテットに二度會つたが、彼は醜男だ、と言葉靜に云つた。

「それは勿論貴女御自身の有つて居らつしやる美の理想によつて御判断なすつたからでせう、ね貴女！」

とクエイカーの中の一人が苦々し氣に云つた。もう一人のクエイカーは言葉の刺を一層鋭くする積で低聲になつて、毒々しい「當然ですわ！」を附け加へた。

薄遅鈍の若い女は當惑と腹立とで顔を眞赤にしながら、彼は瘦て蒼い顔をして居ると答へ



た。二人のクエイカーは無言で侮蔑の念を含んだ胸を微笑とを互に交換した。だが、彼女は何處で彼に會つたのか？ 又別の薄遅鈍の二人の若い女がそれを知りたいと思つた。

「何處つて、二度とも良人の姉の宅の庭ですよ。」

と彼女は答へた。

「年中庭に居るんですね！ 天使は花壇に生えてるんですか、それとも植木鉢にですか？」

と侯爵夫人が叫んだので薄遅鈍の若い女は笑つた。クエイカーは腹立たし氣に侯爵夫人を睨み付けた。

グアルナツチの招待状には談話の後で粗茶を差上げるとあつたので此時茶が室内に持ち込まれた。

「面白い對話ちや御座いませんか？」

と内務次官アルパチナ閣下の令夫人が、先刻から唯だの一言も話さない黒服の婦人に向つて、低聲で云つた。相手の婦人は返事をせずに淋し相に笑顔を作つた。

教授とその妹とが皆に茶を進めたので、話聲は暫時跡切れた。併し纏て又ベネデットーの談話に就いて話の花が咲いた。そして譯も無い感想や、下さらない意見や、智慧の無い自

を鳴らし始めた。

「妾はその庭の話が聞きたいのです。」

と彼女は云つた。

二人のクエイカーと四十恰好の獨身女とはベネデットーの説くカトリック教の正統であるか如何かを熱心に議論して居たが、獨身女の好奇心が「庭」といふ一語の爲めに喚起せられなかつたならば、鈴が十遍鳴つても議論を止めなかつたであらう。今喚起された彼女の好奇心は抑へられる事も無く勃發した。庭だつて！ 左様だ、是非ともグアルナツチ教授に、この伊太利人で又俗人のヘツカー師の身の上を、知つて居るだけすつかり話して貰はねばならぬ。彼女は半は自分の知識を見せびらかす爲め、半は思慮の足らぬ爲めに、既にベネデットーにヘツカー師といふ名を命じて居たのであつた。薄遅鈍の若い女は時計を出して見て、自分の馬車が迎へに來て居る時分だと云つた。グアルナツチの姉は、馬車が四五輛既に玄關に

分免許の名言などが人々の口から出て相錯綜する有様を見て、黒服の婦人は、自分と一緒に來たアルパチナ夫人に向つて、もう歸らうではないかと云つた。けれども、丁度其時、フェルミ侯爵夫人が煖炉棚の上に小な呼鈴があるのを見付けて、皆を黙らせやうと思つてそれを鳴らし始めた。

「妾はその庭の話が聞きたいのです。」

と彼女は云つた。

二人のクエイカーと四十恰好の獨身女とはベネデットーの説くカトリック教の正統であるか如何かを熱心に議論して居たが、獨身女の好奇心が「庭」といふ一語の爲めに喚起せられなかつたならば、鈴が十遍鳴つても議論を止めなかつたであらう。今喚起された彼女の好奇心は抑へられる事も無く勃發した。庭だつて！ 左様だ、是非ともグアルナツチ教授に、この伊太利人で又俗人のヘツカー師の身の上を、知つて居るだけすつかり話して貰はねばならぬ。彼女は半は自分の知識を見せびらかす爲め、半は思慮の足らぬ爲めに、既にベネデットーにヘツカー師といふ名を命じて居たのであつた。薄遅鈍の若い女は時計を出して見て、自分の馬車が迎へに來て居る時分だと云つた。グアルナツチの姉は、馬車が四五輛既に玄關に

分免許の名言などが人々の口から出て相錯綜する有様を見て、黒服の婦人は、自分と一緒に來たアルパチナ夫人に向つて、もう歸らうではないかと云つた。けれども、丁度其時、フェルミ侯爵夫人が煖炉棚の上に小な呼鈴があるのを見付けて、皆を黙らせやうと思つてそれを鳴らし始めた。

「妾はその庭の話が聞きたいのです。」

と彼女は云つた。

二人のクエイカーと四十恰好の獨身女とはベネデットーの説くカトリック教の正統であるか如何かを熱心に議論して居たが、獨身女の好奇心が「庭」といふ一語の爲めに喚起せられなかつたならば、鈴が十遍鳴つても議論を止めなかつたであらう。今喚起された彼女の好奇心は抑へられる事も無く勃發した。庭だつて！ 左様だ、是非ともグアルナツチ教授に、この伊太利人で又俗人のヘツカー師の身の上を、知つて居るだけすつかり話して貰はねばならぬ。彼女は半は自分の知識を見せびらかす爲め、半は思慮の足らぬ爲めに、既にベネデットーにヘツカー師といふ名を命じて居たのであつた。薄遅鈍の若い女は時計を出して見て、自分の馬車が迎へに來て居る時分だと云つた。グアルナツチの姉は、馬車が四五輛既に玄關に

分免許の名言などが人々の口から出て相錯綜する有様を見て、黒服の婦人は、自分と一緒に來たアルパチナ夫人に向つて、もう歸らうではないかと云つた。けれども、丁度其時、フェルミ侯爵夫人が煖炉棚の上に小な呼鈴があるのを見付けて、皆を黙らせやうと思つてそれを鳴らし始めた。

「妾はその庭の話が聞きたいのです。」

と彼女は云つた。

二人のクエイカーと四十恰好の獨身女とはベネデットーの説くカトリック教の正統であるか如何かを熱心に議論して居たが、獨身女の好奇心が「庭」といふ一語の爲めに喚起せられなかつたならば、鈴が十遍鳴つても議論を止めなかつたであらう。今喚起された彼女の好奇心は抑へられる事も無く勃發した。庭だつて！ 左様だ、是非ともグアルナツチ教授に、この伊太利人で又俗人のヘツカー師の身の上を、知つて居るだけすつかり話して貰はねばならぬ。彼女は半は自分の知識を見せびらかす爲め、半は思慮の足らぬ爲めに、既にベネデットーにヘツカー師といふ名を命じて居たのであつた。薄遅鈍の若い女は時計を出して見て、自分の馬車が迎へに來て居る時分だと云つた。グアルナツチの姉は、馬車が四五輛既に玄關に

分免許の名言などが人々の口から出て相錯綜する有様を見て、黒服の婦人は、自分と一緒に來たアルパチナ夫人に向つて、もう歸らうではないかと云つた。けれども、丁度其時、フェルミ侯爵夫人が煖炉棚の上に小な呼鈴があるのを見付けて、皆を黙らせやうと思つてそれを鳴らし始めた。

「妾はその庭の話が聞きたいのです。」

と彼女は云つた。

二人のクエイカーと四十恰好の獨身女とはベネデットーの説くカトリック教の正統であるか如何かを熱心に議論して居たが、獨身女の好奇心が「庭」といふ一語の爲めに喚起せられなかつたならば、鈴が十遍鳴つても議論を止めなかつたであらう。今喚起された彼女の好奇心は抑へられる事も無く勃發した。庭だつて！ 左様だ、是非ともグアルナツチ教授に、この伊太利人で又俗人のヘツカー師の身の上を、知つて居るだけすつかり話して貰はねばならぬ。彼女は半は自分の知識を見せびらかす爲め、半は思慮の足らぬ爲めに、既にベネデットーにヘツカー師といふ名を命じて居たのであつた。薄遅鈍の若い女は時計を出して見て、自分の馬車が迎へに來て居る時分だと云つた。グアルナツチの姉は、馬車が四五輛既に玄關に



来て居ると答へた。薄遅鈍の若い女は喜劇の三幕目の間に合ふやうに早くヴァレ座へ行き度いと思つたので、他に約束があると云ふ二人の婦人と一緒に出掛けて行つた。フェルミ侯爵夫人は後に残つて居た。

「ダアルナツチ教授、早く話して下さいな。今晚は家の娘が妾とそれから肩を出していらつしやるこの婦人方を待つて居るんですから—」

と彼女は云つた。

「ちや、早くお話しなさいまし！後でまた肩を出して居ない可哀相な人達の爲めになるやうに、ゆつくり話して下されば宜しう御座いますわ—」

と四十恰好の獨身女は蔑視むやうな調子で云つた。

肩がすつかり見える上衣を着た、髪綺麗な、顔の美しい外國婦人が、人を蔑視むやうな事を云ふ、獨身女の見すばらしい、瘦せた、叮嚀に包んである小な肩を、腹の底まで透るやうな眼付でちらと見た。獨身女はそれが大層癪に障つたので、海老のやうに眞赤になつた。教授は語り始めた。

「ではお話し申しませう。侯爵夫人も、多分又お急ぎでいらつしやる御婦人方も、イエネ

の聖者がイエネを去られた以前の事は、私の存じて居りますだけ既に御承知で御座いますから、其時分の事は飛ばして申上げませう。扱て、一月前、十月の事でしたが、このベネテツトといふ人がイエネで説教をしたり奇蹟を行つたりして居るといふ事を、六月でしたか、七月でしたかに、新聞で見ました事を、私は忘れて仕舞つて居りましたのです。所が或日、私はサン・マルチエロから出て来がけに、ポルレッティといふ男に遇ひました。その男は以前はよくオツセルヴァトン新聞に何か書いて居たのですが、この頃はもう止めて居ます。でそのポルレッティといふ男が私と一緒に歩いて来ましたので、私等はチヨヴァニ・セルヴァ氏の著書が今にも發賣禁止になるだらうといふ事を話しながら参りました。尤も禁止令はまだ發布にはなりませんから、これは一寸序に申上げて置きます。其時ポルレッティは私に、今セルヴァ氏の友人が一人羅馬に居るが、その人はセルヴァ氏以上の評判になるだらうと申しました。私は「それは誰の事だ？」と尋ねますと、ポルレッティは「イエネの聖者だ」と云つて、それから斯ういふ話をして呉れました。羅馬で恐ろしいパリサイだといふ噂のある二人の僧が、その人をイエネから追ひ出させたのです。それでその人はスピアコへ退隠して、丁度其處で夏を過して居ましたセルヴァ氏の家に厄介になつて居りましたが、纏て大病に罹りました。



病氣が癒つてから到頭羅馬へ出て來ました。それは七月の中頃の事です。是も亦セルヴァ氏の友人のマイダ教授が、二年前にアヴェンティンの丘のサンタンセルモ僧院の下手に建てた別荘の園丁の手傳として、その人を雇ひました。その新園丁はイエネに居た時と同じやうに、自分の事を唯たベネデットと呼んで貰ひたいと云つて居ましたが、暫時の中にテスタツチオ一圓で尊敬されるやうになりました。彼は自分の食物を貧民に施したり、病人を慰問したりしますし、また話によりますと、本當に手を按けて祈禱をして、一人二人の病人を癒したといふ事です。兎に角彼が非常に人々に尊敬されて、續々人が面會に來るものから、マイダ教授の子息の奥さんは、信仰のある善い人なんですけれども、餘り五月蠅いからと云つて彼に暇を出したがつて居るのです。併し眞のマイダ教授は彼を大變鄭重に待遇つて居ます。教授は彼に庭の徑を掃除したり、花に水をやつたりさせて置きますが、それは唯だ彼の聖者のやうな理想に敬意を表するからなのです。そして教授は彼の勞働時間を制限して、出来るだけ短くして居ます。教授は彼に、自由にその宗教的使命を全うする時間を與へ度いと思つて居るのです。そして自分も度々庭へ出て、彼と宗教談をします。ベネデット氏はイエネに居た時分にはパンと野菜の他は何も食べず、飲物は水ばかりだつたのですが、此

頃では教授を喜ばす爲めに、今までとは飲食物を變へて、肉を食べて、葡萄酒を飲みます。教授は又ベネデット氏を喜ばす爲めに、肉や葡萄酒を澤山あの邊の病人に施します。ベネデット氏を嘲つて侮辱する者も澤山ありますけれども、あの邊の人々は、イエネの人が始の間爲た様に、彼を尊敬して居ます。彼が人の靈魂に對してする慈善の行爲は、肉體に對してする慈善の行爲よりも、一層大であります。彼は或る二二三の家庭から道德的紊亂の種を除きました。その結果彼は醜聞のある一人の女の爲めに付け狙はれて、一命も危かつた事がありました。彼は又小供の頃から一度も教會堂に足踏をした事のなかつた人々を勸めて、教會堂に出入するやうにしました。斯ういふ事はサンタンセルモ僧院のベネデイクト派の僧等がよく知つて居ります。それから又、彼は一週間に二三回、夜分に洞墳の中で話をします。「四十恰好の獨身女は驚の餘、呼吸が止つた！」

「洞墳の中ですつて？」

彼女は戰慄しながら、話して居る者の方に身を乗出した。クエイカーの中の一人は低聲で「まあ！まあ！」と呟いた。もう一人誰か、畏敬の念の籠つた驚愕の調子を強く帯びた聲で「恐ろしい事！」と云つた。



若い男は微笑みながら語り續けた。

「いや、ポルレッティは「洞墳の中で」と云ひましたが、それは少數の人にだけ知れて居る或る秘密の場所の事だったので。唯今では私もそれが何處に在るのかを知て居ります。」

「へえ！御存知ですつて？何處で御座います？」

と獨身女は叫んだ。

グアルナツチは答へなかつた。それで彼女は自分が輕卒であつた事に氣が付いて、周章で曰ひ足した。

「御免なさいまし！御免なさいまし！」

「今に嘆ぎ出しますよ、今に嘆ぎ出しますよ！ですがね、貴方、内密で説教するこの聖者つてのは異端信者の大將みたやうな人ぢやないのぢやうか？坊さん達は知行云つてます？」

と侯爵夫人が云つた。

「今晚僧侶が三四人来て居ましたが、皆すつかり得心して歸つて行きまして御座います。貴女も此方にいらつしやつたら御覽なさいましたでせう。」

「そんな坊さんは甚だ坊さんらしくない、出来損ひの、偽坊主でせうよ。それよりも他の

坊さん達は如何云つてます？妾は受合つて置きますよ、他の坊さん達は、屹度遅かれ早かれ

「腸振り」をあの人に掛けるに違ひありませんよ。」

斯ういふ結構な豫言を後に殘して、侯爵夫人は肩を出して居る婦人等凡ての先頭に立つて退出した。

四十恰好の獨身女と二人のクエイカーとは、卑む可き世俗的の連中が居なくなつたので、厄介拂をした様に思つて喜んだ。そして質問を以てグアルナツチ教授を包圍攻撃した。その現代の洞墳が何處にあるか、眞實云つては悪いか？幾人位其處に集るか？女も来るか？如何いふ題目に就いて話があるのか？サンタンセルモの僧侶等は如何云つて居るか？それから、その人の経歴に就いて何事か知れて居るか？教授は必死になつてその質問を受流して、唯だサンタンセルモ僧院の僧侶の一人の云つた「羅馬の中の各教區にベネデット」が一人宛居つたならば、羅馬は眞實神聖なる市になるだらう」といふ言葉を彼等の前に繰り返す他は何事も語らなかつた。けれども、他の婦人等が歸つて仕舞つて、馬車の来るのを待つて居たアルパチナ夫人と無言の婦人だけが殘つたのを見た時に、彼は前者——彼とは親しい朋友の間柄である——に向つて、自分は喜んでもつと話してもよいのであるが、もう一人の方が未知



の人であるから如何も困る、何卒自分をその方に紹介して呉れまいか、と云つた。アルバチナ夫人はこの儀式を行ふ事をすっかり忘れて居たのであつた。

「この方はグアルナツチ教授です。之は妾の親しいお友達で、テサレさんと仰有います。」  
「洞墳」とは彼等三人が今現に居るその廣間の事である。始の中は集會はアレヌラ町のセルヴァの寓居の一室で開かれて居た。其場所が餘り適當でないやうに思はれた理由は色々ある。それでグアルナツチは弟子になつた時に自分の家を提供した。集會は一週間に二度此處で開かれる。始終集る者の中には、セルヴァ夫婦、セルヴァ夫人の妹、數人の僧侶、今し方歸つて行つたヴェネチアの婦人、數人の青年などが居る。その青年の中で、今夜ベネデットと一緒に來て、又一緒に歸つて行つた、彼の所愛のアルベルテイといふ者と、遠からずカトリック教徒になる筈のウヰテルボといふ猶太人とを殊に擧げる事が出来る。この猶太人にはベネデットは大に望を屬して居る。この他に印刷屋の職工が一人と、美術家が數人と、それから代議士が二人までも缺かさずに來る。この集會の目的は、基督を慕つては居てもカトリック教を忌み嫌ふ人々に、カトリック教とは實際如何なるものか、カトリック教の生命たる破壊すべからざる本質は如何なるものかを知らせ、又、多くの人の心にカトリック教を厭

ふべきものとなす所の種々の形式は純然たる人的性質のものであるといふ事、それ等の形式は内部の神的要素の發達と、外部の感化力、即ち科學と、社會の良心との感化力が結合する事に因つて變化すべく、現在變化しつゝあり、又永久に變化して止まないものであるといふ事などを教へ示すにある。ベネデットは集會に出席する許可を人に與へる事に就いて中細心な注意を拂ふ。人の靈魂を取扱ふといふ困難な仕事にかけては彼程に熟練した者はない。彼は靈魂の純潔を尊敬し、小な者に對しては己を低うし、高きものに對しては己も共に高く翔り、臆病なものに對しては心を苦しめぬやう注意深き言葉を用ひて教へる。

「侯爵夫人は、あの人が異端信者の首領で、これに従ふ僧侶等は異端信者だらうと申されましたが、決して左様では御座いません。ベネデット氏に限つて異端だの分裂だのといふ虞は少しもありません。直この前の集會の時に、あの人は、分裂や異端は、常にそのもの自身に非難すべきものである許でなく、教會から靈魂を奪ふのみか、進歩の要素をも亦奪ふ故に、教會に大なる災害を蒙らせるものである。如何してかといへば、若し改革者が教會の支配の下に留つて居たならば彼等の謬見は死滅するだらう。そして殆ど凡ての場合に於いて或る程度まで謬見に結合して居る所の眞理の要素、善の要素は、教會の身體の中に於いてその生



命を形づくるものとなるからであると説かれました。」

グアルナツチ教授の話聞いてアルパチナ夫人は、それは何れも美しい考である、若し實際さういふ次第ならば、侯爵夫人の豫言は必ず實現しないに相違ない、と云つた。

教授は笑ひながら云つた。

「『腸振り』の豫言の事で御座いますか？ 決して、決して！ そんな事は唯今はやりません。昔からでもそんな事をやつた事はあるまいと私は思ひます。それは皆嘘で御座いますよ！ そんな事を信じてるのは唯だ侯爵夫人や、羅馬に居る侯爵夫人と同じやうな或る一部の人間だけです。或る羅馬の僧が——僧で御座いますよ、宜う御座いますか——或る僧が態々ベネツトー氏に警告して、用心しろと申しました。けれどもベネツトー氏はその僧に、二度と用心しろなど云つてはならないといふ事を覺らせました。ですから『腸振り』ではありません——決して——ですが、併し迫害はありませうよ！ 本當に！ 先頃イエネへ行つて居つた、あの二人の羅馬の僧は其後眠つては居ませんでした。侯爵夫人なんぞにはこんな事は云へませんから、先刻は何んにも申し上げませんでした、いろんな困つた事が起りかけて居るんで御座います。ベネツトー氏の行く先々はすつかり目を付けられて居ますし、氏

がどんな事を話すかはマイダ教授の子息さんの奥さんを利用して、懺悔の時にちやんと探り出されてありますし、この集會の事も知れて居るのです。セルヴァ氏が出席するといふ事だけが、既にこの集會にさういふ人々の嫌な性質を附着ける理由に充分あります。そして彼等は俗人をば如何するといふ権利もありませんから、彼等はごうも法律の助を借りてベネツトー氏を責めやうとして居るらしい御座います。警察と裁判所に訴へやうとして居る様子です。お驚きなさいましたらう？ 併し本當で御座いますよ。唯今の所では未だ何も決定して居ませんし、何も實行せられては居ませんが、彼等は計畧を廻らして居るのです。斯ういふ事は或る外國人の教役者に聞いたのです。その人は以前に一度馬鹿氣た事を饒舌つた事がありましたが、今度は良い事を饒舌つて呉れた譯です。刑事訴訟を提起する爲めに今材料を製造中なのだ相です。」

無言の婦人は戦慄した。そして始めて口を開いた。

「如何してそのやうな事が出来ますので御座いますか？」

「貴女は、過激派の中の或者、法衣を着て居る非讓歩派の中の或者が、如何な事までも行つて退けるか、御承知御座いますまい。斯ういふ連中に較べてみれば、俗人の非讓歩派の人



などは宛然小羊のやうなものです。彼等はイエネであつた或る不幸な出来事を利用して居ます。併し私共は近頃新しく起りました或る出来事の爲めに大變氣を引き立てられて居ります。この事を誰彼の差別なく無闇に澤山の人に云ふのは愚な事ですが、兎に角、これは實に重大な事なので御座います。」

教授は此處で暫時言葉を切つて、自分の話によつて喚起された強い好奇心を樂んだ。二人の婦人は黙つて居たけれども、好奇心は後を聞き度相な彼等の眼の光の中に現れて居た。彼は話を續けた。

「先日最高監督——氏の書記をして居る若い獨逸人の僧が、サンタンセルモへ何にか相談に參りました。その訪問の結果、ベネデット氏がサンタンセルモへ喚ばれました。サンタンセルモのベネディクト僧等はベネデット氏を大變愛し、又尊敬して居ます。で、サンタンセルモへ行きますと、聖父様の御殿へ伺候して、謁見を願ひ出る積はないかと尋ねられました。同氏は、自分は此の願望を抱いて羅馬へ來たので、今まで神より出づる徴を待つて居たのであるが、今その徴が顯れたのだ、と答へました。それから聖父様が屹度同氏に喜んで御面會なさるだらうといふ事を聞いて、同氏は謁見を願ひました。この事は或る獨逸人のベ

ネディクト僧がチヨヴァニ・セルヴァ氏に話したのです。」

「で、何時行きなされる事になつてますの？」

とアルパチナ夫人は問うた。

「明後日の晩で御座います。」

教授は猶言葉を續けて、ヴァティカン宮の方ではこの事柄に就いて秘密を嚴守して居るし、ベネデット氏はこの事を他人に話す事を禁じられて居るから、あの獨逸人の僧さへうつかり口を交らさなかつたら、何事も外部に洩れなかつたのだらうに、兎に角、ベネデットの味方の者はこの謁見が多く利益を生み出すだらうと思つて居る、と云つた。アルパチナ夫人はベネデット氏が法王に如何な事を話す積りだらう、と問うた。教授は微笑みながら、ベネデット氏はこの事に就ては何人にも心中を明かさなしいし、又誰も無遠慮にそんな事を問うて居る者もないから判らないが、多分彼はセルヴァの辯護をして、彼の著書が禁止書目に編入せられないやうに願ふだらう、と思ふと、答へた。

「そんな事を話したつて別段大した事ぢや御座いませぬね。」

とアルパチナ夫人は低い調子で云つた。



ジャンは低聲で同意を表する唖を發した。

「本當に大した事ぢや御座いませぬね！」

と彼女は殆ど教授の非を責めるやうな調子で叫んだ。教授は、彼女があれ程永い沈黙の後突然このやうな叫聲を出したのを聞いて、大變驚いた様子であつた。そして、自分はベネテットが他の事を法王に話さないだらうと斷言する積では決してなかつたので、唯だあの一事をば屹度話すだらうと思ふと云ふ積りだつたのだ、と辯解した。アルパチナ夫人は、何故法王がベネテットに面會したいと思ふのか解らない、ベネテットの味方の者はこれを如何解釋するか？セルヴァはこの事を如何思つて居るか？と云つた。嗚呼！これは誰にも解らない、セルヴァにも、其他の者にも、と教授が答へた。

「妾には解つて居ます！法王様は前に、アレツシアの監督をなすつて居らつしやつた事は御座いませぬか？」

とジャンは他人の頭を苦しめて居る事を自分だけが解し得る事を喜んで、熱心を面に現して云つた。

ダアルナツチは感心したやうな、冷かす様な微笑を浮べて答へた。嗚呼！奥様はベネテッ

ト一の經歷を能く御存知と見える。奥様は羅馬で密々噂をされては居るが、本當だと思はない人も多い或る事柄が、事實だといふ事を御承知らしい。併しながら貴女は法王が一度もアレツシアの監督だつた事はないといふ事實を御存知ない。法王は二個所で監督の椅子を占た事はあるが、それは南部地方である。——ジャンは返答をしなかつた。彼女は危く自分の秘密を自曝しやうとした我身の愚を深く恥ぢて、我身ながらも忌々しく思つたからであつた。アルパチナ夫人はベネテットが法王に關して如何いふ意見を有つて居るのか知り度いと云つた。

教授は答へた。

「いや、法王といふものに就きましては、ベネテット氏は唯だその職務のみを認めて、是を尊敬して居られるのです。或はさうぢやないかも知れませんが、私はさうだらうと信じて居ります。私は同氏の口から法王といふ人物に就いての話聞いた事は御座いませぬが、法王といふ職務に就いての話は聞いた事が御座います。或晚同氏は法王職を題として非常に立派な話をされました。そしてカトリック教と新教とを比較して、教會政治に關する自分の理想を述べられました。その理想は、上には最高權を執る者があつて、下の者には正しい自



由を與へるといふのです。新法王は如何いふ御方だか、未だ殆ど何も知れて居ません。噂に  
よりますと、何でも聖い、賢い、病身で弱い御方だ相です。」

教授は暗い階段を降りて、馬車まで二人の婦人を送つて行く途中で云つた。

「甚だ心配な事には、どうもベネテツト氏は長く活くまいと思はれるのです。尠くとも  
マイダ氏は其を恐れて居ます。」

教授に手を引かれて階段を降りて行つたアルパチナ夫人は、歩きながら叫んだ。

「まあ！可哀相に！如何しなかつたのです？」

「判りませんな。どうも何か不治の病らしいです。これはスピアコに居られた時分に患つ  
た腸壁扶斯の結果でせうが、併しそれよりも苦行や、斷食をして、酷い生活をせられた結果  
でせう。」

それから二人は無言で長い階段を降りて行つた。降り切つて仕舞つてから、彼等は漸く同  
伴者の居ない事に気が付いた。教授が急いで引き返してみると、ジアンは二番目の中段の欄干  
に縋りながら立つて居た。暫時は彼女は物も云はず身動もしなかつたが、纏て低聲で云つた。

「真暗ですから——」

グアルナツチは事情を知らないから、彼女が暫時黙つて居た事にも、彼女の聲の低い弱い調  
子にも気が付かなかつた。彼は彼女を自分の腕に凭らせて、連れて降りる途中で、階段の暗  
い事に就いて言譯をして、これは吝嗇な家主の罪だと云つた。ジアンは自分をグランド・ホ  
テルまで連れて行く筈の、アルパチナ夫人の馬車に乗つた。アルパチナ夫人は途すがら、今  
し方グアルナツチに聞いた事に就いて遺憾の意を表した。ジアンは口を開かなかつた。彼女  
の沈黙は友の心を苦しめた。

「貴女は今晚のお話がお氣に入りませんでしたか？」と彼女は云つた。彼女はジアンの宗  
教的信仰に就いて全く何も知らなかつたのである。

「いゝえ。何故ですか？」

「別に何でもありません！妾は又貴女がお氣に入らないやうな御様子だと思ひました。で  
は聞きにいらつしやつた事を後悔しちやゐらつしやらないのですね？」

ジアンはアルパチナ夫人の手を握つて答へた。

「本當に有難う御座いました！」



彼女の聲は低うて沈んで居たが、手を握り締める力は粗暴と思はれる程であつた。アルバチナ夫人は吃驚して、「おやまあ斯ういふ人がいづれ『聖靈婦人會員』といふやうなものになるのだらう！」と心密に思つた。そして聲高に云つた。

「妾なんぞは屹度以前から信じて居ます宗教、非讓歩派の宗教を離れずに居る事でせう。非讓歩派の人達はパリサイか何か知りませんが、若し従來の宗教をそんなに直したり、繕つたりしますと、終には顛覆つて、ちやんと立つてるものが無くなつて仕舞ふかも知れませんわ。それに、あのベネデットといふやうな人の云ふ通りにして居ると、餘り變へなければならぬものが多過ぎて困るでせう。ですからいけませんわ。けれども、あの人の云ふ事は本當に面白う御座いますのね。如何かして一度あの人に會つてみたいじやありませんか。如何しても會はなければなりませんわ！殊に何時死ぬかも知れないといふんですもの。貴女もさうお思ひなさいませんか？如何すれば會へるか知ら？一つ考へてみませう。」

「妾は會ひ度くは御座いませぬ。」  
とジアンは急いで云つた。

「え、本當？それはまた如何してなんです？その謎を解いて聞かして下さいな！」

「いえ、何も理由があるのちや御座いませぬ。妾は別にあの人に會ひ度くないといふまでですの。」

「可笑しな事！」

とアルバチナ夫人は思つた。馬車はグラランド・ホテルの入口の前に停つた。

玄關でジアンはノエミと、彼女の姉婿とが出て来るのに遇つた。

「到頭歸へつて來なすつたわ！急いで走つていらつしやい。弟さんはジアンが遅いといつて、酷いけんまくですよ！私等は今まで側に居たのですが、お醫者さんが見えたので出て來ました。」

とノエミが云つた。

テサレ姉妹は二週間前から羅馬へ來て居た。十月初旬の寒い、濕つた天氣と、健康上の懸念と、例の計畫許で實現しない小説に續いて計畫された、ベルニニに關する論文とに勤められて、カルリノは豫定よりも早くアルバチナ夫人の希望を満足させるため、冬に入らぬ中にテイエド別荘を發つて、氣候温和な羅馬に移つた。之は彼の姉に取つて非常な喜であつた。



羅馬へ来てから二三日目に、彼は軽い氣管支炎に胃された。彼は如何しても自分は肺病になつたに違ひないと云つて、冬中蟄居する積りで居間に閉ぢ籠つて、一日に二度醫師の診察を受け度いと云つた。そして無慈悲な自己中心主義を以てジアンを虐げて、彼女に自由を與へる度敷を勘定せん許りであつた。彼女は自分を弟の奴隸として、理も非もなく己が肩に積み足された重荷——彼女の、姉としての愛情の樹に溢れる程の犠牲の重荷を、喜んで負つて居る様であつた。彼女は心の中で、その犠牲を嬉しい熱情を以てベネテットに捧げて居た。彼女はセルヴァ夫婦とノエミとはちよいと會つたが、面會の場所は彼等の家ではなく、グラランド・ホテルであつた。セルヴァ夫婦までもこの非凡な、實に美しい、實に優しい、沈み勝ちな女の魔力に囚はれて居た。ベネテットに就いて彼女がグアルナツチに聞いた事は、既にノエミに聞いて知つて居る事許であつた。併しマイタ教授の悲しい意見は今夜始めて聞いた。ノエミはジアンが可哀相だと思つたからでもあるが、又自分の感情を外に現はすまいとも思つたので、この一事を彼女に隠して居たのであつた。

カルリノは慳貪に彼女を迎へた。醫師は彼の脈が少し速かつたので、早速これは痲瘋脈だと診断した。それで、病態が重いから大切になさらねばなりません、なご暫時戲言を云つて歸つて行つた。カルリノはジアンに、こんなに永く何處をうろついて居たのか、と語氣荒く問うた。ジアンは隠さずに話したが、併しベネテットの本名だけは云はなかつた。

「姉さんはそんなに立聞なんかして、耻かしいとも思はなかつたの？」  
と彼は云つた。そして姉に返事をする隙も與へないで、近頃發見した、彼女の行爲の新傾向に就いて不服を唱へ始めた。

「明日あたりには、姉さんは懺悔に出掛けるんだらう。その翌日には祈禱文を唱へるんだらう！」

彼の平素の寛容な、懇愼な言葉と、僧侶に對して表す妙からぬ友情の下には、紛れも無い反宗教的熱狂が潜んで居た。自分の姉が何時かは僧侶と、信仰と、敬神の行爲とに近付くかも知れぬと思うと、彼は殆ど氣が狂ふ許りに腹が立つた。

ジアンはそれには答へずに、新聞を讀んで聞かさうかと、大人しく尋ねた。彼女は毎晩カルリノに新聞を讀んで聞かせるのを常として居たのであつた。カルリノは讀んで聞かせて欲しくない、膠も無く答へた。そして、何ともないのに、何處からか風が這入つて寒いと云



つて、尠くとも十五分間程、ジアンに蠟燭を持たせて、戸や、窓や、壁や、それから床までもを、隙間が無いか、隈なく調べさせた。そして、それが済んでから、やつと寢室へ行けど云つた。

けれども、ジアンは自分の部屋へ這入つた時に、寢やうども、着物を脱がうとも思はなかつた。彼女は燈火を消して、寢臺に腰を掛けた。街路を馬車の走る音、廊下を通る足音、女の着物のさら／＼擦れる音などが聞えたが、闇の中に身動もせずに腰を掛けて居る彼女の耳には這入らなかつた。彼女は、あの恐しい「あの人が長くは活くまいか心配です」といふ言葉を聞いて殆ど氣絶しさうに思つてから、グアルナツチ教授の腕に縋つてあの家の階段を降りて来る中に、自分の心を全く奪つて仕舞つたあの考、あの思惑だけを心に思ひ耽る事が出来、また心の眼で其を見る事の出来るやうに、燈火を消したのであつた。アルパチナ夫人と一緒に馬車に乗つて居る中も、弟と共に彼の居間に居る中も、彼等と言葉を交へねばならなかつた時にも、種々雑多の事に注意を拂はねばならなかつた時にもその思惑、燃えるやうな心が意志の前に提出するその提案は、絶えず彼女の胸の中に閃いて居た。併し今はもうそれも閃かなかつた。ジアンは自分の胸の中に靜に横はるその思惑を熟と見守つた。闇の中に身動も

せず寢臺に腰を掛けて居るこの姿の中に、二個の魂が黙つて相對峙して居た。情に激し易く、愛の前に凡ての物を必ず犠牲として捧げ得ると信ずる、謙遜なジアンが、自それと心附ない倨傲に満ちて、硬い冷い眞理の所有に満足して居るジアンと、力を競つて居た。街路を通る馬車の音は消えんとして、廊下の足音や、衣擦の音も跡切れ勝ちになつた。不意に二個のジアンは再び相混つて一となつたやうに思はれた。そして一となつたジアンは思つた。

「あの人が死んだといふ報知が届いたら、妾は自分に『他の事は兎に角、お前はあの事だけにしたぢやないか』と云ふ事が出来るだらう！」

彼女は起ち上つて、電燈の拵を振ちて、机の前に腰を掛けた。そして一枚の紙を選び取つて、次の様に書いた。

「——年十月二十九日夜、

ビエロ・マイロニ様へ、

妾は信ず。

ジアン・テサレ。

書き終つて、彼女は其の嚴肅な言葉を永く、永く見詰めた。



永く見詰めれば見詰る程、二個のジアンの間隔が益々廣くなるやうに思はれた。自夫れと心附かない倨傲に満ちたジアンはもう一つのジアンを壓倒して、殆ど一溜もなく打拉いだ。激烈な痛恨の情に心を満たされて、彼女は如何にしても主張する事の出来ない、如何にしても自欺く事なくしては書く事すら出来ない言葉を以て汚された、その紙を引裂いた。再び燈火を消してから、彼女は全能の神——若し人々の信するが如く、彼果して存在するならば——を残酷よと責めて、己が手で造り出したこの闇黒の中で、止處も無く泣き顔れた。

其二

聖彼得寺院の時計が八時を打つた。ベネテットはポルタ・アンゼリカ町の角で小さい圓の人々を離れて、唯一人ベルニニの柱廊へ這入つて、青銅の門の方へ足を向けた。彼は歩を止めて、噴水の音に耳を澄し、方尖塔の周圍の四個の洋燈臺の火が房になつて居るのや、左手の噴水池から高う上る水が、月の顔の前に不透明に顛うて居るのを眺めた。五分間の後、或は十五分間の後には、彼は法王の面前に立つてあらう。彼の心はこの頂點に集中して、不漸く昇騰してきら／＼光る水が、左手の大きな噴水の絶頂で揺ぐやうに、顛うた。ヴァテイカン宮前の廣場には人影一つ見えなかつた。向側の柱廊の頂上に、固くなつて立つて居る聖徒の

像の外は、彼がヴァテイカン宮へ這入る姿を見る者は無いであらう。その聖徒と噴水とは聲を揃へて彼に語つて居た。汝は今嚴肅なる時機を通過しつゝあると信じて居るけれども、この今といふ時の一原子も、汝自身も、法王も、纏て此處を去つて忘却の王國の中に永久に葬り去られて仕舞ふであらう。而も噴水はその單調な歎聲を、聖徒の像はその無言の沈思を、猶續けて行くであらうと。けれども彼は、真理の言葉は限無き生命の言葉であると感じた。そして、心の中に再び思想を集中して、二日この方、彼が若し法王の面前に立つ場合には、聖靈がこの真理の言葉を彼の胸の中に呼び醒し、それを彼の唇に導き給はむ事を祈つて居たやうに、今眼を閉ちて、強烈な熱心を以て祈願を凝した。

彼は八時と八時十五分との間に、誰か彼を迎へに出るであらうと豫期して居た。八時十分五分は既に過ぎたのに誰も出て来なかつた。彼は青銅の門の方を向いて、凝と眺めた。門の扉は片方だけ開いて居て、その奥の燈火が見えた。小な、不注意な蛾が、欠伸をする獅子の脛の中に飛び入る事があるやうに、折々侏儒のやうに小さく見える人が、少しづつ連れ立つて、開いた門の中へ這入つて行つた。到頭一人の僧が奥から門の所まで出て来て、手招をした。ベネテットは近付いた。



「貴女はサントセルモの近邊から來られたのですね？」

と僧は云つた。この質問は合言葉として豫て打合はしてあつたのである。ベネデットが然りと答へると、僧は這入れよと手真似で示した。

「何卒此方へお出で下さい。」

ベネデットは彼に隨つて行つた。二人は兩方に立つて居た法王附の衛兵の間を通つたが、衛兵は僧に敬禮した。右へ曲つて二人は聖階を昇つた。サン・ダマリの中庭の入口にも衛兵が居て、敬禮した。僧は彼等に低聲で何か命じたが、ベネデットには聞えなかつた。二人は圖書館の入口を左に、法王の室へ通ずる戸口を右に見て、中庭を横切つた。遙上に、廊下の硝子が月光を受けて光つて居た。ベネデットは嘗て故法王に謁見を許された時の事を想ひ起して、この様な妙な道筋を通つて案内せられるのを驚き怪んだ。中庭を一直線に横切つてから、僧は「モサイツク階」といふ小さな階段に通ずる狭い廊下へ這入つて、右手の「三角階」と呼ばれる階段の頂上にある戸口の前に立ち止つた。

「貴方はヴァティカンの案内は御承知ですか？」  
と彼は問うた。

「博物館と廊下とは存じて居ります。この前の法王様に一度御私室で謁見を許された事が御座いますので、併しその他の場所は少しも存じません。」

「では、此處へお出でになつた事は無いのですね？」

「はい。」

僧は前に立つて、小さな電燈に朦朧と照らされて居る階段を昇つて行つた。階段の一番下の部分を昇り詰めて中段に達した時に、突然、電燈が悉く消えた。ベネデットは中段に片足を掛けた儘立ち止つて、案内の僧が右手の階段を急いで駆け昇る趑趄を聞いた。それから四邊は寂然と静まり返つた。ベネデットは電燈に何か故障が出来た爲め、偶然に消えたので、僧が再びそれを點けに行つたのであらうと想像した。彼は待つて居た。燈火も點かず、音もせず、人聲も聞えなかつた。彼は中段に昇つた。闇の中に兩手を伸べてみると、左の手が壁に觸つた。彼は探足をしながら右の方へ進んだ。彼は中段から二筋の階段が分岐して居る事を、足で觸つてみて知つた。僧の歸つて來る事を露疑はずに彼は再び待つて居た。

五分、十分と経つても僧は歸つて來なかつた。一體何事が起つたのであらう？人々は自分を欺いて、愚弄しやうと思つたのであらうか？若し左様だとすれば何故であらう？ベネデッ



ト一は臆測を逞しうしても何の役にも立たない疑念に深く思案を費す事を欲しなかつた。彼はそれよりも、この場合に如何するのが一番適宜であらうかと打ち案じた。この上まだ便々と待つ事が宜いとは思はれぬ。引き返すのが宜からうか？それともつと上へ昇つて行く方が宜からうか？それが宜いと思すれば孰の階段を選ばうか？彼は深く己の心を探つて、其處に恒に在す者の聖旨を伺つた。

否、引き返すまい。引き返すといふ事は面白くない。彼は孰を選ばうかと考へてもみずに、二筋の階段の——召使の部屋に通ずるのを昇り始めた。その階段は短かつたのでベネテットは直また一つの中段に着いた。彼は先刻あの僧が澤山の段を止らずに急いで駆け上る音を聞いた。そしてその聲音はつと上の方へ行つて消えた。どうもこの階段ではないらしい。彼はまた降りて来て、もう一つの階段を昇つてみた。この方が長かつた。僧はこの階段を昇つて行つたに相違ない。で、彼は僧の後に隨いて行く事に定めた。

頂上に達して、低い戸口を通り抜けると、月に照らされた廊下に出た。彼は四邊を見廻した。右手の程近い處に門があつて、この廊下と別の廊下とを別つて居た。二つの廊下は門の處で出會つて、直角を成して居た。左方に、遙向にある扉の閉つた戸口の處で、この廊

下は終つて居た。満月は大きな硝子張の箇所から敷石の上に映し込んで、またサン・ダマリの中庭の横を照して居た。背景には、ヴァティカン宮の眞黒な、巨大な兩翼の間から、小さな家屋の屋根や、チエシ別荘の樹木や、サントノフリオ寺院の燈火が見えた。左手の戸口も、右手の門も閉ちてあるやうであつた。幾度も、幾度も、ベネテットは左右を見廻した。漸々彼は以前の印象を呼び起し始めた。左様だ、前に一度この廊下を通つた事がある。ヴァティカン宮の讀師を勤めて居る或る知人と連立つて、ヴァティカン宮のアツピア大道ともいふべき碑銘の廊を見物に行く途中であの門を見た事がある。左様だ、もうすつかり思ひ出した。左手の、廊下の端にあるあの戸口は内務部長の室に通じて居るに違ひない。あの門の彼方の廊下はチヨヴァニ・ダ・ウテイネの廊下で、その廊下に面して開いて居る大きな格子窓はボルヂアの間の窓である。そして、碑銘の廊の入口は丁度あの角にあるに違ひない。以前来た時には、あの門の側に瑞西人の衛兵が一人立つて居たが、今夜は其處に誰も居なかつた。四邊は全く人氣が絶えて、右も左も、沈黙の領する所となつて居た。

内務部長の室の戸を開けてみるなどは、思も寄らぬ事であつた。ベネテットは門の扉を押した。それは開いて居た。彼は碑銘の廊の入口の前に出て立ち止まつた。再び彼は耳を







の上でベネデットを棄て、行つた僧！彼は足早に出て来て戸を閉ぢた。そして別段驚いたやうな様子も無く、ベネデットに云つた。

「もう此處は狹下の御前です。」

彼はベネデットに這入れよと手真似で知らせ、再び戸を閉ぢて、自分は室外に留つた。室に這入つた時に、ベネデットは唯だ小な卓と、緑色の笠を懸けた小なラムブと、此方を向いて卓の彼方に腰を掛けて居る白い姿の他は、何物をも見別る事が出来なかつた。彼は跪いた。白い姿は腕を伸して、云つた。

「お起ち、如何して来た？」

白髪で輪廓を取つた、珍しい程優しい顔には、驚の色が浮んで居た。南部辯の響を帯びた聲は、感動を現して居た。

ベネデットは起つて答へた。

「青銅の門から、何處で御座いますか存じませんが或る處迄は、唯今まで狹下の御側に居られました方に連れられて参りましたが、其處からは私獨りで参りまして御座います。」

「ではお前はヴァイカンの案内をよく知つて居るのか？私が此處に居ると、誰か云う

たのか？」

ベネデットが何年も前に一度だけヴァイカンの博物館と、廊下と、碑銘の廊とを拜觀に来た事があるが、其時には廊下へ出るのにサン・ダマリの中庭を通らなかつた。又、今夜法王が何處に居られるのか少しも知らなかつたのであると答へた時に、法王は無言のまゝ、暫時、思に沈んだ。纏て自分の向の椅子を指差しながら、優しい、情の籠つた聲で云つた。

「子よ、お掛け。」

ベネデットは、若し法王の禁慾的な優しい顔を、我を忘れて凝視して居なかつたならば、その尊貴な相手が小な卓の上に散らばつて居た書類を一つに纏めて居る間に、周囲を見廻して驚に打たれた事であらう。實際此處は妙な應接室であつた。古い畫や、古い書物や、古い家具が、塵に塗れて混沌として入り亂れて居る有様を見れば、整理中の何處かの圖書館か博物館かの控室とも思はれやう。けれどもベネデットは周囲の様子には氣も付かず、得も云はれぬ純潔と慈愛との影を宿した、瘦せた、蠟のやうな法王の顔を、只管に眺め入つて居た。彼は進み寄つて、跪いて、法王が優しい威嚴を以て「我に非ず、彼得に向ひてなり。」と云ひながら、彼の方へ差し伸べた手に接吻した。



それから彼は腰を掛けた。法王は一枚の紙を彼に渡して、小なランプを彼の方に押し遣つた。

「それを御覽。その筆蹟に覺えがあるかの？」

ベネテットはそれを見て戦慄した。そして敬虔な悲から出た歎聲を抑へ得なかつた。

「はい、これはもう亡くなりましたが、私が大層愛して居りました聖い僧で、ドン・ヂウゼッペ・フロレスと申します人の手蹟で御座います。」

法王は言葉を續けた。

「では讀んで御覽ん。聲を出してお讀み。」

ベネテットは讀んだ。

「監督臺下、

臺下に宛てたる封筒中に、この拙書と同封したる封印附の小包を、監督臺下に委託仕

候。この小包は、世より姿を隠さざりし以前に於いて臺下も御承知の、かのピエロ・マイロ

ニ氏より、その死後開封すべき旨を以て、拙者に預けられたるものに有之候。拙者は氏が今尙存命なるか、或は又、既に世の人の中に在らざるか、孰とも存せず、尙又、之を確む

る由も無之候。この小包の中には、マイロニ氏が罪深き情慾の火の中より再び神の御許に歸りし時に、氏の見たる超自然的幻の覺書を封じあるものと信じ候。その當時拙者は、全能の神が御自身の何か特別の事業を遂行する器として、氏を選び給ひしには非ざるかと存じ候ひき。拙者は又、その事業の聖なる事は、マイロニ氏の死後に於いて、後日或は豫言と見做さるゝに至るべきこの覺書を熟讀する事によりて、確證せらるべしと存候ひき。拙者は如斯希望を抱き居候ひしかど、その内心の希望をマイロニ氏に知らしめざる方宜しからむと信じ、之を秘する爲に尠からず苦心致候ひぬ。

氏の姿を隠せし日より茲に二年を経候へ共、今日に至るまで氏の動靜に就きて何事をも耳に不致候。臺下、臺下のこの書を読み給はむ時には、拙者も亦既に世より姿を隠し居候べし。臺下、何卒拙者に代りてこの敬虔なる保管の任に當り給はらむ事を願上候。其上は何事にまれ、臺下の善と信じ給ふ方法により、臺下の良心の命するが儘に御取計らひ被下度候。

尙又、この哀なる拙者の魂の爲に御祈り被下度候。

ドン・ヂウゼッペ・フロレス。」



ベネデットは手紙を下に置いて、熟と法王の顔を見詰めながら法王の言葉を待った。

「お前がピエロ・マイロニかの？」

「はい、左様で御座います。」

法王は愉快相に微笑んだ。

「先づ何よりも、お前が未だ生きて居つたのは喜ばしい事ぢや。その監督はお前が死んだものぢやと許り思うての、その包を開封して見た上で、それを基督の代理者に委託するのが自分の義務ぢやと思うたのぢや。これは半年程前、あの聖なる私の前任者が未だ生きて居られた頃の事ぢや。あの方はその事を二三人の最高監督や、私にも仰有つた。其後お前が未だ生きて居るといふ事が判つて、我等はお前が何所に如何して暮して居るかといふ事を聞た。これから少しお前に問はねばならぬ事があるで、間違のない本當の事を答へて貰ひたい。」

法王は真面目な眼でベネデットの眼を覗き込んだ。ベネデットは軽く頭を下げた。

「この覺書の中に、お前がヴェネトに在るあの教會堂の内に居つた時に、ヴァティカンの内で法王と話して居る幻を見たと言書いてある。お前の幻のその一部分の事で、どんな事が思ひ出されるの？」

「私の幻は、私がサンタ・スコラスティカに居ります中に——三年許の間で御座います。私が——私の記憶の中から段々薄れて行きました御座います。これは幾分、サンタ・スコラスティカに居ります。私の靈の師匠が、ドン・チウセツベ・フロレス師と同じ様に、その幻の事を深く考へるなど始終忠告致しましたからだと存じます。それで明瞭に記憶に残つて居ります部分も御座いましたが、不明瞭になりました部分も御座いました。私がヴァティカンの中で、法王陛下の御前に立つて居ります有様を幻に見たといふ事は、確に覺えて居りました。併し唯だその事を見たと覺えて居りましただけで、委しい事は忘れて居りました。處が、つい先程、この室の外の暗い廊下に居りました時に、私がああ幻の中で、或る靈に導かれて法王陛下の御前へ参りましたといふ事を、急に思ひ出しました。私が夜中、闇黒の中に、何處とも判りませぬ處、何年も以前に唯だ一度参りましただけで御座いますから、殆ど全く存じませぬ處に、唯一人居りまして、全く何方へ参りますれば宜しう御座いますやら解りませんので、今や後へ引き返さうと致しますと、心の中に誠に明瞭な、高い一つの聲が聞えまして、私に前へ進めよと命じました。その時に私は今申し上げました事を思ひ出しましたので御座います。」



「それで、お前はこの室の戸を叩いた時に、私が此處に居るといふ事を知つて居たのかの？ お前は圖書館の戸を叩いて居るといふ事を知つて居たのかの？」

「いえ、左様では御座いません。私は叩く積も無かつたので御座います。眞暗で御座いましたから、何も見えませんで御座いました。私は唯だ手で壁を觸つてみて居りましたので御座います。」

法王は熟考へ込んで、暫時黙つて居たが、聽て覺書には「始め黒衣を着けたる人我を導きたり。」と書いてあると云つた。ベネデットはそれを覺えて居なかつた。

「お前も知つて居やうが、唯だ豫言といふものだけでは、聖者ちやといふ充分な證據にはならぬものぢや。お前も知つての通り、今までも現にあつた事ぢやが、豫言的幻が時には——まあ惡の靈などの仕業といふ譯ではないかも知れぬが、我々はその様な事柄には誠に疎いで、全くさうに違ひないとは云はれぬぢやが——人間の天性の中に生れながらに在る力とか、人間の天性よりも偉いが兎に角確に聖者には何の關係もない力とか、何か不可思議な力の仕業である事があるものぢや。その幻を見た時のお前の魂の状態を私に話して聞かせる事が出来るかの？」

「その時私は、神から遠ざかつた事、神の召し給ふ御聲に耳を傾けなかつた事を悔む深い悲と、神の忍耐深い御慈愛を深く感謝する念と、基督を受けたいと深く冀ふ心を感じて居りました。丁度その時の直前に、私の心の眼は、あの福音書にある言葉、すつと以前私が善い生涯を送つて居りました頃に、大層愛して居りましたあの「師來りて汝を呼び給へり」といふ言葉が、黒い地にはつきりと白く輝くのを見ました。本當に見たので御座いました。ドン・チウセッペ・フロレス師が式を司つて居りまして、勤行が大方終らうとする時で御座いましたが、私は兩手に顔を埋めて、祈つて居りました。その時に幻が見えました。瞬間の事で、電光のやうで御座いました！」

ベネデットの胸は波立つた。この記憶の心に還つて來た勢は、左ばかり猛烈であつた。「あれは幻想でしたかも知れませんが、惡の靈などの仕業では御座いません。」

「惡の靈も時には天の使の装をする事があるものぢや。多分、その時に、惡の靈がお前の衷の善の靈と戦うて居たのかも知れぬ。お前はその後この幻に就いて誇つた事があるかの？」

ベネデットは頭を垂れて、稍や暫時回想した。



「多分——一度、誠に暫時の間で御座いましたが、サンタ・スコラステイカに居ります中に、私の師匠が、院長からだと言つて、教友の法衣を私に呉れました時に一度ありましたかも知れませんが、その法衣はその後イエネに居りました時に取り上げられました。その法衣を興へられました時に、私は暫時の間は、この思掛けない賜物は私の幻の終の部分の眞なるを證して居ると思ひました。そして自分が神の恩寵の目的物であると信じまして、満足之感の強く起るのを覺えました。併し私は早速神が私を宥し給はん事を願ひました。そのやうに私は今、猥下が私をお宥し下さる事を只管に願ひます。」

法王は物を云はずに、指を廣く擴げた手を舉げて、又それを下して、赦罪の意を表した。それから彼は小さな卓の上にある種々の書類を調べ始めた。そして、それを披いて見ながら、幾通かを氣を付けて讀んで居る様子であつた。聽て彼はそれを下に置いて、一包に纏めて、片脇に押し遣つて、そして又沈黙を破つた。

「子よ、私はもつとお前に尋ね、ばならぬ事がある。お前は今、イエネの事を云うたの。私はつい近頃迄そのイエネといふ處が在るといふ事も知らなんだのぢやが、今度どんな處か委しう聞いた。實を云うと、お前が如何い譯でイエネへ行つたりなごしたのか、私には

頓と解らぬ。」

ベネデットは靜に微笑を洩したが、法王が猶も言葉を續けて行くので、話中に口を出し度くないと思つて、自分の行動を辯解しやうとはしなかつた。

「イエネへ行かうと思つたのは間の悪い考ぢやつた。イエネで今本當にこんな事が起つて居るか、知れたものではないので。彼處に居る者で、お前に好意を有つて居ぬ者がある事を、お前は知つて居るかの？」

ベネデットは之に答へて、猥下が自分に返事を強ひられない事を懇願するだけで、その他を云はなかつた。

「うむ、解つた。お前の願は誠に基督者に相應しいものぢやと云はねばならぬ。お前は答へぬでもよいが、併しお前は色々な罪を被せられて居るぢや。お前はその事を知つて居るかの？」

ベネデットは、一つたげ罪を被せられて居るといふ事を知つて居る。知つて居るといふよりは寧ろ、罪を被せられて居るかも知れぬと想像して居る、と答へた。法王はそれを聞いて當惑の色が深くなつた。ベネデットの方は泰然として居た。



「お前はイエネに居る頃奇蹟を行ふと揚言した。そしてその大言が原因となつて、お前の住居の中で或る不運な男が死ぬやうになつた、といふ訴をせられて居る。その訴をした人々は、その男はお前が飲ました或る飲物の爲めに死んだのぢやとさへ斷言して居る。お前は人々にカトリック教徒のやうではなく、新教徒の云ふやうな事を説教したと訴へられて居る。それから又——」

法王は蹴踠つた。處女のやうに純潔な心を有つた彼は或る事柄を口にする事を忌み恐れた。

「村の學校の女教師と懇意にし過ぎたと訴へられて居る。子よ、お前の返答は如何ぢやの？」

ベネデットは落着いた様子で云つた。

「聖父様、聖靈が貴方の御心の中で私に代つて答へ給ひつゝあります。」

法王は甚く驚いて、ベネデットを見詰めた。彼は大に驚いた許でなく、又頗る心安からず覺えた——ベネデットが彼の魂の中を洞察したかのやうに思はれたからであつた。薄紅が彼の顔を染めた。

「それは如何いふ事ぢやの？」

「神は私に貴方の御心を讀んで、貴方がその訴を孰も信じておいでなさいませぬ事を知る事を許し給ひました。」

このベネデットの言葉を聞いて、法王は少し眉を擧げた。

「税下は唯今、私が自不思議な千里眼を有つて居ると稱して居るやうにお考へなすつて居られますが、左様では御座いません。貴方のお顔に現れて居ります或物、お聲の中に響く或物で判るので御座います。私などは實につまらぬ、通常の間で御座います！」

「多分お前は、近頃誰が私を訪問したか、知つて居るぢやらう？」

と法王は叫んだ。是より前、彼はイエネの教區の教師を羅馬へ召喚して、ベネデットの事を問うた。教師は法王に謁見してみれば、イエネで自分を威し付けたあの二人の熱心家は霄壤の差があつて、自分の氣に入つた法王だったので、彼は自分の良心と斯く容易く和解の出来るこの好機會を逸せず、ベネデットを褒めて、褒めて、褒め振つて、悔恨の意を表した。ベネデットはそんな事とは露知らなかつた。

「いえ、存じませんで御座います。」



法王は黙つて居たが、その顔、その手、その全身は深い懸念を現して居た。纏て彼は腰を掛けて居た大きな椅子の背に身體を靠せて、胸の上にながりと首を垂れて、兩腕を伸して、兩手を小さな卓の上に並べて置いた。彼は思に耽つて居た。

彼が椅子に凭つた儘、身動もせず、空を見詰めながら思に耽つて居る中に、小さな石油洋燈の火は火屋の中で赤くなつて燻つた。彼は直それに氣が付かなかつた。氣が付いた時に彼はそれを直して、それから沈黙を破つた。

「お前は本當に何か使命を有つて居ると信じて居るかの？」

ベネデットは謙遜な熱情を面に現して答へた。

「はい、如何にも左様に信じて居ります。」

「では如何してさう信じるかの？」

「聖父様、何故かご申しますと、人は誰も皆、その天性の中に書かれた一つの使命を有つて、世に生れて参りますからで御座います。縦しあの幻を見ませんが、又その他の異常な徴を受けませんが、極めて宗教的な私の天性は、矢張宗教的行爲を私の義務と致しました事で御座いませう。私は如何すれば申し上げられませうか？——この邊でベネデッ

トの聲は感動の爲めに顫うた——「併し申し上げませう、今まで誰にも他の人に申しませんでしたが、今申し上げませう。私は神が、私共凡ての父であると信じて居ります、又さうであるといふ事を知つて居ります。併し私は神の父たる事を私の天性の中に感じて居ります。私の感は義務の感とは殆ど申されませんが、子たるの感で御座います。」

「で、お前は此處で今宗教的行爲を實行するのがお前の義務ぢやと信じて居るかの？」

ベネデットは早既に法王に傾聴を懇請するかのやうに兩手を組み合はせた。

「はい、此處でも、そして唯今。」

斯う云ひ終つて、彼は猶兩手を合はせた儘跪いた。

「起つて。聖靈の教へ給ふ所を憚らずに話さない。」

ベネデットは起ち上らなかつた。

「失禮で御座いますが、私の言葉は法王様御一人のお耳に入れるべきもので御座います。それに此處では、お聞きになるのは法王様だけでは御座いません。」

法王はびくりとした。そして嚴しい、詰問するやうな眼付で彼を見た。

ベネデットは法王の背後の戸口の方を見ながら、眉を上げて、頤を少し上げた。



法王は卓の上にあつた銀の呼鈴に手を掛けて、身振でベネテットに起てよと命じて置いて、その呼鈴を鳴らした。前と同じ僧が廊下に面した戸口に現れた。法王は彼にドン・テオフネロを廊下へ呼んで来いと命じた。——ドン・テオフネロといふのは、法王が嘗て大監督をして居た、南部の一地方から連れて来た、忠實な召使であつた。ドン・テオフネロが廊下へ出て来たならば、その僧の方は圖書館で税下を待つて居るやうにとの事であつた。

「お前は歸途にこの室を抜けて行くのぢやよ。」

と法王は云つた。

數分経つた。二人は無言で僧の歸るのを待つて居た。法王は思に沈んで、小な卓から一度も眼を離さなかつたベネテットは立つた儘、眼を閉ちて居た。そして僧が再び室に這入つて来た時に、眼を開いた。僧が法王の背後のあの胡亂な戸口から室外へ出て行つた時に、法王は手で合圖をした。するとベネテットは低聲で語り始めた。法王は兩手で椅子の脇掛を掴んで、身軀を前に曲げて、首を俯げて、聞いた。

「聖父様、教會は病んで居ります。四つの惡の靈が聖靈と戦ふ爲めに、教會の身體の中に這入つて居ります。その一つは虚偽の靈で御座います。その虚偽の靈は自姿を變へて天の使

となつて居ります。そして教會内の多くの牧者、多くの教師、信徒の中の多くの敬虔な有徳の人々は、天使の言葉を聽いて居ると思つて、謹んでこの虚偽の靈の言葉を聽いて居ります。基督は「我は眞理なり」と宣ひました。それに教會内の多くの人々は敬虔な善い人々までが、心の中で眞理に差別を付けて、彼等の所謂「宗教的」でない眞理に對しては少しの尊敬の意をも有たず、眞理が眞理を破壊する事を虞れて居ります。彼等は神に神を對抗させ、光よりも闇を好み、そして又さういふ風に人々を教育します。彼等は自信者と稱して居りながら、自分等の信仰が如何に弱く、如何に臆病であるか、又凡ての事物を探り究める使徒の精神が自分等とは如何に縁遠いものであるかを覺りません。文字を崇拜する彼等は、成人の口に入れる事を嫌ふ、小兒に適した食物によつて、強ひて成人を生活せしめやうと望んで居ります。彼等は又、神は無限にして變り給はざる御方であるが、人の神に對する觀念は世紀を経るに従つて益々崇高になるものであり、又凡ての神の眞理は皆その通りであるといふ事を覺りません。又信仰が禍なる邪路に迷ひ入つて、その結果宗教的生活の全體が腐敗します事に就ては、彼等がその責を負ふべきもので御座います。何故かと申しますと基督者は、今までに彼の成就した事は無以下で御座いまして、彼は未だ是から、基督の聖言、基督の聖訓を信す



る彼の信仰を、生活の上に實行せねばなりません、彼は未だ是から、萬事を包含する所の「聖意を爲させ給へ」といふ事を、實行せねばなりませんのに、彼は努めてその意志を曲げて、人々の承くるものを承け、人々の拒むものを拒み、斯くして神に奉仕する爲めに最も大なる事を成就したと信じて居りますから御座います。聖父様、今日では、宗教といふものは主として人の智が眞理の儀文に纏り付く事に存するのでなく、寧ろ人の行爲と、儀文の中に含まれたる眞理とが矛盾しない一種の生活を營む事にあるといふ事や、消極的の宗教上の義務を履行し、教會の權威を執る者に對する義務を承認する事のみが、眞の信仰を意味するものでないといふ事を、知つて居る基督者は尠う御座います。そして、この事を知つて居ります者、心の中で眞理に差別を付けません者、眞理の神を拜し、基督教會と眞理とを信する剛毅な信仰を以て燃えて居ります者——聖父様、私はこのやうな人々を存じて居ります——この様な人々は苛酷な反抗に遇ひ、異端信者といふ汚名を着せられ、沈黙を強ひられます。之皆かの虚偽の靈の仕業で御座います。彼は數世紀來教會の中に在つて、傳説的詐僞の蜘蛛の巣を編んで居ります。それが爲めに、今日彼の僕たる者は、昔始めて基督者を迫害した人々と同じやうに、自分等は神に仕へて居ると信じて居ります。税下——」

此時ベネテットは片膝を床に衝いた。法王は身動もしなかつた。彼の頭は前よりも一層低く垂れて居る様に思はれた、その白い頭巾は殆ど全體小なラムブの光の中に在つた。

「私は今日、眞理の神の默示が信仰の中に、科學の中に、又直接不可思議な風に人の靈魂の中に多く現れる事に就て貴方が以前の管轄區の人々にお話しなさいました大なるお言葉を拜見致しました。聖父様、多くの、非常に多くの、僧侶と平信徒との心は聖靈に事へて居ります。虚偽の靈は、天使の装をして、彼等の中に這入る事が出来ませんでした。聖父様、羅馬法王の聖廳を深く愛して居ります彼等の心を助け起す所の言葉を、唯一言なりともお話し下さい。またその行爲を唯一つなりともなすつて下さいませ！虚偽の靈に反抗されて居ります是等の人々の中の誰かに、是等の教役者の中の誰かに、教會全體の面前で名譽をお與へ下さい。彼等の中の誰かに監督の椅子をお與へ下さい、彼等の中の誰かを最高監督に御登庸下さいませ！それから又、聖父様！若し必要で御座いますならば、註解者や神學者に慎重なる態度を以て前進すべき事をお勧め下さいませ。科學は進歩する爲めには慎重でなければなりませんから。併しながら、檢閲官會議や、宗教裁判所などが、教會の誇とすべき人々——眞理に充ちた精神と、基督に満ちた心とを有ち、カトリック教の信仰を保護する爲めに



大奮闘をする人々を、大膽に過ぎるこいふ廉を以て罰するなごいふ事をお許し下さいます  
 な！又、神は人の靈魂の奥深き所にもその御眞理を默示し給ふと、税下も仰有いましたので  
 御座いますから、既に充分多い外形上の儀式が此上更に多くなるやうな事の御座いませ  
 んやうに、それよりも教師等に心の中の祈禱を自實行し、又人に教へるやうお勧め下さい」  
 ベネテットは疲れ切つて、暫時言葉を止めた。法王は垂れて居た頭を上げて、跪いて居  
 る男を見た。その男は擧げた眉の下の悲し氣な、光のある眼で、法王を凝と見詰めて居た。  
 そしてその手のわななきは靈の努力を現して居た。法王の顔には強烈な感動の跡が見えて居  
 た。彼はベネテットに起てよと云ひたかつたのであるが、聲を出せば自分の感情が外に現  
 れるであらうと思つたから、口を開く事を好まなかつた。彼が手眞似で繰り返し、繰り返  
 命じたので、ベネテットは到頭立ち上つた。そして椅子を手許に引き寄せて、猶固く握り  
 詰めて居た手をその背に掛けて、又語り始めた。

「或る種の迷信が人の靈魂を腐敗させますに反して、靈魂の健康に益のあるこの心中の祈  
 禱といふ事を、教役者達が人々に教へるのを怠りますのは、是亦、天の使の姿を装うて教會  
 を惱ませます第二の惡靈の仕業で御座います。これは教役者の壓制の靈で御座います。壓

制の靈を身に宿して居ります僧侶は、人の靈魂が、助言と命令とを求むる爲に直接に、人  
 間の自然に出づる方法で、神と交通する事を喜びません。汝等の目的は正しい！と斯う云つ  
 て、惡魔は彼等の良心を欺きます。その欺かれた良心は又他人を欺きます——汝等の目的は  
 正しい！けれども彼等は自仲保者としては人の靈魂に命令しやうと思ひます。その結果  
 人の靈魂は倦み疲れ、臆病になり、卑屈になります。多分このやうな僧侶は澤山ないかも知  
 れませんが。壓制の靈の犯します罪惡の中の最も悪いものは、これとは異つた性質のもので  
 御座います。彼は昔の聖いカトリック教の自由を抑壓して居ります。彼は律法に依つて服従  
 を強ひられて居ません事柄に於いても、服従を徳の第一位に置かうと致します。彼は屈服の  
 義務の無い場合にも屈服を強ひ、人の良心に背く所の取消を人に強ひん事を望みます。一團  
 の人が善い事業を爲る爲に集れば、彼は必ずその指揮を執らうと思ひます。若しその人々が  
 彼の指揮に服する事を好みませんならば、彼は凡ての補助を彼等から取り去ります。彼は又  
 宗教の範圍以外にまでも宗教上の權威を伸べやうと努めます。聖父様、伊太利國は之を經  
 験して居ります！併し、伊太利國何者で御座いませう！私の申し上げますのは伊太利國の爲  
 めでは御座いませぬ、カトリック教界全體の爲めで御座います。聖父様、貴方は未だ御經驗



がお有りなさいませんかも存じませんが、この壓制の靈は、貴方御自身の上にも、その勢力を振はうと努めますで御座いませう。聖父様、これにお敗けなさいますな！ 貴方は教會の統治者で在らせられます。他の者が貴方を支配する事をお許しなさいますな。貴方の權力が眼に見えぬ他の者の手の手袋となる事をお許しなさいますな。公の顧問官をお置きなさいませ。監督を度々全國會議に御召集なさいませ。監督選舉には一般人民をも干與させて、人民に敬慕せられて居る人々をお選びなさいませ。そして監督には、唯だ凱旋門の下を通り、鐘の音を以て敬禮せられるためではなく、一般人民の事情に通ずる爲め、彼等が基督に倣ふ事を奨励する爲めに、一般人民と交る事をお命じなさいませ。現今では多くの監督は、東洋諸國の國王のやうに、官邸に閉ぢ籠つて居りますが、彼等がそのやうな事を止めて、人民と交る事をお命じなさいませ。そして、彼等に彼得の權威と背馳しない權威を凡てお與へなさいませ。——祝下、續いて申し上げまして宜しう御座いませうか？」

ベネデットが話して居た間、その顔を見詰めて居た法王は、今彼の間に答へて軽く點頭いた。

「教會を腐敗させて居ります第三の惡の靈は、天の使の裝は致しません。彼はそのやうにしては人を欺く事が出来ないといふ事をよく知つて居りますから、普通の人間らしい正直の衣を纏つて満足して居ります。これは貪慾の靈で御座います。基督の代理者たる法王陛下は、この宏壯な宮殿の中に住つておいでなさいませ。曾て監督の官邸に住まはれた頃と同じく、貧しい潔い心を有つておいでなさいませ。多くの尊い牧者はそれと同じ心を有つて教會の中に住つて居りますけれども、心の貧しい事の必要は充分には教へられて居りませぬ。基督が教へ給うた如くには教へられて居りませぬ。基督の役者の居は、財寶を追ひ求める人々に餘り媚び過ぎます。基督の役者の中には、多くの富を擁して居る人の前に、唯だその人が多くの富を擁して居るといふ理由のみを以て、恭しく頭を下げる者が御座います。そして基督の聖言と御模範とを宜べ傳へる者の中に、人が富に伴ふ所の豪奢と名譽とを恣にし、富の齋す所の榮耀榮華に身も魂も共に委ねる事を正しい事と思ふ者が、餘りに多く御座います。聖父様、教役者が、貧富を論せず、利を貪る者に向つて諫め、警告し、叱責する所の愛を、今一層多く示しますやう。お勸め下さいませ。聖父様！——」

ベネデットは話す事を止めた。法王を凝視める眼の中には、熱烈な懇請の色が現れて居た。



「何ぢや？」

と法王は呟いた。

ベネデットは兩腕を廣く擴げて、語り續けた。

「聖靈は私に言葉を續ける事を促し給ひます。是は一朝一夕には成就する事が出来ません事で御座いますが——私共はこの仕事を神と教會との敵の手に委ねて置きませずに——私共、自、基督を宣べ傳へる者共が眞の貧しい生活の模範を世に示す日、貞潔の中に生活するのが今日彼等の義務で御座います様に、貧乏の中に生活する事が彼等の義務となる日を來らせる爲めに、私共自、その準備を致さうでは御座いませんか。そして彼等が貧しい生活を送るに當りましては、基督が彼の七十二人の弟子を傳道旅行に遣はさんと爲給ひました時の聖言を、彼等の範と致さうでは御座いませんか。その日が來ます時は、主は今日人民が教會の長者達に對してさへも胸中に抱いて居りません程の崇敬尊重の念を以て、彼等の中の最も小さい者をも繞らし給ふで御座いませう。彼等は數に於いては尠う御座いませうけれども彼等は世の光となりまして御座いませう。聖父様、彼等は今日世の光となつて居りますでせうか？ 彼等の中には世の光となつて居ります者も御座いますが、大部分は光を放ちませず、

闇を發しも致しません。」

此時法王は始めて悲し氣に點頭いて同感の意を表した。ベネデットは言葉を繼いだ。

「第四の惡の靈は不動の靈で御座います。是は天の使の姿を裝うて居ります。この不動の靈に支配されて居りますカトリック教徒は、教役者も平信徒も、基督を十字架に釘けさせたかの熱心な猶太人と同じやうに、自分等は神を喜ばせて居るものと信じて居ります。税下、今日進歩派のカトリック教に反對して居ります教役者は皆、又教役者に限りませず、進歩派に反對の敬虔な人々も皆、若し基督の時代に居りましたならば、彼等は少しも良心に疚しい處なくして、モーセの名によつて基督を十字架に釘けさせたで御座いませう。彼等は過去の崇拜家で御座います。彼等は教會内の凡ての事——法王の用ゐられまする言葉の辭句や、僧たるに相應しい税下の御心に不快の感を興へる孔雀の羽毛の大扇や、最高監督の徒歩で外出する事を禁じ、最高監督が貧民をその家に慰問する事を彼の威嚴を損するものとする所かの無意味な傳説までも、この儘で變更する事の出来ない事を望んで居ります。保存する事は逆も不可能な事を保存しやうと無理な努力を費して、私共を不信者の胡盧とならせますのは、この不動の靈の仕業で御座います。そしてこの事は神の御前に大なる罪で御座います。」



ラムプの石油は殆ど盡きんとして、相對して居る二個の姿——椅子に凭る法王の白い姿と、直立するベネテットの黒い姿と——の輪廓を描いて居る洋燈の光の小さな環を包んで居る暗黒の環が漸次に内に迫つて来て、漸次に色濃くなつて来た。

「この不動の靈に對抗する爲めに、チヨヴァニ・セルヴァ氏の著書が禁止書目に編入せられる事を御許可なさいませんやう、只管お願ひ致します。」

ベネテットは斯う云ふなり、椅子を片脇に押し遣つて、又跪いた。そして、兩手を法王の方へ伸して、今までよりも一層熱心に、昂奮した様子で話した。

「基督の代理者よ、まだ他にお願ひが御座います。私は罪人で、聖徒と較べられる價値のあるものでは御座いませんが、神の靈は最も卑しい者の口を通じて、語り給ふ事も御座います。昔或る女が法王様に羅馬へ來られる事を懇願しました様に、私は今、税下がヴァテイカンをお出なさる事を懇願致します。聖父様、出ておいで下さいませ。併し、最初は、尠くとも最初だけは、貴方の聖職に關聯した使命を帯びて出ておいで下さいませ。ラザロは日々苦しんで死んで行きます。ラザロをお見舞ひなさいませ！凡ての哀な、苦痛を嘗めて居る人間の中に在つて、基督は救助を呼び求め給ひます。先程碑銘の廊から私はこの羅馬に在

るもう一つの宮殿の前に輝く燈火を見ました。若し苦痛の中に在る人が基督の御名によつて助を呼び求めましたならば、彼處に居る人々は「否」と答へますかも知れませんが、それでも彼等は救助に赴きます。ヴァテイカン宮から基督に答へる答は「諾」で御座います。けれども彼等は助けに參りません。聖父様、恐ろしい審判の日に、基督は如何に宣ふで御座いませう？私のこのやうな言葉が、若し世の人の耳に入りましたならば、ヴァテイカンに忠勤を抽んでる事を公言して居ります人々に、私は罵言讒謔を浴せ掛けられますで御座いませう。併しながら、假令彼等が如何なる罵言讒謔や、非難を私目掛けて投げ掛けませうとも、私は生命のあらゆる限絶叫して止まない積りで御座います——基督は如何に宣ふであらう？基督は如何に宣ふであらう？私は基督に訴へると！」

ラムプの小さな火は益々小さくなつて、漸次暗黒に蠶食せられて行く弱い光の狭い環の中に、ベネテットの姿とては、擴げた手の外は殆ど何も見え、法王の姿とては、銀の呼鈴を握つて居る右の手の外は殆ど何も見えなかつた。ベネテットが話す事を止めると直、法王は彼に起ち上れよと命じて、それから呼鈴を二度鳴らした。廊下に向つた戸が颯と開いて、通名をドン・テオフ非口といふ、法王の信任篤い召使が這入つて来た。



「テオフ井口、廊下には燈火が又點けてあるかの？」

「はい、點けて御座りまする。」

「では、圖書館に臺下が居られるで、お前行つての、此處へ来て私を待つて居て下さいと云うて来い。それから他のラムプを持つて来るやうに。」

法王は斯く云ひ終つて、立ち上つた。彼は小柄で、稍や腰が曲つて居た。彼は手眞似で、ベネデットに随ふ事を命じて、廊下に面した戸口の方へ歩を運んだ。ドン・テオフ井口は反對の側の戸口から出て行つた。悲しい前兆！聖靈の感應によつて多くの燃えるやうな言葉が吐露せられたこの暗い室には、火の消えかけて居る小さなラムプだけが残つて居た。

法王とベネデットとは今碑銘の廊の一部分に出たが、その邊は半ば闇に包まれて居た。けれども廊の一端には、反射鏡の附いた大きなラムプが、チヨヴァニ・ダ・ウテイネの廊下に出る戸口の右にある紀念の碑銘の上にその光を投げて居た。廊の一端から他の一端まで、兩側に居並んで、墓の彼方の世界に在るもの、秘密と最後の審判の秘密とをよく知つて居る、無言の證人のやうな様をして、この二個の活ける靈魂の不可思議な争鬭を監視して居る碑銘の長い

列の間を、法王は黙つて徐に進んで行つた。ベネデットは彼の左側に、僅か數歩離れて随つた。オロンテス河を表した、首も手足も失くなつて居る像の近くで、法王は暫時立ち止つて、窓から外を眺めた。ベネデットは彼が王宮の燈火を見て居るのか知らと思つて、胸躍らせながら、法王の言葉を待つた。待ち受けた言葉は來なかつた。法王は兩手を背後で組んで、顔を胸に着けながら、無言の徐歩を續けた。廊の彼方の端の近くで、大きなラムプの光の中に彼は再び立ち止つて、引き返さうか、前へ進まうか、心に決しない様子であつた。ラムプの左手には廊の戸口が、夜と、月光と、圓柱と、玻璃と、大理石の敷石とから成る背景に面して居た。法王はこの方向に曲つて、五個の段を降りた。月光は圓柱の黒い影で筋を付けられた敷石の上と、一際色の濃い影の輪廓で斜に仕切られた廊下の片端とに映し込んで居た。その濃い影の中にあるチヨヴァニの胸像は殆ど見別けられない位であつた。

法王はこの影の處まで歩み續けて、その中で立ち止つた。ベネデットは早く答を聞き度いと思ふ許に不躰に、彼に迫る様に見えてはならぬと思つたので、數歩後に控へて、羅馬の市街の上の大きな雲の中を走つて行く月を眺めて居た。彼は斯く月を眺めて居る中に、自分は餘りに云ひ過ぎたらうか？方角違ひの方に通過したらうか？と自分の心に問ひ、近くに在す



やも知れぬ眼に見えぬ存在者に問ひ、嚴な中にも憂を帯びた顔をして居る月にまでも問うてみた。併し彼は直この疑惑を抱いた事を悔いた。あの様に語つたのは自分自身であつたか？否、あの言葉は求めぬに自ら唇に上つたのである、聖靈が語り給うたのである。彼は黙禱に心を凝らして眼を閉ぢたが、彼の顔は依然月の方を見て居た。丁度盲人が皎々たる銀輪の照つて居る有様を想像しながら見えぬ眼で空を仰ぐ様に。

人の手が静に彼の肩に觸れた。彼はびくりとして眼を開いた。それは法王であつた。その顔色は、己の心を満足させる言葉が漸く胸中に熟したと彼に語つて居た。ベネットは恭しく頭を下げて、法王の語るのを待つた。法王は語り始めた。

「我が子よ、お前の云うた事の多くは、すつと以前に主が私の心の中で語り給うた。お前は——願はくは神がお前を祝福し給はん事を——お前は主御一人だけを相手にすればよいのぢやが、私は其他に、主が私の周圍に置き給うた人々をも相手にせねばならぬ。その人々の間を、私は愛と細心の教へる所に従うて、巧く舵を取つて進んで行かねばならぬ。就中、何百萬、何千萬といふ人々の、銘々異つた能力や、銘々異つた心趣に應じて、私の勸告や私の命令を、それと相當に合はせて行かねばならぬ。私は丁度七十人の生徒の中で、平均以

下の者が二十人、人並の才能を有つてる者が四十人、本當によく出来る者は唯だの十人しか有つて居ぬ、哀な教師のやうなものぢや。その教師は十人のよく出来る生徒だけの爲めに授業をして行く事は出来ぬ。私もお前だけの爲めや、お前のやうな人達だけの爲めに、教會を支配する事は出来ぬ。譬へばこの事を一寸考へて御覽。基督も政府に税金を拂ひ給うた。私も——法王としてではなく、一市民として——今夜お前が見たといふあの燈火の煌いて居る、宮殿へ尊敬の税を喜んで拂はうと思ふのぢやが、さうすれば後の六十人の生徒を躓かせるかも知れぬと思ひ、私に取つては誰のにも劣らぬ位貴い彼等の魂の一つだけでも失うてはならぬと思ふと、さうは出来ぬ。それと同様に、私が若し或る書物を禁止書目から除かせたり、信仰が精確に正統ではないといふ評判のある人を最高監督に任命したり、又傳染病の流行する時に、突然羅馬の病院を見舞ひに行つたりしたならば、矢張人に躓を興へるぢやらう。」

ベネットは叫んだ。

「嗚呼祝下！失禮で御座います、基督の代理者がそのやうな事をなされたといつて直蹶く様な魂は、遂に救に入るか如何か判りませぬけれども、他の事では迎も招き寄せる事の



出来ない大勢の魂がその事によつて得られる事は確で御座います。」

法王は彼の言葉が聞えなかつた様子で、話し續けた。

「それに私は老人ぢや。私はもう元氣が無い。最高監督等は何も知らずに私をこの地位に置いたのぢや。私は望んで居なかつたのぢや。其上に私は病氣で聽て私の審判者の臺前に出ねばならぬといふ事が、確な徴で判つて居る。我が子よ、私はお前が正しい精神に動かされて居ると思ふ。が併しお前の云うたやうな事、年齢の若い、元氣のある法王がやつてみても成就出来さうにない事を、主は私の様な弱い老人に是非せよとは、よもお求めなさるまい！とは云ふものゝ、私のやうな者でも——大なる事は出来ずとも、小な事で、主のお助によつて或は成就出来るかも知れん様な事もある。我々は、もつと重大な事柄を扱ふ事の出来る人と、その人を輔佐してその事業に當る事の出来る人々を、適當な時機に神が呼び起し給はん事を祈らう。我が子よ、私が若し今晚ヴァイカンを造り變へて建て直す事に取掛り給へたならば、それを飾る繪を描くラファエルを何處に見出す事が出来やう？ラファエルとは云はずとも、チヨヴァニでさへ何處に見出す事が出来やう？と云うても私は全く何も出来ぬとは云はぬ。」

ベネテットは何か答へやうとしたが、法王は多分進んで説明する事を好まなかつたのであらう、相手に口を開く隙も機會も與へず、早速ベネテットの喜ぶ質問をした。

「お前はセルヴァを知つて居るぢやらう？如何いふ性行の人ぢや？」

ベネテットは急いで答へた。

「正しい人で御座います！實に正しい人で御座います。あの人の著書は悪いといつて檢閲官會議に提出せられて居ます。その中には或は大膽な意見が發表せられて居るかも知れませぬが、併し、セルヴァ氏の著書の中に現れて居る深い、熱烈な敬虔の念、福音書よりも餘計に教役者の手にして居るのが見受けられる或る種の書物の冷な、貧弱な、形式主義とは、全く比較になりません。聖父様、セルヴァ氏の著書を禁止する事は、カトリック教の最も活動的な、最も必須な精力に打撃を加へるやうなもので御座います。教會は人の心の中に在る神に對する觀念を不都合にも縮小する馬鹿氣な、禁慾的の書物を澤山許して居ります。神に對する觀念を大きくする書物を、教會の手にて禁止をおさせなさいませぬ！」

遠くで時計が鳴つた——九時半。黙つて法王はベネテットの手を取つて、自分の兩手の間にそれを挿んだ。そして用心深い唇を洩してはよくない了解と賛成との意を、その無言



の壓迫を通じて彼に傳へた。

法王は彼の手を握り締めて、振つてみて、懐しさうに撫で、は又握り締めた。到頭彼は聲を潜めて云つた。

「私の爲めに祈つて貰ひたい。主が私に御光を與へ給ふやうに祈つて貰ひたい！」

老法王の双眼には——未だ曾て自汚れた思を以て己の心を汚した事がなく、仁愛の優しさに満ちて居た老法王の美しい、優しい双の眼には、涙の玉が顫うて居た。ベネテットは感極まつて物が云はれなかつた。

「又来るやうに。も一度會つて話さねばならんから。」

「何時で御座いませう？」

「近々の中に。此方から呼びに遣らう。」

二人が話して居る中に。段々進んで来る物影は白い姿と黒い姿とを呑んで仕舞つた。法王はベネテットの肩に手を掛けて、低聲で、殆ど踟躕つて居る様な調子で問うた。

「お前は幻の終を覚えて居るか？」

ベネテットは頭を下げて、これも亦低い調子で答へた。

「我その日をも、その時をも知らず」

「その言葉は覺書に書いてない。併しお前は覚えて居るか？」

ベネテットは低聲で云つた。

「ベネテイクト派の法衣を着まして、木の蔭で、草も無い地の上に。」

法王は優しい聲で云つた。

「若しその通りになつたなら、私はその時にお前を祝福したいと思ふのぢやが。その時分には私は天國でお前の来るのを待つて居るぢやらう。」

ベネテットは跪いた。法王の聲が闇の中に極めて嚴肅に聞えた。

「父と子と聖靈の名に於いて我汝を祝す。」

法王は足早に五個の段を昇つて、見えなくなつた。

ベネテットは基督御自身の口より出たやうに思はれたこの祝福に包まれて、恍惚として跪いた儘動かなくなつた。廊を歩む足音が聞えたので彼は起ち上つた。數秒の後には彼はドン・デオフ井口に伴はれて青銅の門の方へ歸りつゝあつた。

其三



四階にあるこの一室は随分穢くろしかつた。鐵製の寢臺と、ラムプ臺と、破れて壞れかゝつた本が二三冊乗てある机と、椀板で出来た箆筒と、鐵の洗面臺と、それから藁底の椅子が敷脚——この他には室内に何も無かつた。一本の釘に鼠色の衣服が一揃、又別の釘に鑄廣の黒い帽子が一つ、懸つて居た。開けてある窓越しに、電光が頻に見えた。荒れ模様の間夜の氣息が室内に吹き込んで、臺の上の石油ランプの火をばつと煽つて、餘り清潔とは云はれぬ敷布と、肉の落ちた二本の手と、手と手の間に置いてある縛つてない一束の薔薇と、床の上に身を起して座つて居る病人のフランネルのシャツと、一月許も剃刀を當てない髯で灰色になつた、深く皺の寄つた、瘦せた顔の上に映る、光と影とを震はせた。みすばらしい寢臺の向側の薄暗にベネテットが立つて居た。病人は黙つて花を眺めた。彼の手と彼の唇とは顫うた。

彼は以前修道院の僧であつた。三十歳の時彼は僧帽を脱ぎ棄て、結婚した。教育も低く、腕に覺しても尠い彼は、筆耕をして覺束無しながらも漸く妻と二人の娘との口を糊して居た。妻は既に死に、娘等は男に騙されて何處かへ行つて仕舞ひ、彼自身は貧苦と、病氣と、自分の魂の痛恨とに健康をじり／＼食ひ奪られて、今テラ・マルモラタ町の角に近い家の四階のつた。

「私は價值がありません！價值がありません！」  
けれども、今度はベネテットの方からその男の頸を抱いて、彼に接吻して、そして答へた。

「私にも主が私に送り給うたこの御惠を受ける價值がありません！」  
「御惠で、どのやうな？」  
と病人が問うた。

「貴方が私と一緒に泣かれるといふ事です！」  
斯う云ひ終つて、ベネテットは抱いて居た手を解いて彼から離れたが、情の籠つた眼は猶去り難に老人を見詰めて居た。老人は驚の眼を睜つて「貴方は何もかも御存知ですか？」と問ふ様に彼を見詰めた。ベネテットは黙つて、優しく點頭いて見せた。



その男は自分の過去の生涯が人に知れて居るとは夢にも思つて居なかつた。彼は此處に三年間住つて居た。同じ家に、彼よりも年齢を取つた、貧乏な、小な、僱傭の女が住んで居たが、大變慈悲深い、信仰の篤い女で、彼の爲めにいろ／＼用事をして遣つたり、病氣になつてからは介抱をして遣つたり、僅一日二リーラの手當金を貰ふ他には何の財産もないのに、その中から如何にかして、彼の家計を助けて遣りなごした。彼女は彼が還俗した僧である事をこの家の番人に聞きもしたし、又彼が何時も大變悲し相で、謙遜で、世話をして遣れば實に有難がるのを見もするので、聖母様と天國に御座る聖者様達一同に、何卒この男の爲めに耶穌様に執成をして戴きたい、そしてこの男が罪を宥されて舊の通り教會の檻の中へ連れ戻されます様に、朝晩祈つて居た。彼女は自分の希望や心配やを、他の信心深い老婆達に話して云つた。

「妾や自分で耶穌様に直接にあの人の事のお祈を得しないんですよ。あの人は耶穌様の仰に背いて、餘り大な罪を犯したんですからね。妾なんかよりは、何方かもつと偉い人のお祈でなくては！」

今日老人は薔薇を少し貰へたらごんなに嬉しからう、と彼女に何度も云つた。その時この

小な僱傭女は考へた。

「左様だ。誰でも皆噂をして居るあの聖者は、庭作をして居なさんだから、あの方の處へ行つて、すつかり打ち明けて話して來やう。薔薇を少し持つて來て下さいつて頼まう。そして又ごんな善い事が起るかも知れない！」

彼女は斯ういふ考を起したが、直獨語を云つた。

「この考は聖母様が教へて下さつたのだらう。でなければ屹度聖アントニー様が教へて下さつたんだよ！」

彼女の質樸な、深い心の中に、彼女は樂しさと嬉しさの波の起るのを覺えた。で、彼女は時を移さず、この還俗した僧の室の窓の殆ど真向の、アヴェンティン岡の美しい棕櫚の樹の間に際立つて白く見える、マイダ教授の風流なボムペイ風の別荘へ急いで行つた。ベネテツトは熱があつたので、教授の命令に従つて、寝かけて居る所であつた。その熱は數週間前から、別段彼れに苦痛を感じさせずに、彼の體力を消耗しつゝあつた、度の低い、悪性の熱であつた。彼れは不具の老婆の話を聞くなり、早速薔薇を携へて出掛けて來た。



老人は耻かしく思つたから、猶顔を隠して居た。纏て、ベネテットーの顔を見ずに、彼は蓄薇の事、自分がそれをあの様に欲しがつた譯などを話した。彼は園丁の子で、自分も亦園丁になる積であつた。所が彼は又教會へ行くのが好きで、彼の甌具は小さな聖壇だとか、蠟燭臺だとか、僧冠を冠つた監督の小さな胸像だとか、皆宗教に縁のある物の模擬であつた。彼が備はれて行つて居た先の人々は大變信心深い人達であつたから、或時彼の兩親に向つて、若し彼が教職を執るに適した素質を有つて居るならば、自分等の方から學費を出して教育を受けさせて遣らうと云つた。其處で彼の兩親は彼に教職を執らせる事に早速定めて仕舞つた。其後間もなく、彼は自分の力では逆も僧としての誓約を忠實に守つて行く事が出来ないといふ事を見出したけれども、家族の者に此上もない悲しい目を見せるのが辛さに、斷然たる處置を取る勇氣が出なかつた。それで思ひ切つた事も得せず、全く世の中から離れて仕舞へば大丈夫かも知れぬと思つて、思慮の足らぬ人々の勸告に従つて、修道院に這入つたが、後に至つて、耻辱を荷つて又其處を出るやうになつた。後年、友達と一緒に密に戯言を云つて居る時には、彼は時々自分の這入つた僧派の事を話して「乃公があの聯隊に居た時分には！」など云つた事があつたが、此頃はもうそんな事は云はなかつた。彼は小供の頃には花を愛した

が神學校に這入つてからは、もう花の事など少しも考へなかつた——四十年の間といふものは、花の事など全く考へなかつた。ベネテットーが訪れる前の晩に、彼は小兒の時代を過ごした大なる蓄薇園の夢を見た。その夢の國で、園の中の白蓄薇は皆彼の方に首を傾けて、彼を熟と眺めて居た——丁度敬虔な魂が、暗い世界を辿る巡禮の姿を、好奇心を以て眺める様に。「何處に往くぞ？何處に往くぞ、哀なる友よ？など我等の許には歸り來らざる？」と白い蓄薇は彼に云つた。眼が覺めた時に、彼は大變蓄薇が欲しくなつた。涙が出る程蓄薇を懐しく思つたが、今、聖い人の深切な心のお蔭で、こんなに澤山な蓄薇が彼の寢床の上にある。美しい、芳い香のする蓄薇がこんなに澤山！彼は黙つて、口を開けて、ベネテットーを熟と見詰めたが、その眼の中には「貴方は御存知で御座います、お解りで御座います、私を如何と思ひなさいませ、私のやうな者も、赦される見込があるとお信じなさいませるか？」といふせつない質問が光つて居た。

ベネテットーは身を屈めて病人に寄り添つて、彼に語りつ、慰めつ爲始めた。優しい言葉の流は、或時は歡喜の音、或時は悲痛の響、聲様々に潺湲ながら、長く流れた。老人は今慰められたかと思ふと、直又心配さうな質問を唇から漏らした。すると又、急に、言葉の優



しい流が彼の顔に嬉し氣な色を引き戻した。其間、小な不具の女は自分の室と老人の室の戸口との間を、珠数を握つて行つたり來たりしながら、この危急存亡の場合に成るだけ澤山「慶たしマリヤよ」を唱へたいといふ願ひと、二人が室の内で話して居るか如何か、話して居るなら如何な事を話して居るのか聞き度といふ望みと、二つの事に心を引かれて、孰にしやうかと迷つて居た。

所が階下の町には、イエネの聖者を見たいと思つて人々が大勢、天氣の悪いにも構はず、續々集つて來た。小な店を出して居た女が、先刻ベネデットが薔薇を持つて小な僮僕と連れ立つて這入つて行くのを見た。瞬間に五十人許の人が、大抵は女であつたが、家の入口の周圍に集つて來た。其中には、唯だ聖者の顔さへ見ればよいと思つて居る者もあれば、是非何か話して聞かせて欲しいと思つて居る者もあつた。彼等は教會堂の内に居る時の様に低聲で、ベネデットの事、彼が奇蹟を行つたといふ事、自分等が今夜彼に祝福して貰はうと思つて居るといふ事などを口々に話しながら、辛抱強く待つて居た。所へ自轉車に乗つて驅けて來た一人の男が、彼等に近付いて、車から降りて、何故彼等がこんな集つて居るのかと尋ねて、そしてイエネの聖者の居處を委しく聞いた。それから彼は又自轉車に乗つて、全速

力で驅けて行つた。暫時經つと、戸の閉つた馬車——俗に「樽」といふ——が一輛、先刻の自轉車乗を後に隨へて、入口の前で停つた。中から一人の紳士が出て、群集の中を押し分けて家へ這入つた。自轉車乗は馬車の側に残つて居た。紳士は番人と二言三言言葉を交へてから、室の戸口まで案内を頼んだ。扉の外には例の小な僮僕が、ぶるぶる震ひながら、珠数を堅く握り詰めて立つて居た。彼は老婆がこの邪魔者を逐ひ遣り給へと心の中で聖母に歎願しながら、黙つて頻りに手を振つて留めるのに目も呉れず、扉を叩いた。扉を開けに來たのはベネデットであつた。

「失禮ですが、貴方はマイロニさんでいらつしやいますか？」  
と來客は丁寧な言葉遣で云つた。

ベネデットは靜に答へた。

「私は、此頃はもうその名を名乗つて居りませんが、以前は左様申しました。」

「大層お邪魔を致しまして相済みませんが、私と一緒にお越し下さいますなれば、大變有難う御座います。何處へお出を願ひますかは、聽て後より申し上げます。」

病人は彼の言葉を聞き付けて、呻いた。



「いえ、いえ、聖者様、後生ですから行かずに置いて下さいませ！」

ベネデットは紳士に答へた。

「何卒御姓名をお聞かせ下さい。それから、何故私に同行をお求めなさいますのかもお聞かせ下さい。」

對手は困つた様な顔をした。

「あの、私は刑事で御座います。」

病人は「へえ！」と叫んだ。僂僂は膽を潰して、珠数を落した儘、ベネデットの顔を見詰めた。ベネデットも驚の念の舉動に現れるのを抑へる事が出来なかつた。

刑事は微笑みながら、自分が今訪問したのは何も恐がるやうな事ではない、自分は誰も拘引する爲めに來たのではない、命令するでもない、唯だ招待するだけだ、と急に云ひ足した。

他からのとは違つて、警察からの招待は特別の性質を有つて居るものであるから、ベネデットはこの招待を断らうとは思はなかつた。彼は病人と老婆とに少し用事があるから五分間だけ此場を外して貰ひ度と刑事に頼んだ。そして病人に何か囁くと、彼は涙に潤んだ聲で

承諾した様子であつた。それから彼は小さな僂僂を片脇へ呼んで、病人は今僧に會ふ事を承諾して居るが、何時自分が僧を此處へ連れて來る事が出来るか判らぬと、話して聞かせた。小さな老婆は心配やら嬉しさをやらで、頭から足の尖までふる／＼震うて居た。そして唯だ「聖き耶穌よ！聖き處女よ！」と幾度も幾度も繰り返す而已であつた。ベネデットは彼女に安心させやうと努めた。そして、出来るだけ早く歸つて來ると約束した。それから二人に訣別を告げて、刑事と一緒に階下へ降りて行つた。

町では群集の嵩が増して居た。そして人々は馬車の側に居る自轉車乗が平服巡査であるといふ事を知つたので、がや／＼云ひながら彼を嚇すやうに、その周圍に詰め掛けた。彼は如何いふ譯で彼が始めに此處へ様子を探りに來て、それからもう一人の男と一緒に引き返して來たのか、いくら問はれても人々に話さなかつた。彼等は無理やりに御者に馬車を他所へ遣らせやうとしてみた。まだ其上に、馬を馬車から解離さうなど、云つて居た。刑事がベネデットと連立つて出て來た時に、彼等はその周圍を取り巻いて怒鳴つた。

「その野郎を追つ拂へ！——追つ拂つちまへ！——殿り倒せ！——その人を連れて行くな！——べらぼうめ、泥棒の番をしろ！神様の家來を捕まへやがつて、泥棒は逃しやあがるん



だらう！——追つ拂へ！——殴り倒せ！

ベネテットは前へ出て、両手を振つて、彼等に騒ぐなと手真似で求めた。そして、誰も自分に害を加へやうと思つて居るのではない。自分は拘引されるのではなく、自分から進んでこの紳士と同行するのだから、大人しく退散して呉れよ、と繰り返し繰り返し彼等に頼んだ。丁度この時、雷鳴が空に響き渡つて、酷い夕立が敷石を叩き始めた。群集は動揺して、大急で散つて仕舞つた。刑事は自轉車乗に何か命じて、ベネテットと共に馬車の中へ這入た。彼等は雷と電光と豪雨の中を、テヴェレ川の方角へ駆け出した。ベネテットは言葉静に、警察署で自分に何の用があるのかと、刑事に問うた。刑事は警察署ごころの話ではない、マイロニ氏と面談したいと云ふ人物は警部長なんぞよりも遙に重要な職に居る役人である、と答へた。

「私がこんな事を貴方に話しちやいけないのかも知れませんが、どうせその方が御自分で貴方に左様云はれますでせう。」

と彼は云ひ足した。それから彼はベネテットに、自分がマイダ家の別荘へ訪ねて行つたが、彼が留守だったので無駄足を踏んだ。幸直彼に會はれたからよかつたが、若し行先が判らなかつたら大變困る所だつたのだと話した。ベネテットは思ひ切つて、彼がこの召喚の理由を知つて居るかを問うてみた。實の所は刑事も知らなかつたのであるが、態と外交家的沈黙を装うて、雨のしぶきを避ける様な風に馬車の片隅へ引き込んで仕舞つた。一つの街燈がベネテットに、黄色いテヴェレ川と、リバグランテの大な黒い舟とを見せた。又別の街燈がヴェスタの寺院を見せた。それから先は何處を通つて居るのか、彼にはもう見分が付かなかつた。彼には何か斯う、彼等が陰火の燃える、迷宮さながらの死の街のやうな、案内を知らぬ墓地の中を通つて居る様に思はれた。到頭馬車は何處かの中庭へころ／＼と走り込んで、兩側に圓柱が並んで立つて居る、幅の廣い、暗い階段の下で停つた。ベネテットは刑事と連れ立つて、下から二番目の中段まで昇つて行つた。その中段に面して入口が二つあつた。左手の扉は閉ちてあつたが、右側の方は明るい圓窓越しに階段を俯瞰して居た。刑事は右手の扉を押し開けた。そして彼とベネテットとは見た所如何しても控室のやうに思はれる、呼吸苦しい、穴のやうな室へ這入つた。其處で居睡をして居た給仕は、大儀さうに起き上つた。刑事はベネテットを待たせて置いて、次の室へ這入つた。其後で、給仕は何か拾ふ様な風に屈んで、それからベネテットの方に一通の手紙を差し出して、云つた。



「そら！ 貴方はこの紙を落しなすつたちやありませんか！」

ベネテットは吃驚した。併し給仕は猶も云ひ張つた。

「貴方はテストッチオから来なすつたんでせう？ ちや、これが貴方だつて事が今に判りますよ。さあ、早く。」

早く？ ベネテットは又舊の椅子に腰を掛けた男の顔をちつと見詰めた。その男はベネテットの顔を見詰返して「貴方は是には何か曰があると思ふでせう、實際あるんですよ！」といふ意味の軽い點頭を以て、彼の勸告を強めた。

ベネテットは封筒を極めてみた。宛名は、

「マイダ家別荘、園丁助手殿」

としてあつて、その下にもつと大なる字で、

「至急」

と書いてあつた。この表書は女の手蹟であつたけれども、ベネテットには氣が付かなかつた。彼は手紙を開いて讀んだ。

「この書面を差上候は、警部長が有らゆる手段を盡して貴方様に羅馬を退去する事を承諾

おさせ申さむと致候事を、貴方様に御知らせ申上ぐる爲めに候。御拒絶可被遊候。以下は御隙に緩々御讀み被下候て宜しく候。」

ベネテットは急いで手紙を封筒に藏めたが、誰も這入つて来なかつたし、四邊の事物は皆眠つて居るやうに見えたから、又取り出して、先を讀んだ。その文言は次の様であつた。

「貴方様のヴァイカン宮へ御越し被遊候てより、聖父様に對して種々の苦情の起り居候。他にも色々有之候へ共、かのセルヴァ事件を檢閲官會議より撤回せられ候事も苦情の一にて候。唯だ貴方様の餘儀なく羅馬を御退去被遊る様、又法王様に重ねて御面會の叶はぬ様に致さんとの目的を達し候爲めに、貴方様に對して色々の陰謀企てられ、貴方様御一身に就きての様々なる誹謗の貴方様の御味方の人々にまで傳へられ居候事は、實に貴方様の御考も及ばぬ程に候。この陰謀は政府の援助を得申候。その援助は、それを報酬として、頗る政府に忌み嫌はれ居候或る人を、トリノの大監督に推薦せんとの議を裁可せざるべしといふ約束によりて得られたるものにて候。決して屈服被遊間敷候。聖父様と貴方様の御使命とを御棄て被爲間敷候。例のイエネの一條に就いての威嚇は大した事にては無之、あの事にて貴方様を告發する事は出来申間敷、彼等もその事は萬々承知致居候。貴方様に書面を差上る



事の出来ざる人、之等の事を聞き出され候て、この手紙を書く事を妾に依頼致され申候。其人はこの書面の間違なく御手許に届き候様致さる可く候。

ノエミ・ダルセル。」

ベネテットは、この手紙を取次いだ給仕が、若しやその内容を知つて居はしまいかと疑ぐりでもしたかのやうに、思はず彼の方を見た。けれども給仕はまた居睡を始めて居て、刑事が這入つて来た音で漸く眼を覺した位であつた。刑事は彼にベネテットをコンメンダレ殿の處へ案内せよと命じた。

ベネテットは或る廣間へ案内せられた。この室は眞暗で、唯だ、五十恰好の紳士が椅子に掛けて、電燈の光でトリアナ新聞を読んで居た、其の一隅だけが明るかつた。電燈はその紳士の禿頭と、新聞紙と、書類が散らばつて居る卓とを照らして居た。紳士の頭上の仄暗い處に國王の大きな肖像畫が朦朧と見えて居た。

彼は頭——大なる権力を自覺して居るので重い頭を、急には新聞から上げなかつた。彼は頭を上げる氣になつた時に漸く頭を擡げて、自分の前に立つて居るこの小つぽけな人民の一人の子をちろりと見た。

「お掛けなさい。」

と彼は冷な調子で云つた。

ベネテットは云はれるが儘に腰を下した。

「君はマイロニさんですか？」

「左様で御座います。」

「御足勢を願つて濟まなかつたですが、必要でしたので。」

コンメンダレ殿の呻言の裏には、苛酷と嘲笑とが潜んで居た。

「序に一寸伺つて置きたいですが、何故君は本名を名乗られないのですか？」

ベネテットはこの意外な質問に即座には答へなかつた。

「いやこれは今の所ちや別段大した事ちやありません。此處は裁判所ちやありませんから。我輩の考ちや、人が若し善い事を爲やうと思ふなら、自分自身の名義でやるのが一番良いと思ひますな。併し我輩は教會へ出ないから、我輩の説は君の説とは違ふ。だが、今も云つた通り、こんな事は大した事ちや無いです、君は我輩が何者だか知つてますか？ 刑事は君に話しましたか？」



「いゝえ」

「左様ですか。我輩は社會の安寧といふ事に就いて幾分心配をして居る政府の官吏で、或る範圍内の權力——左様或る範圍内の權力を有つて居る者です。これから我輩は、我輩が君の身の上に就いても亦心配して居るといふ事を證據立てやうと思ふ。大變お氣の毒な事ですがね、君は今危ない地位に立つて居られるのですよ、ね、マイロニ君、いや、ベネテツト——君の方が良ければベネテツト——君でもよろしい。君に對して、實際重大な告訴が裁判所の方に提起されて居るので、曾に君が聖者だといふ評判が危い許でなく、君の身體の自由も、又それに附隨して君の説教をする事も、尠くとも今後數年間拘束せられるだらうと、我輩は思ふ。」

焰がベネテツトの顔一面に擴がつて、彼の眼は煌いた。

「聖者だとか、評判だとかいふ事は構はずにお棄て置き下さい。」

「我輩は君の感情を害したと見える。併しね、君、君が聖者だといふ評判には、まだこの他の危険が及ばうとして居るですよ。この他にもまだ君に就いて刑法とは少しも關係のない

事だが——其點に就いては大に安心せられて宜しいが——併しカトリック教道徳とは完全に調和しない事を、人が君に就いて云つて居る。さういふ事は多數の人に信じられて居る。我輩は唯だ事實を有りの儘に話して居るだけです。こんな事は實際我輩に何の關係もない事である。畢竟するに、聖者といふものは決して現實に在るものぢやない。これは必ず鏡によつて、それに映る姿を多少理想化したものである。若し何處かに聖者があるとすれば、それは鏡の中にあるのである。即ち聖者といふものを信仰する人間の中に在るのである。我輩などは聖者を信仰しない。そんな事はまあ兎に角、重要な事を話させよう。我輩は餘儀なく面白くない事を君に話さなければならなかつた。君の感情を害しましてもしたから、是から藥をつけて癒して上げませう。我輩は信者ぢやない、けれども宗教的成分を社會の秩序の一要素として、充分その價值を認めて居る。我輩の上官の懷抱して居る意見も亦之と同じであり、政府の意見も亦同じである。であるから、政府は、人民に聖者を以て目せられて居る人の名譽を傷けるやうな處置、社會の秩序を攪亂する虞のある處置を養成する事は出来ない。が、併しこの事だけぢやありませんぞ！我々は君が大層法王のお氣に入りで、度々調見をすることいふ事を知つて居ます。所が當路の人達は法王が親しく面倒な目を見られる事を好まない。



彼等は可成法王にそんな厄介な事をさせないやうにして上げたいといふ、善い希望を有つて居る。そして、その希望は一つの條件によつて實行する事が出来る。この羅馬では君は活動的な敵を有つて居られる——我々の側にちやない、自由派の側にちやない、ね！——そして彼等は全く君を滅ぼして仕舞はう、君の評判も何も彼も奪はうと、陰謀を回らして居る。若し君が我輩の意見を的確に知り度いと思はれるならば、我輩は斯う答へやう、我輩は、カトリック教徒の見地から見れば、君の敵の云ふ處は間違つちや居ないと思ふと。我輩は、我輩と彼等とが使ふ爲めに、あの有名なイエスイツト派の標語「或は彼等あらむやも知れず、然らずむば彼等あり」といふのを少し變へて「然らずむば彼等あらざるべし」とする。彼等は君を自由派カトリック教徒だと云ふ。之は即ち君がカトリック教徒ぢやないといふ事になるのである。が、それは扱て置いて、先へ行きませう。君の敵は君を檢事に告發した。それで我々は、被告として召喚せられた時に召喚に應じなかつたといふ罪で、アレツシアの巡回裁判所で缺席裁判をされた、ピエロ・マイロニ氏を拘引する爲めに、兵隊を派遣しなければならぬと思ふ。併しこんな事は些細な事柄である。君はイエネで病人を癒したと思つて居られるが、君は管に無免許で醫術を行つたと告訴せられて居る許りでなく、一人の患者を毒

殺したとさへ訴へられて居る——毒殺したと迄！所で我々の方には君を助ける手段がある。我々の方で如何かしてその告訴を揉み消すやうにしませう。併し君が若し、ちつと羅馬に居られれば、羅馬に居る君の敵は喧しく云ふだらうから、我々の方で雙の眞似をして居る事は出来まい。だから君は何處か遠方へ行かれなければならぬ。早速何處かへ——伊太利を出て仕舞はれた方が宜しからうと思ふ。佛蘭西へ行つてみられちや如何です？佛蘭西ちや聖者が拂底だから。でなければ、せめては、——君はルガノ湖の方に家を有つて居られるぢやありませんか？その家には今尼さんが這入つて居るでせう？尼さんと聖者とは非常に仲善くやつて行くもんだ。その尼さんの所へ行つて、餘温を冷ましなさい。」

コンメンダドレは諷刺を、その諷刺よりも猶一層失敬な冷淡の裏に隠して、悠々と、頗る真面目な様子で話した。

ベネデットは決心の臍を固めて、儼然として立ち上つた。

「如何にも私は必要に迫つて無免許の投薬を一人の病人に爲た事があります。私を此處へ喚び出したりせずに、棄て、お置きなされた方がよかつたでせう。貴方が私に法律の制裁から遁れる手段を與へやうとなさるならば、貴方と政府とは私に取つて最大の敵です。私が被



告として召喚に應じなかつた罪で私を拘引する爲めに兵隊を派遣して、貴方の職務をお盡しなさい。私は當時その召喚の命令を受ける事の不可能であつたといふ事を證據立てませう。検事はあのイエネの件を種に私を告發して、自分の職務を盡したら宜しい。私は何時でもマイダ家の別荘に居ります。貴方の上官達に斯う仰有い、私は羅馬を離れないと、私は唯だ一人の審判者のみ恐れると、その審判者は正直な暴力よりも、不信實な心を重く罰し給ふ故、貴方の上官達にも、その不信實な心の中に、彼を恐れよと仰有い！」

不意打を喰つたコンメンダドレは、むら／＼と起る怒氣を抑へ兼ねて、顔を蒼黒くした。そして、憤怒の言葉の奔流が今や彼の唇から噴出しやうとした時に、馬車が一輛中庭へ這入つて来る低い音が聞えた。彼はベネテットから顔を背けて、耳を蔽てた。ベネテットは彼に背を向けて此場を去り度い氣が起らないやうに、自分の椅子の背を緊と握つた。相手の男は我に還つた。霎時消えて居た怒の光は、再び彼の眼の中に燃え立つた。彼は先程から始終離さず手に持つて居た新聞紙を片脇に投げ棄て、拳を卓の上にとんと叩き付けて怒鳴つた。

「貴様は何しとる？ 其處動くな！」

二人の男は數秒の間無言で熟と睨み合つた——一人は傲然と居丈高になつて、今一人は近付き難き峻嚴の色を浮べて。役人は語氣荒く云つた。

「今貴様を拘留させやうか？」

ベネテットは猶無言の儘で彼を見詰めて居た。到頭彼は答へた。

「私は待つて居ます。如何なりと好きな様になさい。」

先程から數回扉を叩いても返事を得なかつた一人の給仕が、此時闕の上に見られて、何も云はずにコンメンダドレの方を向いてお辭儀をした。コンメンダドレは直「今行く」と答へて、急いで椅子を離れて、室を出て行つたが、その顔には腹立の影が消えかけて阿諛の色が現れんとする、奇妙な表情が浮んで居た。

給仕は直引き返して来て、ベネテットに待つて居よと云つた。

十五分間経つた。ベネテットは熱の爲めに昂奮し、かつ疲勞し切つて、心臓は騒立ち、頭は燃え、身體はがた／＼慄ひながら、再び椅子の上にごつたりと倒れかゝつて居た。そして聯絡の無い思が彼の腦の中を驅せ廻つた。願くは神のこの人を赦し給はむ事を！ 彼等凡てを赦し給はむ事を！ 若し法王がセルヴァに對する宣告を禁ずるとすれば、如何に喜ばしい事



であらう！私に宛て、手紙を書いてはならない人は、如何してその事を知つて居るのだらう？だが、今、何故私を待たせて置くのだらう？一體この上にまだ如何な用があるのだらう？噫！若しこの熱の爲めに、私が自分の思想か、或は自分の言語を、自制御する力を失つたらば、如何であらう？恐しい事！我が神、我が神、然る事無からしめ給へ！併し世の中には何たる思はしい卑劣な事が在る事よ！互に憎み合ひ、蔑すみ合つて居る、教會の人々と政府の人々との間に、何たる耻づ可き、隠れた姦淫が行はるゝ事よ！主よ、何故に、何故に汝は斯くの如き事を黙許し給ふ乎？未だ誰も出て来ぬ！この熱！我が神、我が神！我をして己の思想、己の言語を、自制御する力を失はざらしめ給へ！真理の神よ！汝の僕は陰謀を廻らす所のその敵の手中に在り、願くは彼に猛火の中に在りても猶汝を崇むる力を與へ給はむことを！あの二人の人は今私のことを思つて居る。私は彼等のことを思つてはならぬ！私は思はずではない。思知らずではないが、併し、私は彼等の事を思つてはならぬ！斯くとは知らで眠り給へる、ヴァイカンの尊き聖者よ、我は汝の事を思はむ！嗚呼！あの狭い階段、私はあの階段を、またと昇る事はあるまい！あの聖靈に満ちた優しい、係を私はまたと見る事は出来まい！然りながら——神は讀むべきかな！——私があの顔を見た事は無益ではなかつた！私は此處で何を爲て居るのだらう？何故私は歸らないのだらう？併し歸り度くも歸る事が出来やうか？噫！この熱！

彼は起つて、闇の中に白く見えて居る時計の圓い顔の上の時間を讀まうとした。十一時五分前であつた。戸外では雷雨が未だ歇まずに猛り狂つて居た。怒り狂ふ風雨雷雨の力、時計の顔の上の小さな針を押し動かして居る時の力は、ベネデットを己の要害堅固な岩の中に誘き寄せて、彼の運命を左右する能力を有つて居る人間の力を、無差別に統御するといふ事に於いて、ベネデットの味方であるやうに思はれた。併しこの熱、益々高くなる熱！彼は咽喉が焼けると思ふ程渴を覺えた。どれか一つ窓を開けて、天から來る水を口に受ける事が出来たら受けたい！

電鈴が鳴つた。そして到頭次の室に響音が聞えた、コムメンダドレが帽子と外套を着て這入つて來た。彼は入口の扉を閉ちて、卓の上の書類を纏めて、それから輕蔑した様な態度でベネデットに云つた。

「よく聞かう。君が羅馬を退去するのに三日間の猶豫を與へる。解つたか？」  
相手の返事を待ちもせず、彼は呼鈴を壓した。そして、這入つて來た給仕に命じた。



「この人を連れて出ろ！」

給仕に案内せられて廣い階段の上へ出て来た時に、ベネデットーはもう下へ降りても構ふまいと思つたので、水を少し呉れよと頼んだ。

「水ですか？今取りに行きません。閣下がお待ちなすつて居られます。何卒此方へお出で下さい。」

と答へて、給仕はベネデットーに昇降機の中へ這入れよと云つたので、ベネデットーは非常に驚いた。

「閣下がお二人ともです。」

と給仕は自分の言葉を訂正した。そして昇降機が二階へ上つて行く途中で、彼は、如何見ても受ける價值があるとは思はれぬ大なる名譽を、今將に受けやうとして居る者に對する様に、ベネデットーの顔を眺めた。

二階に着くと、二人は朦朧燈火の點いて居る大なる廊下を横切つた。この廊下から、ベネデットーは不愉快と苦痛とを感じる程にかん／＼燈火の點いて居る室へ案内された。餘り明る

かつたので彼は眼が眩みさうに思つた。

二人の男が、各異つた態度で、一つの大きな長椅子の兩端に腰を掛けて、彼を待つて居た。若い方は兩手をポケットに入れて、片脚を他の脚の上に乗せて、頭を長椅子の背に靠せて居た。年齢を取つた方は身體を前に屈めて、胡麻鹽の鬚を兩手で交る／＼撫で、居た。前者の顔は嘲笑的で、後者は人の肺腑に透徹する様な、沈んだ、優しい、顔をして居た。二人の中で確に高い方の地位を占めて居るらしく見えた後者は、自分の前の安樂椅子に掛けよとベネデットーに云つた。そして、その眼中に宿つて居る沈んだ色と幾分調和して居るやうに思はれる、調子の良い、太い聲で話した。

「マイロニ君、君は我々が今、政府の強い二本の腕として此處に居るんだと思はないやうに。我々は今、大變珍らしい種類の二個の人物、自分等の職業に通曉して居るよりも一層深くその職業を賤んで居る、二人の爲政治家として、此處に居るのです。我々は二個の大理想家であつて、嘘より他に何物をも受ける價值の無い連中に對して、實に理想的に嘘を吐く方法を知つて居る者です。又それと同時に、如何にして眞理を崇拜すべきかをも知つて居るのです。我々は二個の民主主義者であつて、而も亦、老デモス（人民）の汚ない手に未だ曾て觸られた



事のない、かの深遠な真理の、二個の崇拜者です。」

斯く云ひ終つて、房々とした胡麻鹽の鬚の人は、又両手で交るゝそれを撫で始めた、そして、自分の語つた言葉が氣に入つたので、爲たり顔に浮べた微笑に光を増した眼の縁に皺を寄せて、ベネテツトの顔に驚の色が現はれるかと熱と覗つた。

「其上に、我々も亦信者です。」

と彼は言葉を續けた。

もう一人の人物は、長椅子の背から頭を離さずに、擴げた両手を舉げて、嚴だと思はれる程の調子で云つた。

「しつかり！」

「まあ聞き通して置くさ、ね、君。」

と始に話した人は、彼の方を向かずに云つた。

「我々は二人とも信者です。併し、銘々異つた風にです。我輩は我輩の力の凡てを以て神を信じて居るのです。そして我輩の力は強大です。そして我輩は常に神と共に居るでせう。君は君の弱い所の凡てを以て神を信じて居る、そして君の弱い所は尠い。そして君は臨終の床に横

る時までは神と共に居られないでせう。」

又爲たり顔の、獨善がりの微笑が漏れて、再び話が跡切れた。彼の友は、そんな洒落は唯だ憫笑に價値するのみで返答を與へる價値は無いと思つたかのやうに、眉毛を上げて、首を振つた。

太い、調子の良い聲は語り續けた。

「我輩なんぞは、是でも矢張基督者です。カトリック教徒ぢやないですが、基督者です。實際我輩は基督者だからカトリック教反對論者です。我輩の心は基督者で、我輩の頭は新教徒です。我輩はカトリック教の中に、老衰の徴ちやなく、腐敗の徴のあるのを見て喜ぶ者です。仁愛といふ事は、最も誠實なカトリック教徒の心の中で溶解して、憎惡の蟲で滿ちた黒い泥となりつゝあるです。我輩はカトリック教の此處彼處が龜裂しつゝあるのを見る。そしてその基礎となつて居る昔ながらの偶像崇拜が、その裂目から外に飛び出しつゝあるのを見る。カトリック教の中に現れて居る僅の若々しい、健全な、活力のある精力は、悉く皆それから分離せんとする傾向を有つて居るです。我輩は君が急進派のカトリック教徒であつて、或る、實際に健全で、堅固で、カトリック教徒だと自稱して居るが、眞正のカトリック教徒



からは異端論者といふ名を冠せられて居る人の友人だといふ事を知つて居るです。確に彼は異端論者に違ひないです。我輩は君がその立派な異端論者の弟子の一人で、改革の爲めに盡力して、それと同時に法王を動かさうと試みて居るといふ事を聞いて居るです。扱て、我輩自身も大改革者を翹望して居る者だが、その人は法王反對者で無くちやならん。法王反對者といつても、狹義な、歴史的の意義に於いての法王反對者ではなく、ルーテル的の意義に於ける法王反對者でなくちやならんです。君は如何いふ方法を探れば、この哀な、年齢を取つた法王廟を再び若くする事が出来るか、文明の征服といふ點に於いてのみならず、神に關する智識に於いても、基督に關する智識に於いてさへも、我々俗人よりも遅れて居る法王廟、すつと離れて後から我々に隨いて來て、喘ぎながら時折路傍で立ち止つて、屠殺場の香を嗅ぎ付けた獸のやうに後込みして、そして、強くぐいと引張られると、前の方へ飛び出して、直立ち止つて、又繩をぐんぐ引張られるまでは動かないこの法王廟を、如何したならば革新する事が出来るか信じて居られるのか、我々は好奇心に刺戟せられて、知りたいと思ふ。カトリック教改革に就いての意見を我々に話して戴きたい。何卒聞かせて戴きたい。」

ベネテットは黙つて居た。

この場所に君臨して居るやうに思はれる「知らざる神」は言葉を續けた。

「話し給へ。我輩の友はヘロデぢやないです。又我輩だつてピラトぢやないです。我々二人とも或は君の思想を奉ずる使徒になるかも知れんでせう。」

彼の友は再び廣く擴げた兩手を伸して、長椅子の背に頭を着けた儘で、又先刻と同じ言葉を、始の方に力を入れて云つた。

「しつかり！」

ベネテットは默然として居た。

「貴方。」

友は頭だけを仲間の方に向けて云つた。

「流石の貴方の雄辯も今夜こそ如何も始めて失敗の悲運に遭遇するらしく思はれますよ。此處に大變眞面目な「ニヒル、レスボンディット」(彼答へざりき)の雛形が控へて居ます。」

ベネテットはこのやうに基督の事を諷して云はれたのと、自分が僭越な模倣者に見えはしまいかといふ危懼の念が起つたので、ぎよつとして戰慄した。その一刹那に彼は病氣を熱も、咽喉の渴も、頭の重い事も——感じないやうになつた。彼は叫んだ。



「いゝえ違ひます！お答へしませう！貴方は自ピラトぢやないと云つて居られます。けれども事實私は基督に對して不忠でしたから、基督の僕の中の最も卑しい者です。その私に向つて貴方はピラトの言葉其儘を繰り返して居られます——「真理とは如何なるものぞ？」と。昔ピラトに真理を受ける意が無かつたやうに、今貴方にも真理を受ける意がありません。」

「む——何故無い？」

と彼の相手は叫んだ。

友は騒々しく笑つた。

ベネテツトは答へた。

「何故かと申しますと、闇の仕業を行ふ者は闇に圍まれて居て、光が彼に達する事が出来ないからです。貴方は闇の仕業を行つて居られる。これは了解するに難くありません。貴方は内務大臣であられる——私は世評によつて貴方を存じて居ります。貴方は生れながらにして闇の仕業を行ふやうには生れて居られないです。今日までに貴方が爲さつた仕業の中には多くの光ある仕業もありました。貴方の魂の中には多くの光があります。真理と慈愛の光が多々あります。併し唯今貴方は或る一つの闇の仕業を行つて居られる。私が今夜此處に居ま

すのは、貴方が或る陋劣な賣買取引を爲さつたからです。貴方は真理を崇拜すると云つて居られる。そして一人の兄弟に真理を有つて居るか尋ねて居られる。さうして置いて、貴方が既に其兄弟を賣つて仕舞つたといふ事を隠して居られるです！」

ベネテツトが話して居る中に、内相の友——彼も閣下といはれる身分であるが、大臣よりは低い地位に居た——は到頭長椅子から頭を離した。彼は今になつて漸く、この男とその云つて居る事柄とは注意を拂ふ価値のあるものだと思ひ始めた様子であつた。彼は又自分の長官がこの様に説法を聞かされた事を可笑しく思つた様子であつた。彼は友の大なる天才に感服して居たけれども、彼が折々發作的に觀念論といふ病氣に襲はれる事があるのを、心に嘲笑して居たのであつた。長官は暫時は度膽を抜かれて、惘然として居たが、直躍り立つて、狂人のやうに怒鳴つた。

「嘘吐きめ！無禮な！貴様には乃公が深切にして遣る價值が無い！乃公は貴様を賣りはせん、貴様なんぞ鑑一文の價值もない、無代で呉れて遣るわ！歸れ！歸れ!!!」

彼は電鈴の鈴を捜したが、腹立の餘眼が眩んで見付からなかつたので、大聲で叫んだ。

「給仕！給仕！」



こんな活劇を見馴れて居た内務次官は、始の中は可笑しさを噛み殺して居た。内相は黄金のやうな心を有つて居たので、この様な腹立は所謂「葉火」に過ぎなかつたのであつた。併し友がこの様な調子で給仕を呼ぶのを聞いた時に、彼は給仕などいふ輩は思慮の浅い者であるから、この出来事から危険な風説がごんなに立つかも知れぬといふ事をよく知つて居たし、又その様な事があれば自分の頭上にも嘲笑が降りかゝる譯であるから、斷乎として大臣を制して、殆ど命令するやうな口調で、彼に心を鎮めるやうに勤めた。それからベネテットに向つて言葉鋭く云つた。

「早く歸るんだ！」

内相は黙つて、頭を垂れて、痲癩を起して地踏輪を踏み度く思ふ小兒のやうな氣を抑へやう、抑へやうと努めながら、小股で、急ぎ足に、室内を彼處此處歩き始めた。

ベネテットは命に従はなかつた。彼は内務次官の近付くを許さない、眼に見えぬ強い靈の光に顔を輝かせて、嚴然として突つ立つて居た。そして、この磁力のやうな力に引き付けられて、大臣は我にもあらで彼の方を向いて、足を止めて、正面から彼の顔を見た。

「大臣閣下、私は將にこの宮殿を去らうとする許でなく、遠からぬ中に、この世をも去る

だらうと思ひます。今後又貴方に御面會する事はありますまいから、聽き納めに私の言葉を  
お聞きなさい。貴方には今真理を受ける意はありませんが、併し、それにも拘らず、真理は  
貴方の門口に立つて居ます。そして餘り遠くない中に——貴方の生涯は既に下り坂に来て居  
ますから——貴方と、貴方の凡ての方と、貴方の凡ての名譽と、貴方の凡ての野心とが、夜  
の闇の中に包まれる時が續て来るでせう。其時に貴方は真理が外の闇夜の中から呼ばはるの  
をお聞なさるでせう。貴方は「去れよ」と答へる事が出来ます——さうすれば貴方は決し  
て再び彼女に出會はないでせう。貴方は又「入り来れよ」と答へる事が出来ます——さうすれ  
ば貴方は彼女が顔を包んで、その覆面越しに美しい香を發ちながら、現れるのを見られるで  
せう。貴方が何と答へなさるか貴方は今御存知ない。私も知りません。知る者は世の中に誰  
もありません。善行によつて正しい答をする事が出来るやうに、準備をなさい。貴方が如何  
やうの謬見を有つて居らるゝにせよ、貴方の魂の中には宗教があります。神はこの世に於い  
て貴方に大なる力を與へ給ひました。その力を有効にお使ひなさい。貴方はカトリック教徒  
として生れながら、自分は新教徒だと云はれる。多分貴方は、新教は死せる基督の上に落ち  
て粉砕しつゝあるけれども、カトリック教は活ける基督の力によつて進化しつゝあるといふ



事を了解する事が出来る程充分にカトリック教を御存知ないのでせう。併し、私は今政治家に向つて話しては居ますが、カトリック教會を保護して下さいと歎願する為めではありませぬ——そんな事をされたら災難です。歎願する為めではありませぬが、この事を話したいと思ふです——政府はカトリック教でも新教でもないかも知れませんが、政府は神を蔑にする事はならないといふ事を。それに貴方等は、高等といふ名を冠させた、彼處此處の學校で、科學の自由といふ名の下に、敢て神を蔑にして居られる。貴方等は科學の自由といふ事、思想と言論との自由といふ事を混同して居られる。思想と言論とは自由に神を否定する事が出来すけれども、科學は神を否定して居ません、又否定する事は出来ません。それに貴方等は如何しても科學だけを分離して教へねばならないと云はれる。貴方等は、信仰もしないヴァイカン宮から、何か欲しいものを内密に得る爲には、自分の良心と密に妥協する事を貴方等に強ひる、かの小さい政治術をよく知つて居られるけれども、貴方等は、凡ての正義の永遠の本源たる、神の權威を守護する、かの大なる政治術は知つて居られないです。貴方等は無神論を説く教授等よりも以上に、その神の權威を破壊する爲めに盡力して居られる。何故かと申せば、無神論を説く教授などは、何と云つても僅しか勢力がありませんが、貴方

等政治家は、時としては口に神を信すると云ひながら、貴方等の實際的の無神論の悪例を世に示す事によつて、かの教授等よりも遙に深く、神の權威の根底に穴を穿たれるからです。貴方等は、基督の神性を信じて居ると自想像して居られますが、實際は、貴方等は偽の神々の豫言者、祭司です。貴方等は、昔の偶像を禮拜するイスラエルの王子達の様に、高き所に在つて、人民の面前で、その偽の神々に仕へて居られる。貴方等は、高き所に在つて凡て此世の肉慾の神々に仕へて居られる。

「巧いぞ！君は面白い事を云ふ！」

と極めて節制的な生活を營み、操行が端正で、金錢に對して無頓着であると世人がよく知つて居る内相は、彼の言葉を聽つて叫んだ。それから友の方を向いて、

「實際價值が無かつたね。」

と云ひ足した。ベネテットは話し續けた。

「よくお聞きなさい！左様です、貴方もさういふ祭司の一人です。と云へば、私は普通の酒色に耽る人の事を云つてるのでせうか？私は貴方や、其他貴方の様な人、國庫の中へ手を突込まないから正直者だと自思つて居る人、官能的の快樂に耽らないから道徳が高いと自思



つて居る人の事を云つて居るので。私は貴方に二つの事を申しませう。始終貴方は尙一層罪深い快樂を崇拜して居られるのであります。貴方は自己の爲めに自己といふ偽の神々を作り、自己が如何に大なる権力を有つて居るか、如何に大なる名譽を荷つて居るか、如何に世の歡實を身に聚めて居るかを飽かず眺めるといふ快樂を崇拜して居られる。貴方等の偽の神々の前に、貴方等は多くの人間を生贄として奉り、自己の品性の潔白をも犠牲に供するの悪をも教て爲られる。貴方等の仲間には一つの契約があつて、それに従つて、貴方等は互に仲間の者の偽の神を尊敬して、その崇拜を奨励する義務を有つて居られる。貴方等の中の最も廉潔な人でも、動くともこの一事の連累たるの罪を犯して居られる。卑劣な目的を有つた汚らばしい陰謀や、黨派の陋劣な密計が提案される時には、貴方等は脇を向いて、何も云はずに彼等が闇の中を匍匐して通るが儘に任せて置かれる。貴方は自己を腐敗しない者と思つて居つて、そして他人を腐敗させる！貴方は名譽と良心の潔白を貴方に賣る人々に、國庫金を定まつて分配する。貴方は、自分等の權威の庇護の下に行はれるこの醜行を、卑しんで居りながら、又これを培養して居る。投票や阿諛を買ふ事は、それを賣るよりも罪深い事ですぞ！貴方等は腐敗の最も甚だしい者である！貴方等の第二の罪は、嘘を吐く事が

貴方等の地位を保つ上に無くてならぬものだと思つて居る事です。貴方は丁度水を飲むと同じやうに嘘を吐く。貴方は人民に向つて嘘を吐く、議會に向つて嘘を吐く、國王に向つて嘘を吐く、敵に向つて嘘を吐く、味方に向つて嘘を吐く。尤も貴方等の中には、自分で皆の様に言葉を左右に托しない人もありますが、それでも、仲間の者の嘘を默許して居ます。貴方等の中には、丁度、人が鑛山の鑛坑へ這入る時に、自分の着物を汚さないやうに汚れた着物を上から羽をつて、外へ出た時に喜んでそれを脱ぐのと同じ様に、政府に這入る時に當つて、この嘘を吐くといふ事を身體に着るのを躊躇する人も澤山あります。併しながら、このやうな貴方等の中の最も善い人達でも、自眞理の忠僕であるといふ事が出来ませうか？貴方等は神を信じて居られる。そして、多分、臨終の床に横はる時に、貴方等が政治家として、政府の名義で教會に對して亂暴を働いたといふ事の爲めに、最も深い神の御心に背いたと、信じられる事です。否、かういふ事は貴方等の最大の罪ではないでせう。若し誰か議會に這入つて、議會を通じて政府に這入つて、そして、哲學者として、我等は神を知らずと言明しても、若しその人々が眞理の名によつて、この様な虚偽の我儘な壓制に反抗して起つならば、その人々は貴方等よりも優れて神に仕へ、貴方等よりも神の御意に叶ふで



せう。神を眞理の靈としていはなく、一個の偶像として信ずる貴方等よりも、カトリック教は腐敗せりと憚らず説く貴方等よりも、虚偽の臭氣芬々たる貴方等よりも。然り、臭氣の芬々たる貴方等よりも！貴方等は高き所の空気を、呼吸が難かしい位に、不純にし、清かるべき空気を全く異つた汚れたものとせられる。大臣閣下、貴方は敬虔な心を有つて居られます。この宮殿の中では神に仕へる事が出来ないなど、仰有るな。」

「貴様が知つた——」

と内相は、胸の上に兩腕を組んで、腹立たし氣に叫んだが、次官は彼の怒氣に満ちた言葉を抑へやうと調子よく彼の方へ手を伸した。

「お静に、お静に、お静に！口を出して失禮ですが、私には是は大變面白いです。」

内務次官は丈の低い、丸く肥えた男で、丁度鶏卵がその殻の中に尊い雛を藏して居る事を自覺して、得々として居る様な風に、自分の次官の職に對して充分尊敬の意を有つて居た。人物としては、彼は大臣に比して遙に劣つて居た。そして又彼は頗る性質を異にして居た。彼はその長官の有つて居る様な智的好奇心などは、少しも有つて居なかつた。今夜の會見に出る事を承諾したのも、唯だ長官を喜ばせる爲めに過ぎなかつた。頭の敏捷な長官は、自分

の周圍に回轉して居る人々の誰彼に、時々自分の光を浴びせるのが常であつた。そして、その様な時には、太陽が、太陽の機嫌を取つて居る遊星の光を、遊星自身が發して居るのだと信ずる事があるかも知れない様に、彼はその周圍の人々が、自光つて居るのだと、動もすれば信する癖があつた。それで内務次官が大臣の方に光を反射すると、大臣は次官の方に感服の意を反射したのであつた。大臣が自分の遊星系に屬するこの小さな水星に、今夜の會見に出席する事を求めたのは、事情を知らなかつたからであつた。次官は若い時分に、彼の利己的な天性の最も自然な運動を阻礙げた超自然的物と、一切縁を切つて仕舞はうと決心したので、今では、病人が自分の病氣を悲觀的に診斷したと信じて居る人に對して抱く感情と略同じ様な憎惡の情を以て、超自然的物物を憎む様になつた。そして、今云つた様な不幸な病人が、自分の運命を豫言した醫師の言葉などは信する價值が無いと、自信じやうと努めて、そして醫師の豫言が漸次に實現せられんとするに従つて、益々氣を苛立て、自分を威嚇するその信頼すべき言葉を叩き潰さうと愈々懸命に焦るのと丁度同じ様に、この男も、自分の壯年の元氣が衰へて行くのを感じ、唯物論的教義が信仰を失ひつゝあるのを感じ、そして又、次第次第に覺めて來た、或る恐ろしい眞理に對する危愆の念に、時々胸を刺し貫かれる様な



心持がすればする程、無頓着な諷刺の下に隠れた彼の憎悪の情は、愈激しくなつて来たのであつた。

「おい、君。」

彼は言葉と手真似とを以て、對話の中に自分の差し出る場所を漸く造り得た時に、斯う云つた。

「君は偽の神や、眞の神の事を、中々旺に話す。君の神が偽の神か、眞の神か、僕は知らない。君の神は眞の神かも知れないが、兎に角、無理な事を云ふ神に違ひない。この世界を自分の好きな様に勝手に造つて、今の様な工合にぐるぐる回らなければならぬ様に拵へて置きながら、さうして置いて、のこ／＼やつて来て、こんな風ぢやいけない、もつと異つた風に回らなければいけないなんていふ様な神は、——えー君さうだらう！ 理の解つた神ぢやないに違ひないやね！ 先刻から聞いて居りや、君は遠慮會釋も無く散々悪口をついて、政治家がどんな悪事をしたの、こんな罪を犯したのと云つたが、あれは皆無實の罪だ。殊にあれを其處に居られる方だとか、僕だとかに通用なごすれば猶更左様だ。併し政治が聖者などに適した仕事ぢやないといふ事は、僕も異議なく認める。この世界を造つた者が、政治を聖

者に向くやうにして置かなかつたんだ！ それはその者が悪いんだ。と云つても、矢張誰かが政治の事に當らなければならぬ。それで、今の所ぢや我々がそれをやつて居る。そして、縦し我々自身は聖者ぢやなくとも、尠くとも、我々が如何に辛抱強く聖者に接するかは君の見らるゝ通りだ。其處でね、君。」

次官は自分の時計を出して見た。

「大分遅くなつた。羅馬の町をこんなに遅く歩けば、聖者も何か危険に出會すかも知れない。さあ、もう歸つた方がよからうせ。」

彼は給仕を呼ぶ積で、電鈴の方へ手を伸した。

「大臣閣下！」

と叫んだベネテツトの勢が餘に激しかつたので、次官は腕を伸した儘凍つて仕舞つたかの様に、ちつと立ち竦むた。

「貴方は國家の爲、君主政體の爲、自由の爲に心配して居られます。貴方は社會主義者や無政府主義者を恐れて居られます。併しながら、貴方は神を嘲る所の貴方の同僚を遙に深く恐れねばなりませんぞ！ 社會主義や無政府主義は熱病に過ぎませんが、神を嘲る事は脱疽の



様なものですぞ！貴方などは」と次官の方を向いて「貴方は沈黙なる存在者を嘲つて居る。彼の沈黙を恐れなさい！」

二人の権官が口を開く事も、身動をする事も出来ない中に、ベネテットは室を出て仕舞つた。

彼は、彼の心から迸り出た言葉の反射作用と、彼の血液の中にある熱の火との爲めに、全身震ひ戦きながら、大階段を降りて行つた。彼の脚は身體の重みを支へ得ずして、躊躇いて、曲らうとした。そして、彼は二三度欄干につかまつて、立ち止らねばならなかつた。一番下の圓柱の所まで降りた時に、彼はかくくする額を冷さうと思つて、それに寄せたけれども、この宮殿の石そのものまでが、陰謀の汚に染んで居り、又此處で基督の役者と政府の役人との間に結ばれた、暴虐で卑劣な賣買取引の共謀者であるかの様に思はれて、嫌惡の情に堪へず、直額を柱から離した。彼は疲れ切つて、自分の直手近に待つて居た馬車——大方面臣のであらう——の火の點いて居るラムプに氣も付かず、誰が自分を見やうとも構はずに、階段の下部の一段に腰を下した。彼の呼吸は大分樂になつた。彼の憤は漸く冷えて悲と

なり、この世の哀な盲目の狀態の爲めに、泣き度いといふ願に變りかけて來た。それから彼は實に淋しく、實に堪へ難い程に淋しく、感じ始めた。唯だ彼女一人、過去に於ける彼の罪の仲間のみが、怠らず監視し、發見し、活動したのである。唯だ彼女の助力に依つて、彼は大臣に對して如何いふ言葉を使へば宜いかを知つて、彼に對抗して敗を取らずに濟んだのである。その他の味方の者、彼の宗教上の思想に熱心になつて居る味方の者は、空しく眠つて居た。今も猶眠つて居る。味方の者が今ももう自分を愛して居ないといふ苦しい思は、彼の心を喜ばした。以前は兎に角、今は、自己の運命を憐む念に耽るといふ事、苦い杯を飲み乾すといふ事、自己の運命を事實よりも猶一層傷ましく、悲惨に畫くといふ事は、愉快な事であつた。人々は悉く自分に反抗して居る、團結して自分に反抗して居る！孤獨、孤獨、孤獨！それに又、自分は眞實本當に鞏固なのであらうか？この階段の上に居るあの人、天才を有ち、個人として、優しいあの大臣——若しあの人の云ふ所が結句正しいとしたらば如何であらう？若し果してカトリック教が平癒の見込の無い程病んで居るとしたら如何であらう？見よ！主御自身、今まで自分の仕へて居た主、自分の身體を打ち倒して、自分を敵の手に渡し給うた主は、今や自分の魂を見棄てんとし給ふ！悲痛、死なんばかりの悲痛！彼は直



この場を去らずに死んで、安らかに眠りたいと深く願つた。頭の上で、階段を降りて来る大臣と次官との話聲が聞えた。ベネデットは苦しさを忍んで起ち上つて、徐々歩いて戸外へ出た。門前から數歩離れて、左手に、馬車がもう一輛待つて居るのが見えた。仕着服を着た僕が一人、御者と何か話しながら、人道に立つて居た。ベネデットが出て来たのを見て、その僕は彼の方へ急ぎ足で近付いた。瓦斯の光で、ベネデットはその男がデサレ家の下男で、デサレ別荘に居た羅馬生れの老人であるを知つた。此時、彼處の馬車の中にジアンが彼を待つて居るのだといふ事が、彼の亂れた頭の中に不意に閃き渡つたので、ぎよつとして彼は一足後に退いた。

「否。」

彼は是して居る中に、馬車は此方へ進んで来た。ベネデットはジアンの妻が見えたやうに思つた。そして、自分が彼女と一緒に馬車に無理に乗らせられるのであるが、自分には抵抗する力が無いと思つた。すると、ぐらぐらと眩暈がして、彼は又背後の方へ踰越した。そして、危く倒れる所を、下男に抱き止められた。彼は如何して這入つたのか判らないが、何時の間にか馬車に乗つて居た。彼の向側には不愉快な、明るい火が點つて居て、彼の耳はぶん

ぶん鳴つて居た。其内に、次第に様子が解つて来た。彼は獨であつた。真正面にアセチリン・ラムプが一つ點つて居た。彼の右手の扉が開いて居て、下男が何か云つて居る。何です？ 何處へ参るんで御座います？ マイダ家の別荘で御座いますか？ 左様、左様、マイダ家の別荘です。あの燈火を消す譯には行きませんか？ 下男はそれを消して、それから書付が如何だとか云つた。何の書付？ 奥様が貴方にお渡し申せと云つて、馬車の内隠裏に入れて置かれた書付で御座います。ベネデットは何の事やら譯が解らず、又見もしなかつた。下男は書付を出して、ベネデットのポケットにそれをするりと入れた。それから彼は、主人等——彼は今度は「主人等」と云つた——からの言付だと云つて、ベネデットに容體は如何かと尋ねた。この几帳面な男は、假令ベネデットが死んで居るのを見ても、矢張り同じ様に、言ひ付けられた通を精確と遂行した事であらう。ベネデットはその間に答へずに、何卒水を少し持つて来て貰はれまいかと云つた。下男は近所の珈琲店へ行つて少し取つて来た。ベネデットはそれを一息に飲んで、餘程楽になつた様に思つた。空のコップを受取る際に、下男は自分の口上をすつかり云つて仕舞ふのは今だと思つた。

「奥様は、若し貴方が御尋ねなさいましたら、貴方がお加減がお悪いといふ事を知つて居



りますし、此邊では今時分馬車が逆も見付かるまいと思ひましたので、この馬車を廻したの  
で御座いますと申し上げると仰有いました。」

その馬車には極上等の彈機とゴム輪とが附いて居た。斯く、眞夜中に、暗い、柔な馬車に  
唯一人乗つて、音も立てずに駆けて行く事は、ベネテットに如何に休息を與へた事であら  
う！時々、右や左に、遙に見通される明るい町が、朦朧と見えた。それが彼には苦痛であつ  
た。その長い燈火の行列が彼の敵の様に思はれたから。併し間も無く、四邊は舊の通りに、  
狭い町の闇と、小徑や家屋に揺れながら映る馬車のラムプの光の疾走とのみになつた。御者  
は馬の歩調を緩めて、並足にした。ベネテットは車外の闇の中を眺めた。彼には、馬車が  
今丁度アヴェンティンの岡を登り始めた所の様に思はれた。彼の氣分は稍や良くなつた。こ  
の争闘の夜の、身體と精神との過勞の爲めに高くなつた熱は、今急速に退きつゝあつた。此  
時始めて、彼は馬車の中に薫る幽な香料の香、ジャンが毎時使つて居た香料の香に氣が付い  
た。それと同時に、彼女と一緒にブラリア寺から歸る途中の事、テネド別荘の方へ登つて  
行く坂の麓で彼女と別れて、自分だけ、彼女の温みと彼女の香料の香とが未だ満ちて居る四

輪馬車に乗つて、一人、自分の戀の秘密に酔うて、先へ行つたあの時の光景が、急に實に明  
瞭と、彼の記憶の中へ還つて來た。その記憶が餘りに明瞭して居たので恐ろしくなつて、  
彼は兩腕を胸に押し着けて、力を盡して、自己を、自分の官能と自分の記憶とから離して、  
自己の存在の中心に引き込ませやうとした。彼はその光景を自分の心眼から追ひ遣ることが  
出来なかつたので、唇を開けて、苦し氣に喘いだ。その他の光景も亦彼の心を閃き過ぎた。  
そして彼の屈しない意志はそれが爲めに敗北はしなかつたけれども緊張した繩のやうに震は  
せられた。本當に自分を愛して居るのはジャンだけだ、自分の苦難を己が事のやうに思つて  
苦痛を嘗めて居るのはジャンだけだといふ考が起る。又、妾の愛は酬ひられて居ない  
と云つて恨む彼女の聲、サン・リンの作つた、實に美しい、實に悲しい、二人ともよく知つ  
て居る例の小唄の調子を借りて、彼に愛を求める彼女の聲が聞える。斯ういふ風に掻き口説  
かれては、如何な事でも否む事は出来ない、彼は曾て、テネド別荘で、この唄に就て、  
彼女に語つた事があつた。今度は又、この異教的な、パリサイ的偽善の羅馬を去つて、遠く、  
遠く遁れて、永久に歸るまいかといふ心が起る。その次には、遂には自分の信仰に導き入れ  
度いと思つて居るあの女との深い會話や、平和な生活の幻が胸に浮ぶ。「この世は餘に悲



し、僕をして斯くして汝を拜せしめ給へ」と主に向つて云ひ度といふ熱心な願望が起る。それから今度は、斯ういふ願の中には少しも罪はない、斯程多くの敵がある場合には、自分の使命を抛棄しても罪ではないといふ考が浮ぶ。全體自分は始から使命といふやうなものを實際に有つて居たのだらうか、それよりは寧ろ、虚偽の暗示に心を奪はれ、幻影に過ぎない物の實在を信じ、偶然の形勢に欺かれたものではあるまいか、といふ疑念が起り始めた。彼の友人や弟子等の靈的及び道德的形相が、凸鏡に映る形のやうに歪んで居るのが見えた。彼は友人や弟子等に望を屬して居た事は皆貶度無益であるに違ひないといふやうに感じて、力も脱け果てる様に思つた。此時又あの悲しい、優しい小唄の聲が歸つて来た。今度は先刻のやうに歎願する様な調子でなく、同情に充ちて——彼の苦しい煩悶の凡てを包む同情に充ちて響いた。さながらこの世に在る、苦痛を嘗め、戀を知る者凡ての爲めに、謙遜に、大人しく、仲保をして居る、何者とも知れぬ魂——其自もまた苦痛を嘗め、かつ神に對して吠いて居る、何者とも知れぬ魂の、悲しめる同情に満ちて響いた。

馬車はとある辻に停つて、下男は御者臺から降りて、窓の側に寄つた。彼も御者も孰もマイダ家の別荘といふのはどの邊だか、確り知つて居ないやうすであつた。右手に、狭い小路

が塙と塙との間にだら／＼下りになつて居た。左側の高い方の塙の背後には、非常に大きな、眞黒の樹が、雲を吹き裂つた西風を受けて、大きな音を立て、揺れて居た。遠景にはジャニキユラムの岡と聖彼得寺院とが、暗薄い星月夜の空に眞黒に聳えて居た。その小路は車の通れない、狭い徑であつた。マイダ家の別荘へいらつしやるには、旦那は此處で馬車をお降りなさらないやならないのでは御座いますまいか？ いや左様ぢやない。けれども旦那は、假令どんな事にならうとも、降りる決心である。毒氣を含んだこの馬車を出る積である。彼は自分の哀な、力の無い身體を促し立て、風と争ひながら、漸くサンタンセルモ修道院まで辿り着いた。又身體が疲れ切つたので、彼は此處の僧侶に頼んで、泊めて貰はうかと思つたが、思ひ止つた。彼はベネテイクト派に属するこの大な、寂然とした、平和の隠所の外を傳つて降りて行つて、唯だ徒に「静けき所に、友と共にありて」と云ふのみで、固く扉を閉ぢて彼を迎へぬ門前を、歎息を吐きながら通り過ぎて、到頭マイダ家の別荘の門に着いた。

園丁は着物を引掛けた儘、門を開けに來た。そしてベネテットを見て大變驚いた。彼は、今夜九時頃に刑事と巡查とがベネテットを捜しに此處へ來たから、ベネテットが貶度監獄へ行つたのだらう、と思つて居たと云つた。實際、奥様（マイダ教授の子息の妻）は早速



召使共に命令を下して、ベネテットが歸つて来ても家へ入れるなど云つたのであるけれど、教授が其れを聞いて腹を立て、その命令を取消したので、奥様が嫌と同じ程度にベネテットと主人の教授とを好いて居る園丁には大喜であつた。この話を聞いた時に、ベネテットは、身體の自由が利きさへすれば、直様この家を出て行かうと思つた。併し彼の容體はものゝ百歩も歩かれない程であつた。

「もう今夜一晩だけだ。」

と彼は云つた。

彼は園丁の小さな住居の、狭い一室に起臥して居た。彼はその室に這入れば、心の平和を見出す事が出来やうと思つて居たが、思つた通りに行き相になかつた。人々は此處からも私を追ひ遣らうとして居る——彼は自分の粗末な小さな寢臺や、粗末な椅子や、卓や、僅ばかりの書物や、燻ぶつて居る脂肪蠟燭などに向つて、心の中で斯う云つた。それから、寢臺の傍の足臺の上に懸けてある聖十字架像を熟と見上げて、弱らんとする意志を勵ましなから、苦し氣に呻いた。

「主よ、私は如何して私の十字架に就いて斯様に腹立し氣に吐く事が出来ませうか？」

駄目。彼の魂は基督に就いても、十字架に就いても、活ける感覺を有つて居なかつた。彼は絶望して腰を掛けた。この様な心持で寢に就き度くなかつたので一雫でも美しい情の起るのを待つて居たが中々起ら無かつた。

一頻どつと吹いた風が窓の扉を吹き開けたので、彼はその方に顔を向けた。聖保羅門の黒い壁と、チエステイオの三角塔の黒い尖端の上、詩人シエリーの墓を圍繞むサイブレスの梢の上に當つて、煌々する空に大な遊星が一つ見えた。風は小さな家の周囲で颯と唸つた。嗚呼！瀕死の彼の妻が横はつて居たあの癡狂院の一夜！荒れ狂ふ患者の叫ぶ聲、そしてあの大な遊星！悲歎に壓されて重い頭を垂れると、彼は先刻下男が彼のポケットに入れた書付に不圖氣が付いた。それは大な、黒く縁を取つた封筒であつた。封押し切つて見ると、中には彼の哀な、年齢を取つた姑、侯爵夫人ネネ・スクレミンの爵位と姓名と、その次に

「平和の中に」

といふ簡単な言葉とが記してあつた。彼は化石した者のやうに、擴げた紙を手持つた儘、この言葉を熟と見詰めた。彼の手はふる／＼震ひ始めた。そして、戦慄が彼の手から胸に上つて、段々激しくなつたが遂に彼の兩眼から涙が雨の様に流れた。



世を去つた、この哀な女に齎されて、彼の心に還つて来た、或は悲しく、或は楽しい多くの記憶に、ありし昔を偲びながら、彼は泣いた。この女も亦、今一人の彼の愛する者、世に亡き妻エリサの様に、屹度臨終の際に、少しの疑も恐も無く、基督に身を任せただあらうと思つて、聖十字架の基督を凝視しながら、彼は泣いた。その未知の國に移つても尙深切に、彼の心を和めて呉れる彼女に感謝して彼は泣いた。彼は彼女が最後に彼に云つた言葉を思ひ出した——「それでは私共はもうこれ限で會はれないので御座いませうか？」未來を豫覺する彼の魂の中で彼は微笑んで、扉の開いて居る窓の方を向いて、その大な遊星を熟と見上げた。

### 第八章 ジアン

其一

労働者の一小團がテラ・マルモラタ町の方へ來掛つた。時は纏て正午といふ頃であつた。彼等はガルヴァニ町に普請中の家で、朝から仕事をして居たのであつた。路傍の立木の下や、家の戸口に立つて居た人々の小な群と、又町の端の右側と左側とにある二軒の家の窓から外を眺めて居た人々々々を見て、仲間の者から少し後れて歩いて居た一人の労働者は、大な聲で前に行く仲間の者に云つた。

「唯つた一疋の野郎を見に、何てへ大勢馬鹿が集つてやがるんだらう！」  
 或る小な店の鬮の上立つて居た、鬮の生えた、大な男が、それを聞いて、町の中へ出て來て、恐しい權幕で彼に云つた。

「手前今何て云つた？」  
 労働者は立ち止つて、相手の顔をじろく眺めながら、黴る様な調子で答へた。  
 「退いた！何を云はうと此方の勝手だい！」



大なる男は彼を一つ毆つた。すると他の労働者は仲間の者に加勢して、大なる男に掛つて行つた。怒鳴る聲、罵る聲、ナイフの光、窓から見て居た女の悲鳴、大通から走つて来る人々、現場へ駆け付ける巡査や守衛——瞬く間に町中が人で眞黒になつて騒ぎ立つた。そして、喚き、騒立つ群集が右から左へ、左から右へと揺れて居る有様は、丁度その町が怒濤の中の船でいもあるかのやうに見えた。守衛と労働者とが掴み合ひをして居る所から一間も離れて居たならば、何事が起つたのか確めやうと思つても、中々容易に判らなかつたであらう。群集は聖者を侮辱した者に對する腹立で、逆上して仕舞つて居た。彼等は誰が聖者を侮辱したのか知らなかつた。大勢のがややく云ふ聲は、大なる男の血、労働者の血、守衛の血、笑つた者の血、仲裁をしてみやうとした者の血、眩で人を押し分けて無理に前へ出やうとする者の血、無理やりに外へ出やうと思つて眩で人を押し分けて居る者の血を、口々に求めた。丁度ガルヴァニ町を通りかゝつた聖保羅線の電車の運轉手がこの騒動を見て、大なる聲で五十間程向に居た女の群に向つて、イエネの聖者がガルヴァニ町で見付かつた、と面白半分にはばはつた。流言はお饒舌りをして居る連中や、またそれを傍観して居る連中で一杯になつて居る町々を傳つて、零れた火薬の線を火が傳ふやうに走つた。群集は離れ離れになつて、驅けて行く途

途互に尋ね合ひながら、ガルヴァニ町の方へどんどん走つて行つた。傍観して居た連中は、もつと緩々ど、もつと用心して、後から隨つて行つたが、纏て大勢失望した顔が引き返して来るのを見た。聖者だなんて！馬鹿馬鹿しい！今度も矢張例の虚報に過ぎなかつたのだ。誰か、數人の人がサンタンセルモ修道院から急いで此方へ下りて来るのを、見た者があつた。又別の噂が播まつた。あの人等はマイダ家の別荘へ行つて来たのだ。あの人等は屹度知つて居るだらう！すると、右からも左からも人が出て来て、鳩が一握の穀物の方へ急ぐ様に、皆テ「イ・サンタ・サヒナ町の入口の方へ急いで行く。傍観して居た連中は、もつと緩々ど、もつと用心して、後から隨つて行く。如何だ！本當に馬鹿にしてら！マイダ家の別荘では何も判らない、そして別荘の人々は、大勢の者が行列を造つて續々表戸の鈴を鳴らすので、酷く癪を起して居るから、もう何を問うたつて、答へても呉れない。兵士の小さな一隊が此場に現れて、密集列を造つてガルヴァニ町を突貫して来る。罵詈の聲「奴等が知つて居るんだ！奴等があの人を連れて行つたんだ！」と腹立たし氣に喚く聲が聞える。「違ふよ！刑事だよ！警察だよ！」とアレツサンドロ・ヴォルタ町の隅の一群の中に交つて居る、果物賣の女が叫ぶ。その一群の人々は、刑事や巡査に對してよりも、あの時に現場を見て居た人々に對して餘計



に腹を立て、居る。間拔野郎め！あの時に、刑事も、巡査も、馬車も、馬も、御者も、すつかり川の中へ抛り込まうと思へば、樂に抛り込めたのに、それも得せずに、僅二言三言云はれて、唯つた五六粒雨が降つたからといつて、意氣地無く散りぢりに逃げて仕舞やあがつて！ベネデットーを還俗僧の所へ連れて来たあの小さな老婆も其處に居た。人々はパン屋の店から出て来る彼女を引き留めると、彼女は是れでもう百遍も繰り返した、ベネデットーの拘引の顛末を話す。そして、例の善徳の事や、信心深い言葉の事や、聖者はあの時餘程氣分が悪いらしかつたといふ事などを話しながら、是も矢張百遍目であるが、おい／＼泣いて居る。聴衆も同じく心を動かされて、小聲で聖者の徳を褒め嘯す。一人が、何處其處で聖者が斯ういふ病人を奇蹟的に癒したと話す、他の者が、又他處で病人が癒された話をする。聖者の話の仕方は聴く者の心の奥にまで透る様だと、一人が云ふと、彼の顔は説教と同じ位の力がある、又一人の者が褒める。彼が貧しい生活をして居るといふ事を話す者があれば、彼は慈悲深く、貧乏だのに施與などを随分よく遣ると語る者がある。カルヴァニ町から、兵隊と、巡査と、犯人と、群集とが此方へ来る。傍觀の連中の一人が好奇心に動かされて、同じ見物人の一人に近寄つて、此の邊では一體何事が起つたのかと尋ねる。問はれた人は全然何

も知らない。それで二人は一緒になつて、もう遺憾なく見物を済まして是から歸らうとして居るらしい人に、譯を聞いてみる。その人の答は斯うである。向のサンタンセルモの近邊の或る別荘に神の人が住んで居る。その人は病人を慰問して、大勢の病氣を癒して遣つたり、僧侶よりも巧く宗教上の話をしたりするから、此邊一圓で崇拜されて居る。それで人々はその人の事を「聖者」といふ。唯だ「聖者」といふよりも「イエネの聖者」といふ。それは、イエネといふ、山の中の町で澤山奇蹟を行つたからだ。だつて、新聞にまでも掲つてましたせ！昨夜その人が或る可哀相な病人を慰問して居る中に、何故だかさつぱり判らないが警察官がその人を連れて行つて仕舞つた。其後その人は放免されて、園丁として雇はれて居る別荘へ歸つたといふ話だが、別荘ではその人はもう居ないと云つて、ちつとも譯を話して呉れない。それで人々は激昂して、如何でも――

電車が一臺近付いた。乗客の中の數人が人々に合圖をした。すると彼等は聞の聲を上げて、次の停留場の方へ駆け出した。今まで話して居た男は、二人の質問者を棄て、置いて、同じ方へ走つて行つた。停留場では、大勢の人が電車の周圍にぎん／＼集つて来た。何事が起つたのか見たいと思ふ見物人の行列は、群集の背後からぞろ／＼隨いて行つた。先刻の二



人の男は、この區の住民が六人、自進んで警部長に會ひに行つたが、この電車で歸つて來たのだと聞いた。その六人は、様子を一時も早く聞き度い、知り度いと待ち兼ねて居る群集の中へ、降りた。彼等の顔は嬉し相では無かつた。そして彼等を取り巻いて續々質問をする人々に對して、唯だ氣を静めろ、静めろと勸めた。彼等は今にすつかり話して上げやう、この町中では話されないと云つた。早不服を唱へる者が澤山あつた。悪口が多くの唇を衝いて出やうとして居た。六人の中の頭目と思はれた男は——煙草屋であつたが——仲間の者の肩に乗せて貰つて、群集に向つて手短かに演説をした。

「我々は諸君に報知を齎しました。我々は今、直に、聖者が監獄に這入つて居られないといふ事を、諸君に向つて保證する事が出来ます。」

拍手が哄と起つて、人々は「萬歳」とか「偉いぞ」とか口々に叫んだ。

「併しながら、聖者が何處に居られるのか、我々はしつかり知りません。」

と演説家は語り續けた。

喚く聲、罵る聲！演説家は膽を潰して、話を續けやうとしてみたが、力及ばず、到頭罵詈の嵐に吹き捲られて、活きた演壇から下り降りた。けれども、六人の中の一人で、もつと男

氣があつて、もつと大膽な男が、彼に代つて仲間の肩に攀ち登つて、猛烈な勢で逆振を喰はせた。すると喚き聲と悪口とは以前より幾層倍も激しくなつた。「お前達は奴等に胡麻化されてるんだ！馬鹿野郎！奴等は牢へ入れやがつたんだ！牢へ！」と人々は怒鳴つた。その叫聲は擴がつた。それは、少し離れて居て今までの話が少しも聞えなかつた人々にも聞えた。もつと遠くに居て、その叫聲も何も聞えなかつた者までも、暗憺たる、磁力のやうな憤怒の波動に胸を刺し貫かれるのを感じた。多くの者は「殴り倒せ！」と喚いたけれども、一體誰を殴り倒したいのか判らなかつた。又兵隊の大きな帽子と巡查が見える。六人は聲が哽れるまで怒鳴つて議論したが、駄目である。「殴り倒せ！」「打ち殺せ！」「いふ叫聲が、彼等の聲を消して仕舞ふ。一人の刑事が喇叭手に「散れ」の譜を吹かせる。三度目の喇叭の音で、群集は雪崩を打つて右往左往へ逃げ出す。六人の代表者も、煙草屋を先登として逃げて行く。けれども彼等は逃げながらも、町中では逆も話の出来ない事柄を、何處か適當な場所へ行つてから、もつと云つて上げやうと約束しながら、銘々自分の背後に、亂暴をしない人を誰か引つ張つて走つて行く。彼等は周圍に板圍を繞らした、建築材料の置場へ隠れる。その後を隨いて、幾人かの人圍の隙間から、一人宛中へ潜り込む。それから煙草屋は、自分の胸の中に世界



を覆す力のある大事を藏して居る事を自覺して居る様子で、語り始める。その面前には、カイオ・チエステイオの三角塔が、幾十世紀か走り過ぎた後に來るべき、沈黙と、頽廢と、人跡絶えた森林の出現とを待ちながら、周圍の事物に無頓着に突つ立つて居る。

煙草屋は熱心に傾聴する三十程の顔に取り巻かれて、緩々とした調子で話す。彼は、イエネの聖者は確に牢に這入つて居ない。そして自分等は彼の居處を知らない。併し、自分等は、噫！他の事を知つて居る！と云ふ。それから、彼はその他の事を物語る！若し彼がその事を、電車を降りるなり、群集に話したなら、彼等は彼を寸断に引裂いたであらう。警察署の人々は聖者や、聖者を信仰する者共を馬鹿にして居る。そしてこんな事を云つて居る。聖者は大金持の婦人を情婦にして居る。彼は昨夜、何か餘り面白くない事に就いて警部長の調を受けた。そして、調が済んでから、彼は内務省の門外で馬車に乗つて待つて居た情婦と一緒に、その馬車で歸つて行つた。

「いくらそんな事を云つたつて、私は信じやしません、併し——いや、今度はお次の番だ！」  
と是で煙草屋は話を終つた。

すると、六人の中の一人で、サンタ・サビナで居酒屋をして居る男が、早速話を始めた。彼の妻が昨夜真夜中に馬車が一臺酒店の近くで停る音を聞き付けたので、窓の所へ行つて外を見ると、高帽を冠つた御者と下男が從いて居る自用馬車が一臺居た。下男は馬車の扉の所に立つて、誰かを車外へ助け下して居た。馬車から降りた人は、それから店の窓の前を通つてサンタンセルモの方へ行つた。その時彼の妻はその人がイエネの聖者だといふ事を認めた。居酒屋の亭主は以上の話に附け加へて、斯う云つた。自分は妻が聖者を見たといふ事を本當だとは思はなかつた。と云ふ譯は、昨夜は月も出て居ず、雨は十一時過ぎるまでも降つて居たから、外は随分暗くて逆も人の顔を見分ける事は出来なかつたらうと思つたからだ。それ故自分はその事を誰にも云はなかつたのだ。けれども警察署で右の話を聞いた時に自分は妻の言葉をもう少しも疑はなかつた。其上、妻はこの他にも未だ知つて居る事がある。今朝彼女は六時に起きた。七時から八時の間に、馬車が一輛店の前を通つてサンタンセルモの方へ行つた。暫時してその馬車は元來の方へ還つて行つたが、今度こそ妻は確にイエネの聖者がその馬車に乗つて居るのを見た。それに間違かないといふ事を、宣誓してよければ、してもよいと彼女は云つて居る。



この時、話を聞いて居た者の中の數人が、圍から密と出て、大急でこの新聞を區内に觸れて歩いた。斯ういふ譯で、煙草屋と、居酒屋の亭主と、その友達とが、未だ圍の中に居る間に、サンタ・サビナ道に人が集り始めて、大な一群が、巡査を二人供に連れて、例の居酒屋の方へ出掛けて行つた。

彼等は居酒屋の中庭へ這入つた。主婦は東屋の中で、一人の客と四方山の話をして居た。彼女は人々の質問に應じて、既に自分の夫に話した通の話をした。人々は色々な事を委しく聞き度いと思つて、猶も深く立入つて彼女に問うた。女は、もう其の他の事は何も覚えて居ません、だから、何か飲む物を持って來ませう、貴方がたの咽喉と妾の記憶とに元氣を付けるものを何か取つて來ませう、と云つた。何！馬鹿云つてらあ！人々は酒を飲み來たのぢやない。だから、彼等は遠慮會釋も無く、彼女に然云つた。鐵道の雇員が二人、手近の東屋の卓の側に腰を掛けて居たが、人々が口々に訊いて居るのを五月蠅く思つた。で、その中の一人が主婦を呼んで、大な聲で云つた。

「皆は何を聞きたがつてるんだい？乃公は皆が搜してる男に遭つたよ。先生今朝八時に、若い女を連れて、ピサ線を出掛けて行つたせ。」

群集は向き直つて、今度は彼の方に質問の矢を放つた。彼は腹立たし氣に、自分は本當の事を云つてるんだと斷言した。貴様等の聖者は八時に、大層よく顔の知れて居る若い色白の美人を連れて、二等車に乗つて行つた。それを聞いた人々は、こそ／＼歸つて行つて仕舞つた。彼等が皆行つて仕舞つてから、平服巡査が一人、その鐵道の雇員の側へ行つて、之も亦同じ様に、君は君の言葉に間違が無いと信じて居るか尋ねた。

「乃公が？間違が無えかつて？べらばうめ！乃公が何を知つて。だが、兎に角、あゝ云つて奴等を静めて遣つたのさ。馬鹿な奴等め、如何なりやあがつたつて構ふことあねえ！奴等近え所で、チウキタウエツキア邊まで走つて行きやあがるだらう、そして奴等も、奴等の聖者も、海に吞まれて仕舞やあがれやいゝんだに！」

「だが、一體まあ、あの人は何處へ行つたんでせうねえ？」

と主婦は叫んだ。

「密へ降りて搜して來ねえ。環は空になつちやつたが、未だ腹の蟲が承知しねえ。」  
と雇員は答へた。



## 其二

「若し姉さんが何時もこんな風に一日中僕を一人で棄て、置くなら、斷然デブエド別荘へ歸るよ、彼處へさへ行つて仕舞へば姉さんは何處も行く處が無くなつて困るんだ。」

カルリノはジアンが下女に帽子と手袋と毛皮とを持って来るやうに命ずるのを聞いて、斯う云つた。

「妾はキエコさんが来る様に手筈をして置きました。あの人は今日二時に皇后様の所で彈く筈ですから、それを濟ませて此處へ来るでせう。ちや、行つて來ます。」

彼女は斯う答へて置いて、弟に返事をする隙も呉れず、室を出て行つた。彼女の馬車は彼女を待つて居た。彼女は馬丁に内務次官の宿所を教へて、馬車に乗つた。

今日は土曜日である。數日來ジアンは少しも眠らず、食物も碌に口に入れなかつた。火曜日の晩に、彼女はアルパチナ夫人の口から、ピエロに對して陰謀が企てられて居るといふ事と、アルパチナ夫人の夫の内務次官が大臣から、ヴァイカン宮の政治を左右したいと思つて居るかの非讓歩派の人々に深く恐れられ厭はれて居る男と、内務省で會見をする筈になつて居るから、其際その席に列る様にこの招を受けたといふ事とを聞いた。其處で彼女は急い

でノエミの所へ行つて、あの手紙を書いて貰つて、それから、彼女の友人で始終彼女を敬慕して居る、或る年齢の若い書記官に電話を掛けて、グラント・ホテルまで來て呉れるやうに頼んだ。彼女はその手紙をマイダ家の別荘へ送つては間に合ないかも知れぬと思つたから、書記官が訪ねて來た時に、是非誰かその手紙を手渡しして呉れる者を見付けて貰ひ度いと云つた。彼女は又、ピエロが熱病を患つて居るといふ事をノエミに聞いて知つて居た。それで、曾てデブエド別荘に居た時分にマイロニを見て知つて居る下男を自分の馬車に附けて、内務省まで遣つて、門前で彼の出て來るのを待たせる事に定めた。これは大膽な仕方であつたが、構ふもんか！かの愛する者の生命にさへ別條がなければ、他の事は如何でも構はない、と彼女は思つた。ネネ侯爵夫人の死亡の通知は、それと同じ晩の、最終便で彼女の處に着いた。彼女はピエロが早速その哀な死者の爲めに祈る事が出来るやうに、その通知を早く彼の手許に届け度いと思つた。この様に、彼女が自分を彼の裏に没入して、自分を忘れ、自分の不信仰を忘れ、信仰のある彼が必ず感じ、願ふであらうと思はれる事を感じる事が出来るのは、奇妙な事ではあるが、事實であつた。その晩、下男は自分の使命を果たした時の様子を委しく彼女に話して、マイロニは幽霊の様だつた、死人のやうだつたと云つた。彼女は全く望を失つ



て仕舞つた。彼女はマイダ教授とその子息の妻との間の衝突を知つて居た。彼女は教授が羅馬以外の地へ迎へられて行く事が度々あるといふ事も知つて居た。彼女は教授が大外科醫であるが内科醫としては餘り巧くないと思つて居た。彼女は教授が羅馬以外の地へ行つた不意に、若い妻が病人の世話を少しも見てやらず、少しも深切に氣を付けて遣らないだらうと信じて居た。それから又彼女は、警部長がピエロに三日の猶豫を與へた事をも知つて居た。噫！ピエロをマイダ家の別荘に置いて置く事は出来ない！如何しても他所へ移さねばならぬ、何處かに隠所を見付けねばならぬ、警察の手でも兵隊の手でも發き出されない處、手落のない充分な看護が受けられ、熟練な醫師を手近に得る事の出来る隠所を！

彼女はセルヴァ夫婦に相談しやうとは思はなかつた。又、内務省へ馬車を遣る積だといふ事を、ノエミに話しもしなかつた。セルヴァ夫婦にピエロを引取つては如何かと云はうといふ考が、彼女の胸に浮びはしたけれども、その考は氣に入らなかつた。ピエロとチヨヴァニ・セルヴァとの間柄は人によく知られて居るから、彼女の家は安全な隠所ではない、と斯う思ふ用心深い考の中には、ノエミに對する密な嫉妬心が潜んで居た。ノエミはジアンと同じ様な愛情を以てピエロを愛して居たのでないから、この嫉妬心は激烈なとか燃える様なとかいふ

ほどのものでない、一種特別なものであつたが、併し、ノエミの愛情が彼女の類を異にして居るといふ事が、却つてジアン胸の苦を、猶更増したのかも知れぬ。何故かと云へば、彼女にはピエロの氣質ではノエミの神秘的な感情を受納れるかも知れぬと思はれるのに、彼女自身はその様な感情を有つ事が出来ず、且つ彼女にはノエミに對して苦情を云ふべき正當な原因も、友を責める理由も、この様な疑心を逞しうする理由も無かつたからである。

もう一つ、此處ならばと思はれる隠所が、彼女の心に浮んだ。それは彼女の亡父の親友で、彼女とも知合の間柄であつた、年配の上院議員の家であつた。彼は大變信心深い人で、マイロニに對しては深い敬愛の情を有つて居た。ジアンはこの人の家を借りるといふ考に、緊と縫り付いた。けれども、若し彼女がこの上院議員の義侠心に訴へて、何時拘引せられるかも知れぬ病人を彼の家へ引取つて貰ふといふ様な、随分念の入つた事を頼まうと思ふならば、尠くとも何故彼女がマイロニの爲めにこの様に身を入れて奔走するかに就いて、何とか理由を示さねばならぬ。彼女はマイロニの弟子の中で重なる者としては知られて居ないし、その上院議員は過去の事に就いては全く何も知らぬ。けれども彼は先達のテラ・ウキテ町の集會に來て居た猪顔の白髪の老紳士その人であつたから、彼はノエミを知つて居た。そして彼



ノエミとは度々例の「洞墳」で出會つた。それでジアンは早速彼に宛てた手紙を書いて、自分分は、この様な場合は、自出で活動するのを憚る友ノエミに代つて、この書面を送るのであると云つた。彼女はマイロニの健康状態と、その様な状態にある者をマイダ家の別荘から他所へ移す方がよいと思はれる事情とを委しく述べたが、併し、彼が拘引される虞があるとは書かなかつた。それから彼女は友の依頼の趣を説明して、病人の容體は極めて至急に事を運ぶ必要がある、で、若し上院議員の方に異存が無くば、何卒マイロニに對する招待の言葉を一言二言書いた名刺を一枚、この使者に與へて頂き度い、と書いた。それから、今日中に一度上院で自分に面會を許して貰ひ度い、そして、それまでは何卒この一件を誰にも話さずに置いて呉れるやうにと乞うて、手紙を結んだ。其次に彼女はノエミに宛てた手紙を書いて、彼女がノエミの名義でした事を話して、若し上院議員が名刺を呉れたならば、ノエミは是非姉婚に勸めて、早速馬車に乗つてマイダ家の別荘へその招待を持つて行く事を承諾させねばならぬ、姉婚は又、この様な處置を採らねばならぬ策器上の理由をよく説明して、マイロニには上院議員の深切を受ける様に、教授にはマイロニの行く事を許す様に、説き付けねばならぬ、と云つた。以上二通の手紙を書き終つた時に、ジアンは激しい疲勞に襲はれた。

そしてその徴候が餘程重い様に見えたので、下女は大變吃驚したけれども、ジアンが苦しさを感じて絶對に禁じるものだから、彼女はカルリノを呼びに行かなかつた。併し、主人に黙つて醫師を迎へに遣つた。醫師もジアンの容體に驚いた。彼は此迄カルリノを診察に来た時に、彼女の神經が餘程張り詰めて居る事に氣が付いて居たが、こんなに酷くなつて居るのは決して見た事がなかつた。彼女の顔色は眞蒼で、身體は全く固くなつて、口を利く事が出来なかつた。こんな容體が朝の六時まで繼續して居たが、彼女が時刻を問うた時に彼女の快方に向つた穢が見え初めた。この様な發病を見馴れて居た下女は、醫師に「もう是で済むんで御座いますよ。」と囁いて、それから聲を高めてジアンに云つた。

「奥様、六時で御座います。」

その言葉は奇蹟のやうな効果を奏した様であつた。晝着のまま、寢臺に臥かしてあつたジアンは、少し惘然して居たが、聲の調子も、四肢の自由も平生の通りで、身體を起して座つた。彼女は直懸念さうにカルリノの様子を問うた。カルリノは寢て居る、何も聞かなかつたから、彼女の病氣の事は何も知らぬ。ジアンは安心して、呼吸が樂になつた様に思つた。それから、彼女は微笑みながら、醫師に云つた。



「さあ貴方を追ひ出しますよ。」

彼女は醫師が歸つて行くのを見るまでは気が落着かなかつた。それから下女が彼女の着物を脱がせる支度をするのを見て、ジアンは彼女を馬鹿だと云つたが、直その後から、涙ぐまなばかりの様子で詫びた。

「あゝ左様だ！奥様はあの手紙を先に出さうと思つてゐらつしやるんでせう！左様です、左様です、あんなに奥様に病氣を起させた様な恐い手紙は早く出してお仕舞遊ばせ！」

と下女が云つた。

ジアンは彼女に接吻した。下女はジアンを崇拜して居た。そしてジアンの方でも彼女を可愛がつて、折には、可愛い、無邪氣な妹のやうに彼女を扱つた。

彼女は二通の手紙の封をしてから、下女に下男を呼ばせて、彼に命令を下した。その命令は、下男が馬車を一輛雇つて、テラ・ポルヴェリエラ町四十番屋敷の上院議員——氏の宅へ行つて、其議員に宛てた手紙を差し出して返事を待つ、そして若し返事が無いと云つたら、彼はグラランド・ホテルへ引き返して、其由を復命する、併し若し議員が手紙を呉れたら、彼はそれを、もう一通の手紙と一緒に、アレヌラ町のセルヴァの宅へ持つて行く、といふのであつ

た。一時間後に下男が歸つて来て、命令の通り取計らつたと復命した。二時間後に上院議員からベネデットが既に自分の家に來て居る由を書面で報じて來た。其後、未だ朝の中に、ノエミが來た。ジアンは漸く心が休まつたので、寢て居た。ノエミは彼女が眼を覺ますまで待つて居て、それから一伍一什を話した。——彼女の姉婿は時を移さずマイダ家の別荘へ行つた。教授は前夜十二時半にナポリへ向けて出發した留守だったので、會はれなかつた。マイロニは直上院議員の招待に應じた。チヨヴァニは若いマイダ夫人の氣質を知つて居たから、今度の事を彼女に知らさない方が得策だと思つて、知らさなかつた。彼が行つた時に、マイロニは餘程衰弱しては居たけれども、熱は無かつたから、アヴェンティンの岡からテラ・ポルヴェリエラ町まで馬車で移したといふ事が彼の身體に障りはしなかつたと、チヨヴァニは信じて居る。それに、あの深切な園丁が、眼に涙を一杯留めながら、ベネデットをすつかり厚い毛布で暖に包んで呉れたから、一層よかつた。——ひよつとするとジアンは邪推に過ぎなかつたかも知れないが、ノエミはピエロの事を話すのに、表面は深い興味を持つて居るらしくもあり、ジアンの胸中を充分察して話して居る様子でもあつたけれども、彼女のジアンに對する話の調子は、前方の調子とは異つて居て、何となく、言葉こそ前とは變らな



いが心中では餘所々しくなつた友のやうな様子が見えるやうに、ジアンには思はれた。若しやノエミはピエロがセルヴァの宅へ行く事を冀うて居たのであらうか？左様かも知れない。

その水曜日の朝から以後といふものは、ジアンは絶えず彼處此處駆けづり廻つて居た。マダマ宮では、議員達は、或る大變害に尊敬されて居る白髪で緒顔の同僚が、毎日電信室で、美しい、流行の服装をした一人の婦人の訪問を受けるのを見て、竊に笑を洩して居た。上院での用事が済むと、ジアンはカルリノに薬を飲ます爲めに、グラランド・ホテルへ駆けて戻る。グラランド・ホテルから今度は、アレヌラ町のセルヴァ方へ急いで行つて、様子を知らせたり、聞いたりするか、又は、ピエロの治療を擔當して居る、上院議員の掛りつけの醫師を訪問する爲めに、トレ・ビレ町へ急いで行く。晝間は用事で駆け廻つて、夜は涙！隠れた、不治の病に侵されて衰弱して行き、一晝夜全く熱が無いかと思つと、又酷く出る熱の爲めに體力を消耗されつゝある男のために流す、悲痛の涙。又その他にも、ピエロの友人や弟子達の間に流布されて、中には信じた者も無いではない、無實の罪の爲めに流す苦しい涙。ノエミがこの様な事を彼女に話した。ピエロがイエネに居た頃にあつたと推定されて居る、例の女教師

との關係に就いての非難は、誰も信じて居ないが、併し又一方では、彼が、姓名は誰にも知れて居ないが、或る羅馬に居る既婚の婦人と、秘密の交際をして居ると信じて居る者が多くある。その交際が、讒訴する者等の暗に諷する様な、罪のある性質のものだとは信じられて居ない。最も忠實な者は、その數は尠いが、精神的關係の存在さへも信じて居ない。或る時、ノエミは、或る人々が味方を離れた事、或る人々の冷淡な所行をジアンに話して居る中に、不意にわつと泣き出した。ジアンは戰慄して、眉を蹙めた。けれども、彼女は直に友の眼の中に、深い絶望に充ちた、歎願に満ちた色を認めたので、腹立たしい嫉妬心を忘れて仕舞つて、今までに無い深い愛情に驅られて、兩腕を擴げて彼女を胸に緊く抱き締めた。これは金曜日、即ち、マイロニが羅馬を退去する爲に與へられた猶豫の三日の最後の日の宵の出来事であつた。土曜日の正午頃に、ジアンはアルベチナ夫人からの手紙に接した。内務次官の夫人が二時に自宅でジアンを待ち受けるこの事であつた。ジアンがカルリノの不服を唱へるのに構はず、二時少し前に馬車で出掛けたのは、この招待に應じる爲めであつた。

馬車が動き出すと直、ジアンは覆面を上げて、手袋の中から先刻の手紙を取り出した。そ



して、美しい、血の氣の無い顔を俯けて、その手紙を熟く見詰めて居たが、それを讀んで居たのでもなく、その中に書いてあつた文字の極めて簡単な、判り切つた意味を、研究して居たのでもなかつた。彼女はアルパチナ夫人が自分に話す事とは、一體どんな事であらうと思案して、種々雑多の、有らぬもない事を、想像の中に描いて居た。其筋の人々はマイロニに干渉しない事に定めたのであらうか？それとも、警察の手で彼の住居を突き止めて、彼を拘引しやうとして居るのであらうか？

「屹度左様ならう！噫！」

とジアンは獨語つた。そして霎時の間我を忘れて、手套を顔の所まで上げて、額に押し付けた。噫、左様でないかも知れない！左様でないかも知れない！彼女は素早く首を上げて、誰も自分の様子を見た者はなかつたかと、窓の外を見た。馬車のコム輪は音を立てずに、速く回轉して居た。彼女は又元の臆測を續けた。そして、それにすつかり氣を取られて居たので、下男が扉を開けに来るまで、馬車の停つた事に氣が付かなかつた。

アルパチナ夫人は、外出の支度をして、ジアンを階段の上で迎へた。是から直妻と一緒に行らつしやい。是れから直？それに、何處へ行くのですか？左様、是から直、是から直ジアン

ンの馬車で出掛けやう、アルパチナ夫人の馬車は今一寸差支があるから。アルパチナ夫人は自身で御者に行先を云つた。ジアンの聞き馴れない處であつた。夫人は途中でジアンに説明しやうと云つた。馬車は又動き出した。

あら！アルパチナ夫人は名刺を持つて来るのを忘れた！彼女は馬車を停らせたけれども、時計を出して見て、名刺を取りに歸る隙の無い事を知つた。先へお遣り！ジアンはアルパチナ夫人の説明を待遠しく思つて、慄うて居た。如何したのです？如何したのです？是から何處へ行くのです？まあ！最高監督某氏に會ひに行く！悚然とした。最高監督某氏に會ひに？この最高監督は、非讓歩派の中でも最も猛烈な一人だといふ評判のある人である。アルパチナ夫人は如何しても彼に面會せねばならぬ。それにもう十五分も遅れたら、留守になるかも知れぬ。本當にまあ、何といふ入組んだ事だらう！彼女は二言や三言では何も彼もすつかり説明する事が出来ぬ。今日の訪問の目的は、無論矢張りロゼッタ・アルパチナ夫人が三日此方骨を折つて成就しやうとして居た事柄なのである。彼女がこの様に盡力する表面の理由は、彼女がイエネの聖者の思想と人物とに興味を有つて居るといふ事であつたが、實際の理由は、彼女が良心に咎める處が無しに、陰謀を企て、自分がその采配を振るのが面白いと思つた



からであつた。彼女はこの夏ヴェナ・テイ・フォンテ・アルタでジアンを好きになつたのであるが、彼女の過去の経歴に就いては何も知らなかつた。彼女はジアンが聖者愛して居るのではあるまいかと思つて居たが、その愛はテラ・ヴェテ町の「洞墳」で彼の話を聞いた時に生れた神秘的な愛であると信じて居た。彼女は聖者がマイダ家の別荘から姿を隠した事にジアンも關係して居るので、屹度彼女は彼の隠所を知つて居るに違ひないが、味方の者に秘密を守ると約束した爲に、打ち明けて話すのを好まないのだと、信じ切つて居た。けれどもジアンは、自分の眼に心の浮々した女と見えるこの婦人、殊に又——之は彼女の如何しても忘れられない事であつたが——有力な敵の妻であるこの婦人を、餘り信用して居なかつたので、自分は本當に聖者の行先を知らないのだと、繰り返し、繰り返し、彼女に云つて居た。閣下といはれる人の妻ともある者が、實際中々の危険を冒して居るのに、ジアンが彼女を信用しないといふ事は、少しロゼッタ夫人の氣を悪くさせた。併し、結局この一六勝負には彼女の虚榮心が賭けてあるので、巧く勝てば、イエネの聖者が永久に羅馬で自由に行動する事が出来る様になるのである。それで彼女は如何でも勝負を續けて行かうと決心して居た。兎に角これは實に入組んだ事件である！金曜日晩の所では、警察の手で未だ聖者の隠所

を見付て居なかつた。あゝ、左様だ、人々は聖者が羅馬に居ると信じて居る。ロゼッタ夫人は、ジアンが何と云ふだらうと思つて、此處で言葉を切つた。ジアンは一言も云はなかつた。アルパチナ夫人は話を續けた。彼女の夫は彼女が内密にして居るこの陰謀を少しは感付いて居るかも知れぬ。彼は彼女に本當の事をすつかり打ち明けて居ないのかも知れぬ。けれども、そんな事は先づあるまい。夫が彼女に何か話す時に、若し彼が何か隠し立てをして居るならば、彼女には様子で直それと判る。その事にかけては、他の人の場合でも同様にそれと判る。——流石のロゼッタ夫人も、今までは兎も角も、今度は彼女の夫に就いての判断を誤つて居たのであつた。フランス宮では、水曜日の晩に早マイロニの居處が知れて居たのであつたが、内務次官は、ジアンが信用して居ないよりも尙一層、自分の妻を信用して居なかつたから、事實を彼女に話す事を好まなかつたのであつた。

併し、一番重要な報知はヴァイカン宮から出た。法王はテラ・マルモラタ町での出來事を聞いて、政府に對して大層腹を立て、居る。これは周圍の人々が税下に色々譯を話して、この事件に於て、政府は法王にまでも重んぜられて居る人物に對する秘密結社員の憎惡を幫助したのだと思はせたからである。法王の周圍に居る人々の間に不和がある。内務部長



の反對派の、非讓歩派の中の熱心家は、政府の頗る喜ばない、目下詮議中の例のトリノの大監督の任命を熱心に賛成して、伊太利政府との秘密の提携を非難して居る。この一派の領袖といふのは、ロゼツタ夫人が是から訪問しやうと思つて居る高僧なのであるが、その人は、聖父祝下の身邊から、かの神秘説を以て上塗をした唯理主義者の疫病のやうな悪感化を一掃するためには、もつと他の處置を採らねばならぬと云つて居る。ロゼツタ夫人は自分の宅の客間で惻し氣に微笑みながら語る例のアベ・マリニエの口から、是等の事を聞いたのである。この可哀相な神秘的唯理主義者唯一人に對抗する爲に團結して居る非讓歩派の連中の手で、如何ばかりの毒々しい中傷的の噂が、實に巧に、廣く世間に播き散らされつゝあるかは、全く意想の外に出る程である。斯ういふ話をしたアベ・マリニエは、その非讓歩派の人々の事も、唯理主義者の事も、同じ様に冷笑して居た。

内務省からも斯ういふ事を聞き込んだ。どんな事を？ ロゼツタ夫人が返事をしかけた時に、馬車は大な僧院の前に停つた。最高監督は此處に住んで居るのである。ロゼツタ夫人は自分一人、馬車から下りた。今日の會見にジアンが顔を出す必要はない。出せば却つて都合が悪い。何處が他所で又、顔を出す必要もあらう。ジアンは馬車の中で待つて居た。彼女はロゼ

ツタ夫人が先刻からあれ程饒舌つて居たのに、未だ今日のこの訪問の目的を聞き出す事が出来なかつたのを悲しんだ。五分経ち、十分経つた。ジアンは思案に暮れて今まで靠れて居た馬車の片隅から身體を起した。彼女はロゼツタ夫人がもう出て来るかと、僧院の入口を注視めた。ちらほら見える通り掛りの人が、静な町を緩々歩きながら、馬車の中を覗いて行く。世間にこんなに着着拂つて居られる人間があるといふ事は、殆ど怪しからぬ事のやうに、ジアンには思はれた。噫、噫！醫師は七時に容體書をグラランド・ホテルへ持たせて遣らうと云つて居た。今は未だ三時にならぬ。もう四時間以上待たねばならぬ。それに、容體書には如何いふ事が書いてあるだらう？ 彼女は唇を噛んで、泣吃逆を咽喉の中で殺した。あゝ！ 到頭ロゼツタ夫人が出て来た。馬丁が馬車の扉を開けると、夫人は彼に命じた。

「アラスキ宮へ！」

彼女は馬車の中へ這入るなり、小さな本を一冊足下に抛り出して、物も云はずに、香水の撒けてあるハンカチで唇をこしこし擦つた。到頭擦るのを止めると、彼女は身慄しながら、自分は最高監督の手に接吻させられたが、その手は決して清潔ぢやなかつたと云つた。そんな事は兎に角、今日の訪問は成功した。本當に良人が聞いたら如何いふだらう！ 彼女は實に



厭な役廻を勤めたのである。この最高監督は、何時だつたか、スピアコのサンタ・スコラス  
ティカ修道院の圖書室で、チヨヴァニ・セルヴァに出會つて、君のやうな人間はこの神聖な  
建物を潰す者である、君は間違なく屹度地獄へ墜ちる、或は地獄よりもつと下へ落ちるだ  
らうと云つて、彼を攻撃した人である。ロゼッタ夫人はヴァテイカン宮とフランス宮との間  
の秘密の提携を打ち壊す積りで、彼の煽を煽ぎ立て、來た、彼女は、トリノの敬虔な上流の人  
々は、ヴァテイカン宮の方で人選をした、政府には忌み嫌はれて居る例の人物の就職を大に  
希望して居る、と彼に話した。狡猾な最高監督は——彼はアルパチナ夫人には以前に一度或  
る佛蘭西人の監督の宅の客間で會つた事がある——始の中は唯だ、彼獨特の、佛蘭西語でも  
無く伊太利語でもない、一種の口調で、

「貴女が私にそんな事を仰有るのぢやな？ 貴女が私にそんな事を仰有るのぢやな？」  
とより以上を云はなかつた。

それで、ロゼッタ夫人は遂に笑ひながら答へた。

「本當にまあ飛んでもない事で御座いますわねえト」

これは彼女の夫に閣下の尊稱を棒に振らせる虞のある言葉であつた。併しながら「臺下」は、

トリノの上流社會の希望を是非容れて遣らうと約束したも同然の事を彼女に云つた。

「あの人にしませう！ あの人にしませう！」  
最後に彼は夫人に云つた。

「それに、奥さん、如何して貴女は秘密結社員なんぞと結婚をなさつたのぢや！ しかも  
中でも一番酷い人と！ 一番酷い人と、！ それをお讀ませなさい！」

それから、彼は地獄と、秘密結社員が必ず神の刑罰を受けるといふ事とに關する教理を論  
じた小な本を一冊呉れた。彼女が馬車に乗るなり、足下に抛り出したのは、この小な本であ  
つた。

「良人にそんな下らないものを讀ませたら如何でせう！」

併し、こんな話がジアンに何の關係がある？ ジアンは内務省から聞き込んだといふ事柄を  
早く聞き度くて堪らなかつた。それで、是から誰に面會に行くのか？ 大臣にか？ 次官にか？

二人は是から内務次官に會ひに行くのである。ロゼッタ夫人の夫に會ひに行くのである。

ロゼッタ夫人は、ジアンに後込みする隙も、餘り注意深く心の準備をする隙も與へない様に  
と、この訪問の目的と相手とに就いて、今の今まで口を噤んで居たのであつた。アルパチナ



閣下は自分の妻がデサレ夫人と懇意であるといふ事も、デサレ夫人がセルヴァ夫婦と入魂であつて、そのセルヴァ夫婦が又マイロニを深く愛して居るといふ事も知つて居た。それで、彼は妻に向つて、自分は少し思ふ仔細あつて——その仔細は明かす積ではないが——その婦人に會つて話したいから、内務省で待つて居るから、三時過に來て貰ひ度い、お前(彼の妻)も來度くば彼女と連れ立つて來てもよいが、會見の席上に顔出しする事はならない、と云つた。この話を聞いて、最初にジアンの口を漏れたのは拒絶の叫聲であつた。併し、ロゼツタ夫人は彼女を説いて、苦も無く彼女の氣を變へさせた。夫人は、夫が如何いふ目論見を有つて居るか知らない、それは自分には判らない、けれども、行つた所で危険な事があらう筈もなし、又ジアンが如何とか言質を與へねばならぬといふ譯でも無いのだから、行かないといふ事、夫の言葉を聽いてみないといふ事は、狂氣の沙汰であると自分は思ふ、と云つた。この様な重大な事柄に就いて、アルパチナ夫人が今といふ退引ならぬ最後の時まで沈黙を守つて居たといふ事が、ジアンに戰慄をさせたけれども、彼女は到頭夫人の言葉の儘にする事に定めた。彼女の感じは、多くの他愛も無い話の末に、豫てから自分を診察しに來る筈になつて居た名醫が來たといふ事を聞いた病人の感じに似通つて居た。

「妾は貴女にお一人でいらつしやいと申しませんわ。或る大臣とその秘書の時代には、給仕がいろんな事を見たものですよ！けれども、今日は、内務省で顔がよく賣れて居る妾が御一緒に参りますんですし、それに、以前よくあつた事は、この頃はもうありません！」とアルパチナ夫人は微笑みながら云つて、話を終つた。

アルパチナ閣下は大臣と共に居た。丁度今呼ばれて大臣の室へ這入つて行かうとして居た一人の秘書は、ロゼツタ夫人を見知つて居たので、彼女の來た事を彼女の夫に知らせ上げてやう、自分はほんの一言二言云へば済むのだから、直出て來る、と云つた。その言葉の通り、五分許経つて、彼はアルパチナと一緒に出て來た。アルパチナはジアンに向つて、自分と一緒に大臣の室へ這入つて呉れるやうにと求めた。二人の婦人はこの様な事をば豫期して居なかつた。それで、ロゼツタ夫人は自分の夫に、ジアンと面談したいといふのは彼自身ではなにか、と尋ねた。閣下は僅そればかりの些細な事などは氣にしなかつた。彼は言葉短に妻に歸宅を命じて置いて、不意を打たれて驚いて居るデサレ夫人を促して、大臣の面前へ連れて行つた。彼がジアンを自分の長官に紹介した時に、彼女は當惑して殆ど腹が立つた。



大臣は頗る丁寧な禮儀を以て彼女を迎へたが、その態度は、婦人を尊敬しては居るが、狼に彼女を近付けぬ、厳格な人の態度であつた。彼は以前ジアンの亡父、銀行家デサレを知つて居たから、直その噂をした。

「尊父は澤山の黄金を金庫の中に蓄へて居られました、一番純粹な黄金はあの方の良心の中にあつた！」

それから大臣は言葉を續けて、自分は彼女の父を存命中に知つて居たといふ事を便に、或る大變云ひ悪い、立ち入つた事柄に就いて彼女と會談する氣になつたのだ、と云つた。その言葉を聞き終つた時に——聞き終つたといふよりも聞いて居る中にといふ方がよからう——ジアンは、屹度この人は過去の事を知つて居るに違ひないと思つた。彼女は竊に次官の顔をちらりと見ずには居られなかつた。彼女は次官の眼の中にも、同じく承知の色を認めた。次官の顔付は、大臣の眼色が彼女に對して慈父のやうな情を表して居るが如くに見えたのに反して、彼女の心を亂し、彼女を怒らせた。大臣は先づチヨヴァニ・セルヴァの噂をし、彼を思ふ様褒めて、豫定の話の口を切つた。そして、彼は、自分がセルヴァと一面識も無い事を残念に思ふ。自分はジアンがセルヴァ夫婦の友人だといふ事を知つて居る。それで自分は、

ジアンがセルヴァ夫婦に説いて、或る他の人の許へ頗る重大な使命を帯びて行く事を、彼等に承諾させて貰はねばならぬ、と云つた。それから彼はマイロニの事を話したが、始終氣を付けて、マイロニとジアンとの中間にセルヴァ夫婦を挿むやうにし、マイロニとジアンとの間に直接の交通があるだらうといふやうな事に言及する事を、努めて避ける様に注意した。ジアンは彼の言葉に充分の注意を拂ひ、用心深い、適切な答を挿へやうと努めながら、そして又、このアルパチナといふメフ・ストフ・エレスのやうな小男が側に居るといふ事が彼女に與へる不愉快の念を始終感じながら、熟と聽いて居た。大臣の話は彼女が豫想して居たのと異つて居た——思つたよりも工合の良い話であつたかも知れないが、その代に又、豫想以上に彼女を當惑させた。大臣はジアンに向つて次の様な事を云つた。自分は今大臣として話して居るのではなく、一個の友人として話して居るのである。自分は彼女に物事を隠し立てしたくない。或る影は絶対に何の實體をも有つて居なかつたのである。マイロニ氏は極めて自由にその思ふ所を行はれ、ばよいので、この國の法律によつて罰せられる虞は少しも無い。そして、大臣でも、司法官でも、警察官でも、マイロニ氏に干渉する權利はないのである。自分は宗教上の憎惡よりして同氏に被せられた罪の訴の或るもの、如きは、齒牙にかける價



値の無いものだと確信して居る。自分はマイロニ氏の宗教上の所論に對しては多大の同情の念を、同氏の行はんと志す所の宗教的使命に對しては深い尊敬の念を感じて居る。併しながらセルヴァ氏は如何しても、マイロニ氏が羅馬を、少くとも暫時の間、退去する事が得策である、同氏の使命そのもの、爲めに利益であるといふ事を、同氏に納得させねばならぬ。この羅馬に居る同氏の宗教上の反對黨は、同氏に對して非常に猛烈な勢で戦争を仕掛け、同氏を目掛けて盛に誹謗の矢を放つて居るから、遠からぬ中に同氏は屹度弟子を一人も残らず失くして仕舞ふに定まつて居る。——此處まで話してから、大臣はジアンの、機嫌を取らうと思つて、自分は實際宗教に興味を有つて居るのだと云つた。何といふ悲惨な迷信だらう！とジアンは悲しく思つた。内相は猶も話を續けた。自分はマイロニ氏が必ず近い將來に於て、高貴の人々の間に自由にその感化を及ぼす事が出来ると思つて居る。今や或る變化が目前に迫つて居る前兆、非讓歩派の頭上に或る禍が落ち掛らんとして居る前兆が澤山見える。併しながら、差當り、矢張マイロニ氏が姿を隠す方が思慮のある方法であらうと思はれる。この友誼的な、而も至急を要する忠告を、自分等はマイロニ氏の知名の友を介してマイロニ氏に傳へたいのである。就いては、デサレ夫人はこの事をその知名の友に話しては呉れまいか？

ジアンは戰慄した。内相は信用の出来る人であらうか？若し彼女が今その事を承諾したならば、この二人の人が知らないで彼女の口から聞き出してみやうとして居るのかも知れない事柄を、打ち明けて話すのも同然ではあるまいか？彼女は我知らず次官の顔をちらと見た。その眼が實に明に彼女の心中を語つて居たので、次官は斷然たる處置を取らずには居られなかつた。

「デサレさん、貴女は私に此處に居つて欲しくないと思つてゐらつしやいますね。私か此處に居る必要は無いのですから、御希望に任せて彼方へ参りませう。その御希望は御尤な事で、容易く説明の出来る事です。」

と彼は平生の通りの皮肉な微笑を顔に浮べて云つた。

ジアンは顔を赤くした。次官はそれを見て、自分の最後の言葉の中に、殊に自分の毒氣を含んだ微笑の中に、潜ませた諷言を以て、巧くジアンの感情を害する事が出来たのを喜ばしく思つた。そして、猶前と同じ皮肉な笑顔を作りながら、云ひ足した。

「ですが、私は彼方へ行きます前に、愚妻が貴女には實に忠實な友であるといふ事と、それから、私が貴女の事を愚妻と話します時に迂濶な口を利いた事が決してありませんのと同



様に、愚妻が貴女の事を一言も私に饒舌つた事はないといふ事を、私の名譽にかけて保證して置かなければなりません。」

小男は斯ういふ風に腹癪をして置いて、甚く心を掻き亂されたジアンを後に残して、室を出て行つた。噫！彼等は如何しても否應なしに彼女にあの事をピエロに話させる積なのであらうか？彼等は彼女が始終ピエロに面會すると思つて居るのであらうか？是等の人々も亦、ピエロが聖者だといふ事は嘘だと信じて居るのであらうか？彼女は一生懸命になつて漸く心を落着けて、大臣の眞面目な、沈んだ、感歎な眼色の中に助を求めた。

「妾はチヨヴァニさんに左様申しませう。併し」と少し躊躇ひながら「マイロニさんは御病氣で、旅行をなさる事は出来ませんと思ひます。」

彼女がマイロニといふ名を口にした時に、烟が彼女の顔に燃え上つた。彼女は顔が餘程熱つた様に思つたけれども、餘所目には左程赤くなつては居なかつた。併し、大臣はそれに氣が付いて、程よく取締つて呉れた。

「多分貴女は御朋友のセルヴァ氏御夫婦に迷惑を掛けまいとお思ひなものでせう。そんな御心配はなさいませぬ。私は繰り返して申します、如何いふ方面からも、マイロニ氏の身に心配

な事が起る氣遣は少しもありません。それから、私共の方には同氏の動靜がすつかり判つて居るといふ事も、序に申し上げて置ませう。同氏が羅馬に居られるといふ事、今——それももう數時間の間だけです——デラ・ポルヴェリエラ町の或る上院議員の家に居られるといふ事も判つて居ります。同氏が病氣ではありますが、旅行に堪へられるといふ事も判つて居ります。貴女はセルヴァ氏に、同氏の希望によつては、私の方から私の同僚の工務大臣に依頼して、マイロニ氏の爲めに特に他の乗客を入れない一室を御用立てるやうにさせようといふ事も、お話しなさつて差支御座いませぬ。」

ジアンは激しく慄ひながら、大臣の言葉を遮つて、「もう數時間だけですつて？」と叫ぶ所であつたが、辛うじて自を制して、寸時も早く上院へ駆け付けて仔細を聞かうと思つたので、匆々大臣に訣別を告げた。

内相は彼女を戸口まで送つて出る途中で云つた。

「多分セルヴァ氏は御承知ありますまいが、あの議員の宅へは、たしか親戚の者だと思ひますが、少し泊り客が来る筈なので、もうマイロニ氏を泊めて置く譯に行かないのです。あの議員は大層それを残念がつて居ます。あの人は實に立派な人ですなあ！私とは舊友の間柄



です。』

ジアンは若しや自分の推測が當つたのではないかと思つて、悚然とした。彼等はあの議員が厭でもピエロを追ひ出さねばならないやうに策略を施して居たのである。彼等は本當にピエロを羅馬から押し出さうとして居るのである！併し、あの議員が甘んじて彼等の云ふが儘に承知したなどいふ事は實際の事であらうか？あの様な容體の病人を追ひ出すなどいふは！ジアンは馬車に乗つて、マダム宮へ駆け付けて、かの議員に面會を求めた。彼は其處に居なかつた。ジアンにその由を答へた給仕は、少し困つた様な顔をして居た。彼は何か云ひ合められて居たのであらうか？ジアンは強つて問ひ詰める事も得せずに、その議員が晚餐までにグランド・ホテルまで来て呉れるやうにといふ傳言と共に、自分の名刺を預けて置いて、其處を出た。彼女はグランド・ホテルの方へ歸つて行つた。彼女の心は戦々として居た。彼女の靴の爪先は、ロゼッタ夫人が忘れて行つた、秘密結社主義を攻撃してある小冊子をこつこつ叩いて居た。彼女は馬車を牽いて居る二頭の栗毛馬が空を飛んで行けばよいのにと思つた。毎日四時半にカルリノの藥の用意をするのが彼女の役目であるのに、今はもう五時十五

分前であつた。

## 其三

ジアンがグランド・ホテルへ着く半時間前に、チョヴァニとマリアとが訪れた。レイニも同時に彼等と落合つた。彼も同じくデサレ夫人を訪ねて來たのであつた。そして、彼はこの出會を嬉しく思ふと云ひはしたが、併し元氣は少しも無くて悄然として居た。

デサレ夫人は外出中だと聞いて、三人の客は客間で彼女の歸るまで待たせて貰ひ度いと云つた。セルヴァ夫婦はレイニよりも猶一層浮かぬ顔をして居た。

暫時は三人とも黙つて居たが、纏てマリアが口を開いて、今はもう四時十五分である、ジアンは毎日四時半に弟の用事があるのであるから、もう間もなく歸つて來るだらうと云つた。レイニは、ジアンが歸つて來たなら自分を彼女に紹介して貰ひ度い、自分は彼女に宛てた傳言を帶て來たのであるが、彼女を知らないものである、其傳言は實際ベネデットーの友人凡てに關係のある事であるから、セルヴァ夫婦にも亦關係がある、と云つた。マリアは身慄をした。

「あの方からの傳言なんですか？ベネデットーさんからの傳言なんですか？」



と彼女は熱心な様子で尋ねた。

レイニは彼女の熱心な様子に驚いて、彼女の顔を見た。そして、答へるまでに一寸踟蹰つた。否、ベネテットーからではない、けれども彼に關係のある事である。テサレ夫人が何時歸つて来るかも知れないし、大分長い、大分込み入つた話でもあるから、彼女が歸つて来るまで話を始めない方がよからうと思ふ。テサレ夫人はテラ・ヴヰテ町の集會で一度も見受けた事も無いし、彼女の名前を人がいふのを聞いた事もないが、如何して彼女がベネテットーの運命にこれ程興味を有つやうになつたのだらう？とレイニは何氣なく問うた。

「ですが、貴方は又如何して、テサレさんがあの方の運命に興味を有つてゐらつしやるど、お思ひなさるんですか？」

とマリアが尋ねた。

「如何してといつて、貴女、私が先生の事に就いての傳言を聞いて来たからです。」

とレイニは答へた。

ベネテットーに對して無限の敬慕心を有つて居たレイニは、彼處此處で吹聴されたベネテットーに關する怪しからの噂を、決して信じなかつた。彼は熱烈な憤を以てその様な噂を

斥けた。彼の師が汚れた戀でも精神的戀でも、戀愛などいふものを心に懐く事が出来ることは、彼には如何しても承知が出来なかつた。それで、今の様な質問をした時にも、以前シヤシとベネテットーとの間に耻づべき性質の關係があつたとは、露知つて居やう筈はなかつたのであつた。テサレ夫人は話題を轉じやうと思つて、テサレ夫人は今暫時歸つて來はしましから、レイニが話をした方がよからうと云つた。

レイニは話を始めた。

彼は今日ベネテットーに會ひに行つた。ヴヰンコリのサン・ビエトロからテラ・ポルヴェリエラ町へ來た時に、平服巡査が二人、町を行つたり來たりして居るのを見た。或は彼の見違かも知れない、それとも平服巡査が偶然其處を歩いて居たのかも知れない。孰にしろ、兎に角これは注意して置くべき事であつた。彼が議員の家に這入ると直、議員は彼に何卒書齋へ來て呉れるやうにと、下女に云はせた。書齋へ這入ると、議員は頗る愛想の好い調子で、しかも亦當惑の色を面に現して、次の様な事を云つた。彼は折好く自分の愛する客の友人が來て呉れた事を好都合に思ふ。ベネテットーは幸にして熱が無く、自分の考では、快方に向つて居ると思はれる。今し方自分の姉から電報が來て、彼女が間もなく羅馬へ着く筈だと



云つて来た。自分の寓所には、自分が使つて居ると、下女が使つて居るとの他に、寢室は唯一つしかない。姉を宿屋へ遣る譯には如何しても行かず、姉の方へ来るのを延ばして呉れろといつて電報を打つ事も出来ない、姉はもう出立した後なのだから――

議員はその後を云はないで、レイニに随意にその言葉の結末を附けさせた。ベネテットの反対派の者が秘密の策略を回らして居るといふ事を、數人の忠實な弟子等と共に知つて居たレイニは、非常に驚いた。何と返事をしたものであらう？議員の家では議員のみが自由に振舞ふ事が出来るのだと答へやうか？多分左様云ふより他に答のしやうはなかつたらう。レイニは充分用心をして、今病人を動かせば取り返し付かない結果を生ずる虞がありはしまいか、と云つてみた。議員は、いや、決してそんな氣遣は無いと確信して居る。轉地をすれは病人の爲めに大變良いと信ずる。醫師の意見は未だ聞いてみる折がなかつたが、良いに定まつて居る。轉地の場所はソルレントがよからう、と云つた。レイニは何と云つてよいか判らなかつたので、黙つて熱と立つて居たが、議員は彼に、何卒自分に代つてグラント・ホテルへ行つて、始にベネテットを預る事を自分に依頼したテサレ夫人に面會して、如何ぞか都合を付けて呉れるやうに頼んで貰ひ度い、自分の姉は今夜十一時前に来る筈なのだからと

云つて、レイニを追ひ立てた。

議員の前を退ぞいてから、レイニはベネテットに會ひに、その室へ行つた。噫！彼が如何な容體であつたと思ふ！熱は多分無かつたかも知れぬ。けれども瀕死の人の相をして居た。

様子を話して居る青年の眼には涙が溢れさうであつた。ベネテットは如何しても出て行かねばならないといふ事を知つて居なかつた。其所でレイニはその事を、未だ確には判らぬが或はさうなるかも知れないといふ様な風に、彼に話した。ベネテットはレイニの魂の奥を見抜かうとする様に、黙つた儘、熱と彼の顔を眺めて居たが、臆て微笑を洩して「私は牢へ這入らねばならんのか？」と尋ねた。その時にレイニは、ベネテットのやうに神に在つて強い、沈着な人に、事態の真相を始にすつかり語らなかつた事を悔いて、議員の言葉を其儘悉く彼に話した。

「先生は私の手を取つて」青年は感動の餘に聲も跡切れ勝ちで、猶も言葉を續けて「兩手でそれを持つて、撫でつ摩りつしながら、斯う仰いました——私は先生のお言葉の通りを申します——私は羅馬を離れない積だ。私は君の家へ行つて死なうかね？」私は餘り悲しか



つたので、答へる力がありませんでした。實際先生が本當に拘引される氣遣は無いのか、確に判らないんですし、ひよつとすると、今度のあの議員の本當とは思はれない様な亂暴な所爲は、先生があの家から拘引されて行かないやうにする爲めの口實かも知れませんか。それに又、警察の方で目を付けて居るのに、如何して他の安全な所へ移せるものですか？それで私は先生に接吻して、無意味な事を二言三言口の中で云つて、其儘急いで出て来ました。そして大急でそのテサレさんといふ方に會ひに来たのです。多分テサレさんがあの議員の所へ行つて、説服して下さるかも知れません。」

レイニが語つて居る間に、セルヴァ夫婦は幾度も驚や腹立の叫聲を以て話を遮つた。遂に物語が終ると、夫婦は驚の餘り暫時は言葉も出なかつた。その沈黙を第一に破つたのはマリアであつた。

「ジアンさんが、早く歸つて来ればいゝのにねえ！」

と彼女は低聲で、云つた。

彼女は夫に向つて他人に氣の付かない様な一寸した手眞似をして、若し何かの手違でジアンが歸つたのにホテルの者が自分等に知らせるのを忘れて居るのではないか、二人で見ても

やうと發議した。冬園を通り抜ける途中でマリアは、自分はジアンが何者であるかをレイニに打ち明けて話して置く必要があると思ふ、と云つた。テサレ夫人は未だ歸つて居なかつた。チヨヴァニは青年を片脇へ呼んで、低聲で彼に話した。レイニの顔を注視して居たマリアは、彼が身慄をして、顔色を變へて、眼を腫るのを見た。彼が口を開いて、何か尋ねるのを見た。其時ジアンが笑顔を作つて、急ぎ足で這入つて来た。

入口で門番が醫師からの手紙を彼女に渡した。その手紙には「小生は多分今日再び御見舞する事を得ざるべしと存候。今朝は熱無之候ひき。何卒再び發熱せざる様致し度きもの候。」とあつた。ジアンはそれを讀むなり、病人を他所へ移す事は逆も出来ないといふ事を知つた。

彼女はマリアに接吻して、チヨヴァニと握手した。チヨヴァニはレイニを彼女に紹介した。挨拶が済んでから、ジアンは、弟が待つて居るから五分間だけ失禮しなければならぬと、三人に斷を云つた。彼女が直様戻る事を約して室を出て行く直、レイニは又セルヴァを片脇へ呼んだ。マリアは、ジアンの歸つて来る以前にレイニの顔に宿つて居た悪念の影が、今又現れるのを見た。彼がチヨヴァニに多くの質問をして居ると、夫の答が彼の心を静めつ



つある様子を見た。終に彼女は夫が青年の肩に兩手を掛けて、何か話すのを見た——彼女は夫が何を云つて居るのか自分には判つて居ると思つた——それはジアンに耳には未だ這入つて居ない、或る秘密な事であつた。マリアは青年の眼の中に感動と深い畏敬の色の現れるのを見た。

給仕が這入つて来て、テサレ夫人が彼女の部屋で彼等を待つて居ると云つた。ホテルの中には大勢の人が動き廻つた居た。長い袴の擦れる音と響を消された蹠音が、廊下の絨緞の上に入り混つて聞えた。華やかなのや、悲しさうなのや、耳を喜ばすやうなのや、孰れもつかぬやうなのや、様々の、低い、外國語を話す聲が、聞えては消え、消えては聞えた。昇降機は突貫によつて奪取せられて居た。小い無言の一團の三人はいづれも周囲の、他人の悲哀には目も呉れぬ、現世的精神の發露を見て、皆同じ悲痛の感に打たれた。ジアンは自分の客間に居た。その隣のカルリノの部屋では、カルリノがピアノでキエコのヴ・オロンテ・オロに伴奏して居た。彼女は笑顔を作つて友を迎へたが、その微笑は隣室の音楽——單純な、平和な、伊太利の古樂——と合して、見る人々の胸を痛ませた。彼女はレイニに訪問されやうとは豫期して居なかつたから、彼を見て少し驚いた様子であつた。彼女が三人に二階へ上つて呉れよ

と云つた眞の理由は、二階の方が階下でよりも一層心置なく話が出来ると思つたからなのであつた。けれども表面では、彼等にキエコの音楽を少し聞かせて上げたいと思つたのであるが、彼が如何しても間の戸を開けて置かせて呉れない、と彼等に云つた。併し、戸が閉ぢてあつても、大變よく聞えた。オヨヴァニは早速、レイニ男爵は上院議員からジアンに宛てた傳言を聞いて來たのである、と彼女に話した。

「お二人で話して居なされる間、私等は音楽を聴いて居ませう。」

とオヨヴァニは、妻と共に、ジアンに側から片脇へ寄つた。ジアンは蒼くなつた。そして、その傳言を早く聞く度くて堪らないといふ様子を、一生懸命に隠さうと努めたが、全く包み切る事は出来なかつた。レイニは彼女の傍に腰を掛けて、低聲で語り始めた。

ヴ・オロンテ・オロとピアノとは、接吻と、質樸な、快潤な愛情に満ちた、田園生活を歌つた曲を、共に面白可笑しく弾いて居た。マリアは「噫！可哀相に！」と歎聲を洩さずには居られなかつた。彼女の夫は又、ジアンに傍の男がこの優しい、賑やかな音楽の調に合はせて語つて居る苦痛に充ちた言葉が、ジアンに顔に顯然と刻み付けられて行く跡を、眼を以て睨けて行かすには居られなかつた。彼は又青年の顔をも注視して居た。レイニは自分の傍の婦人



に話して居る中に、幾度も、自分の悲歎を表し、又助言を求むるかの様に、チヨヴァニの方を見た。ジアンは床を見詰めながら、彼の言葉を熟と聴いて居た。レイニの話が終ると、彼女は哀な悲痛の色に充ち満ちた、あの大きな眼を上げて、セルヴァ夫婦を見た。彼女は二人の顔を交る眺めながら、我知らず、無言の中に「貴方がたは御存知なのですか？」と問うた。夫の眼も妻の眼も、共に悲の色を浮べて「左様、知つて居ます！」と答へた。嬉し相な音楽が、急に哄と調子を高めて、隣の室から響いて來た。その大きな音を幸に、マリヤは夫に囁いた。

「レイニさんはあの方が羅馬で死に度いと云つて居なさるといふ事を、ジアンさんに話しなすつたでせうか？」

彼女の夫は、その事を彼女に聞かして置くのが一番よからう、多分レイニが彼女に話したらうと思ふ、と答へた。ジアンは音楽の響の漏れて來る間の戸を熟と見詰めた。そして暫時見合はしてから、セルヴァ夫婦を自分の側に招いた。彼女は確乎した聲で、上院議員はセルヴァ夫婦の方に事情を報するのが至當であるやうに思ふ、それに何故自分に依頼して來たのか合點が行かない、兎に角今取るべき手段を講じなければならぬ、と云つた。

音楽は止んで、カルリノとキエコとの話聲が聞えた。レイニはサントノフリオの岡の中腹の家で獨身者の生活を送つて居たのであるが、今ベネテットを其處へ引取らうと熱心に申し出た。併し、拘引令状の事は如何なるであらう？今までベネテットを拘引しなかつたのは、彼を棄て、置く積であつたからではなく、唯だ其筋の方で、彼が上院議員の宅を出て仕舞ふまで、令状の送達を見合はして居たといふに過ぎなかつたならば如何であらう？とレイニは心配さうに云つた。

ジアンは言葉静に、拘引の虞はないと云つた。セルヴァ夫婦は、よくもあの様に平静を装うて居られる事よと感に堪へず、彼女の顔を眺めた。此間からジアンは、セルヴァ夫婦の様子を見ると、如何もベネテットの本名を知つて居るらしく思はれる。してみれば、ノエミは（是までに随分度々話してはいけない、いけないと云つては置いたが）果して嚴重に口を噤んで一言も洩さなかつたらうか？と疑惑の念を抱いて居たのであつた。所が、今し方、無言の中に悲し氣な目語を交換したあの時に、セルヴァ夫婦とジアンとは互の意中を覺り合つた。それでチヨヴァニとその妻とは、ジアンがあの様に雄々しく自分の感情を抑制して居るのは、彼等夫婦を憚つてはなく、レイニの氣を兼ねての事であると見て取つた。しかも、



チヨヴァニの話を知りてからは、レイニも亦事情をすつかり知つて居るのである！夫婦は殆ど不信の大罪を犯したやうな気がした。

彼等は、ジアンが拘引の虞があるとは信じないと云つたのは、彼等の知らない理由があるからであるに相違ない、と確信した。そして彼等は、ベネテットが今彼等の勸に任せて彼等の世話になる事を承諾するかも知れぬ、と云つた。するとジアンは、ベネテットが自レイニの家へ行かうとの希望を洩したではないかといふ事を直に彼等に思ひ起させた。そして、閑静な處に居る必要のある病人の居所としては、アレヌラ町よりもサントノフリオの岡の中腹の方が適當の様に思はれる、と云つた。併しながら彼女は、醫師が明瞭と動かしも構はないと云はなければ、如何しても病人を他へ移すことは出来ないといふ考である。この點に就いては、いづれも皆同意見であつた。セルヴァ夫婦はレイニに、若しもベネテット―の主治醫が彼を動かしてもよいといふ許可證を書くならば、ベネテット―の友人等は彼の隠所を他に求めやうが、若し醫師が許さなければ如何しても彼を他へ移す事は出来ないといふ意を上院議員に通じるやうに依頼した。チヨヴァニがこの事を話して居る中に、隣室のピアノから、騒々しいアレグロ、嘔泣と泣聲ばかりのアレグロが、急に大きな音を立て、起

つた。チヨヴァニは餘り大な聲を出すのを好まなかつたから、話を止めて、その悲しい音楽の轟き過ぎるのを待つた。そして、彼とレイニとが唇を堅く閉ぢた儘、互に眼と眼で語り合つた言葉は、實に悲しいものであつた。

レイニは一刻も猶豫が出来ないといふので、訣別を告げた。併し彼は、自分一人で行くのは厭である、實際あの議員の今度の所爲は、何の事だか全く譯が解らないから、出来るならば、誰かベネテット―の友人の中で、議員に少し憚られて居る様な人と一緒に行き度いものであると云つた。

チヨヴァニは、あの老人は上院の副議長の椅子を熱心に希望して居るのであるが、その希望は達せられまい、と低聲で云つた。思ひも寄らぬ所にそのやうな卑劣な目的の潜んで居るのを發見する事は、人に深い悲痛を感じさせる！マリアは起ち上つて、レイニと同行しやうと云つた。

「貴方は居つて下さいませうね？」

とジアンは心配さうにチヨヴァニに尋ねた。その調子は「是非居つて、貰はねばなりません



ん！」と云ふやうであつた。セルヴァは、云はれずとも居る積で居たのである、と答へたが、その聲と顔との表情は、未だ話さない悲しい言葉が彼の心を傷ませて居るといふ事を、ジアンに知らせる様な表情であつた。噫！若し今キエコが歸つて行つてカルリノが呼んだなら、如何であらう？左様したならば一緒に話す事は出来ないであらう！とジアンは思つた。彼女も亦セルヴァに話す事がある。内務大臣の云つた事をセルヴァに話さねばならぬ。二人の音楽家は又弾奏を止めて、話をして居た。ジアンは軽く戸を叩いて、戸の此方から元氣さうな言葉を少し吹き込んだ。

「巧いのねえ！もう済んだの？」

「よう、お美しい女、未だですよ。お耳障になるなら、誠にお氣の毒様！」

とキエコが向側から答へた。そして戸に穴を鑿けるかと思はれる様な鋭い口笛を一つ鳴らした。ジアンは手を拍つた。ピアノとヴァイオリンとチェロとは莊重なアンダンテを弾き始めた。

彼女はセルヴァの方を向いた。チヨヴァニは、ジアンが隣室と話して居る中に、ドン・クレメンテに電報を打つ事を妻に命じる爲めに、彼女と一緒に廊下まで出たが、此時室内へ這

入つて來た。ジアンは眼に涙を一杯溜めながら、兩手を握り合はして、彼の方に歩み寄つた。

「セルヴァさん、貴方はもう何も彼も皆知つて居なさんですから、妾は貴方には感情を隠せません。未だ何かもつと凶い事があるんですか？本當の事を話して下さい。」

と彼女は聲を潜めて囁いた。

セルヴァは彼女の兩手を取つて、固く握り締めた。彼は黙して語らなかつたが、ヴァイオリンチェロが彼に代つて、苦しい、悲しい答をした——「泣けよ、泣けよ、戀と悲との汝の運命の如き運命、何處にもあらねば。」——彼は物云ふ事も出来ずに、哀な、氷の様な手を握り締めた。彼はレイニがああ恐しい言葉「私は君の家へ行つて死なう」といふ言葉を、ジアンの前で繰り返す勇氣が無かつたといふ事を、今明に知つた。彼女に最初の一撃を加へる辛い役目は、彼のものとなつた。彼は優しく、父親の子に對する様な調子で云つた。

「ねえ、ジアンさん、あの人はサクロ・スペコで、或る大切な時に貴女を側へ呼び寄せやうと云つたでせう？その時が來ました、あの人は貴女を呼んで居るのです。」

ジアンは跳び上らぬ許に驚いた。彼女は聞き違つたのだと思つた。



「えい、如何したのです？ 違ふでせう！」  
と彼女は叫んだ。

其時、セルヴァが今までと同じ憐の色を眼に浮べて、黙然として居たので、或る思が彼女の心に閃き渡つた。「噫！」と彼女は叫んだ。そして彼女の全身全霊が、無言の、苦しい質問の中に籠つて、彼女の眼から出た。セルヴァは彼女の手を一層強く握り締めた。そして堅く閉じた彼の唇が痙攣的に震へて、抑へられた泣吃逆が彼の胸を痛ませた。ジアンは一言も云はなかつたけれども、若しセルヴァの手が彼女を支へて居なかつたならば、倒れた事であらう。彼はジアンの身體を支えて、それから腰を掛ける物のある所まで彼女を連れて行つた。

「直ですか？ 直ですか？ 切迫して居るのですか？」

「いや、いや、左様ぢやありません。あの人は明日貴女に會ひ度いと云つて居るのです。あの人は明日がその時だと思つて居るのですが、思違かも知れません。思違だといひのすかなあ。」

「まあ、セルヴァさん！ でもお醫者さんの手紙には熱が無いと書いてありましたよ！」

セルヴァは、何故とは解らずに不幸の現在を認めねばならぬ境遇にある者の様な身振をした。音楽の響が絶えて居たので、彼は聲を潜めて話した。——ベネットが彼に書面を寄越して云ふには、醫師が来た時には彼は熱が無かつたけれども、自分では再び發熱して、その後、最期が來ると豫期して居る。神は楽しい、平和な休息の恵を彼に與へ給ひつゝある。彼はセルヴァに一つ頼み度い事がある。彼はノエミ嬢の友人の、デサレ夫人といふ人が羅馬に來て居るといふ事を知つて居る。彼は嘗てその婦人に、サクロ・スペコの或る聖壇の前で、彼が死ぬ前には、共に語る折を得る爲めに、彼女を側へ呼び寄せやうと約束した。多分ノエミ嬢がその事柄の理由をセルヴァに説き明す事が出來やう。

セルヴァは此處で話を切つた。その手紙はポケットの中にあるので、彼は手探りでそれを捜し始めた。ジアンはその舉動を見て、痙攣的の戰慄に襲はれた。

「いや、いや、先刻も云つた通りあの人の思違かも知れないのですよ。」

と云つて、セルヴァはジアンの心が靜まるのを待つた。それから、ポケットから手紙を出さずに、その終の一節を讀んで繰り返した。

「熱は今夕又は夜中に盛返し申すべく、明夜、或は明後日の朝を最期と存じ候。明日デサ



レ夫人に面會致し候て、小生の往かんとする主の御名に於て、一言致し置き度しと存じ候。小生は今し方この面會に關する手筈を、この家の主人の議員に依頼致し候へ共、兎や角と申され候て、承諾致し呉れられず候。それ故貴下に懇願致す次第に御座候。」

ジアンは先刻から兩手で顔を蔽つて、物も云はなかつた。セルヴァは何か彼女の希望を繋ぐ事を云ふのが善いと思つて、多分もう發熱しないかも知れぬ、多分熱は喰ひ止められたかも知れぬ、と云つた。けれどもジアンが激しく首を振るので、彼は強つて左様だとも得云はなかつた。突然、彼女はキエコの訣別を告げる聲が聞えた様に思つた。彼女は身慄して、亂れ髪の解れかゝつた、幽霊の様な顔から手を除けた。けれどもキエコは出て來ないで、クルリコロ・ナポレタノの曲の最初の華やかな調子が急に響いて來た。之はキエコが何時も最後に弾く曲であつた。ジアンは突立ち上つて、極學的に、涙も出さずに云つた。

「セルヴァさん、妾は屹度ピエロさんが死にかけて居られるのだと思ひます。屹度あの人の思違ぢやないと思ひます。出来るなら、あの儘で動かない様にして貰つて下さい。あの人の友達をあの人の側へ呼ぶやうにして下さい——あの人にその慰を與へる様に、是非友達を側へ呼ぶと堅く約束して下さい——皆さんに妾の事を、妾の事をすつかり、話して下さい——

本當の事を話して下さい。ピエロさんが本當にどんなに潔白な方だか、どんなに聖い方だか、皆さんに話して下さい！妾は此處で待つて居ます。何處へも行きます。あの人が妾を呼んだら、貴方の指圖の通りに行きます。妾はしつかりして居ます。御覽なさい、もう泣いちや居ないでせう！ドン・クレメンテさんに、弟子が死にかゝつて居るから是非來て下さいといつて、電報を打つて下さい。お互に出来るだけの事を盡しませう。もう遅う御座いますから、お出で下さい。貴方はいづれ今晚ピエロさんにお會ひでせう。何卒あの人に斯う云つて——」

この時、一頻込み上げて來た悲しさが彼女の言葉を妨げた。キエコが口笛を吹いて、彼獨特の變つた風拍手を取りながら、隣室から這入つて來た。セルヴァも戸口から這り出た。ジアンも後を追つて暗い廊下へ出た。そして、彼の片手を握つて、それに激しく唇を押し付けた。

それから數時間経つた十時頃、ジアンはカルリノにフガ口新聞を讀んで聞かせて居た。カルリノは安樂椅子に身體を埋めて、兩脚を毛布で包んで、膝の上に乗せてある牛乳の這入つた大茶碗に兩手を掛けて、聽いて居た。ジアンが餘り下手な讀方をして、文章の句切も



何も構はず滅茶苦茶に読んで行くので、弟は始終口出しをして居た、そして痲癩を起しかけて居た。斯ういふ風に五分間程読んで居ると、下女が這入つて来て、ノエミさんがお越しなさいましたと云つた。ジアンは新聞を片脇に投げ遣つて、瞬く間に室を出て行つた。ノエミは立つた儘——遅いから早く歸り度いといふので——急いで次の事を話した。チヨヴァニとマリアとがグラランド・ホテルへ来て居た間に、ナポリから歸つたばかりのマイダ教授が眞赤になつてセルヴァの宅へ来て、何故ベネットを彼の家から他所へ隠したのかと、理由を詰問した。其處でノエミは彼に一伍一什の話をした。すると、マイダは直デラ・ポルヴェリエラ町へ行つた。行つて見ると、マリアとレイニと上院議員と醫師とが居つた。醫師はベネットを動かしてもよいといふ意見であつた。その點に就いてマイダと醫師との間に議論が起つたが、マイダは遂に「宜しい、此處へ置いとくよりも我輩が自分で連れて行く！」と云つて、その議論を打ち切つた。一時間程経つと、彼は枕や毛布を一杯入れた馬車を連れて引き返して来て、到頭ベネットを連れて行つた。どうやら途中何の故障も無く行つたらしい。

ジアンはこの話を聞き終つて、物も云はずに友を堅く抱き締めた。友は眼に涙を一杯溜めて、身を慄はしながら、ジアンに囁いた。

「あのね、ジアンさん！貴女は明日の事をお祈りして？」

「えへ。」

とジアンは答へた。

彼女は降り出でんとする涙の大雨を止めやうと力一杯努めながら、黙つて居た。漸く涙を堰く事が出来てから、彼女は低聲で言葉を續けた。

「妾は神様には如何云つてお祈りして可いのか知らないの。妾は誰にお祈りするの貴女知つてますか？ドン・チウセツペ・フロレスさんによ。」

ノエミはジアンの肩に顔を埋めて、聲を潜めて云つた。

「これから先で、妾等があの方の信仰の爲めに一緒に働くのを、あの方が見なさる事が出来たら、どんなに善いでせうにねえ。」

ジアンは返事をしなかつた。そしてノエミはその儘歸つて行つた。

ジアンは先刻の續を讀みに、カルリノの所へ歸つて来たが、弟は慳食に彼女を迎へた。彼



は、こんな生活には厭き厭きして来たから、明日自分と一緒にナポリへ向けて發つ支度をして貰はなければならぬ、と云つた。ジアンは、それは馬鹿らしい事である、自分は此處を去るのは厭である、と答へた。するとカルリノは勃然と腹を立て、姉の手首を引搦んで、彼女が本當に痛かつた程激しく搖ぶつた。否でも應でも是非行かなければならぬ！姉さんが僕に云ふ事に逆らうとするから、僕には姉さんが何故ぐる／＼回つたり絆々振れたり、妙な事をやるのか、何故眼を赤くして居るのか、何故無茶苦茶な讀方をするのか、何故羅馬を去るのが厭なのか、その理由がちやんと判つて居るといふ事を、姉さんに話す時機が来た。其等の事は無名の手紙で通知があつた。あんな狂人とは手を切つて仕舞はねば、それこそ大事だ！姉さんがあの男の爲めに自分の確信を犠牲に供したり、あの迷信や、あの偏屈な信仰や、あの坊主共の宗教に、引摺込まれなんぞすると、姉さんの一身上それこそ大變だ！そんな事になれば僕は又と再び姉さんの顔を見ない。生きてる時にも死ぬる時にも、宗教なんか拘束せられない自由論者たらん事を欲する僕は、姉さんと姉弟の縁を切つて仕舞ふ！いけない、いけない、是非手を切らなければならぬ、手を切らなければ！二人でナポリへ行かう、パレルモへ行かう、必要とあれば亞弗利加へでも！

「自由論者？宜うござんす。ちや妾の自由は如何なるの？」

とジアンは腹も立てずに云つた。彼女は唯だ自分にも斯ういふ權利があるといふ事を彼に注意しただけなので、何もその權利を主張して如何しやうといふ積などはなかつたのであつた。けれどもカルリノは左様は取らずに、姉がそれを利用して、彼が氣遣つて居た様な態度を取る積で居るのだと思つたので、腹立の餘り全く頭が混亂して仕舞つた。ジアンは弟——今まで神經質だとは知つて居たが、善い深切な男だと信じて居た弟が、實に酷い言葉を使つて盛に毒つくのを知つて居る中に、氣が遠くなるやうに思つた。そして、一言も答をせず、激しく慄ひながら自分の部屋へ歸つて来た。彼女は弟に宛て、若し彼が今日の侮辱に對して説言をしないならば、彼女の威嚴は如何しても彼の側に居る事を彼女に許さない。彼女は是から此處を出て行く。若し何か云ひ度い事があるなら、セルヴァの宅に居るから、其處へ云つて寄越せ、といふ意味の短い手紙を書いた。それから、小な手提鞆だけを携つて、その手紙を机の上に乗せて置いて、下女を供に連れて出て行つた。

ホテルの近傍に馬車が見付からなかつたので、彼女は電車に乗る積でエセドロの方へ歩き出した。西風が吹いて居た。町の兩側の櫛の木は身を悶いて呻いて居た。四邊は暗くて、凸



凹した地面は歩き悪かつた。

「あらまあ、奥様！何處へ参るんで御座いますか？」

と下女が驚いて叫んだ。

頭が燃える様で、心臓と脈搏とが激しく騒ぎ立って居るジアンは、返事もせず歩き續けた。彼女にはさながら不知の海の潮の上に浮んで、闇黒の中を彼女の方へ押流されて行く様に感じられた。

彼女の方へ、彼女の方へ。また彼の神の方へ？彼女の頭の上と彼女の周囲とに吹き荒ぶ強烈い風が、彼女の心を掻き亂した。ノエミの言葉とカルリノの言葉とが、激烈に彼女の魂を引き裂きつゝあつた。また彼の神の方へ？嗚呼！如何してそれが彼女に判らう？兎も角も今は、彼女の方へ！

## 第九章 神の旋風

## 其一

翌日の二時に、ジアンはセルヴァの宅で MARIA やノエミと一緒に、マイダ家の別荘からの便を待つて居た。そして、グラランド・ホテルの方で辛抱強く、何事をも云つて来ないことを頻に氣に懸けてゐた。チヨヴァニは七時前にマイダ家の別荘へ行つて、九時に歸つて来た。彼はベネデットに面會する事が出来なかつた。マイダ教授は彼にもまた他の何人にも、病室へ這入る事を許して呉れなかつた。チヨヴァニは病人が、死期が切迫して居るからといふよりも、寧ろ信仰上の一行爲として、聖餐を受けたといふ事を聞いた。併し昨夜、夜の中に熱の徴候が又現れた。その襲來は多分打破るか或は喰止める事が出来るだらうとの事であつた。この報知をジアンに耳に入れる際に、チヨヴァニはそれに少し樂觀の色を着けたかも知れぬ。ベネデットは教授の部屋に居るのであつた。多くの人に苛酷な傲慢な男だと思はれて居るあの恐しいマイダが、ベネデットに惜まず與へる世話の中には、實に美しい、女らしい愛情が如何に充ち満ちて居るかは、逆も充分に話す事は出来まい、とチヨヴァニが云つ



て居た。

チヨヴァニは正午頃に晝飯を済ませて、また出掛けて行つた。カルリノの方からは、書面でも口上で、唯だの一言も云つて来なかつた。ジアンは他に深い悲があるに拘はらず、弟の事をも思はずには居られなかつた。若しや彼が悲や腹立の爲めに本當に病氣になつたのであつたら如何しやう？二人の友は彼女の心配を宥めた。そんな事なら下女か下男か知らせに来たらうが何とも云つて来ない所を見れば心配するには及ばぬ。ジアンは召使等の報知などは當にはならぬと思つて居た。如何したらよからうか？彼女は様子を聞きに誰か人を遣つて貰ふやうに頼まうと思つて、口を開きかけた時に、丁度二時十五分過であつたが、玄關に急いで歩く足音がして、チヨヴァニが外套を着た儘、帽子片手に這入つて来た。ジアンは彼の顔を一目見て、時機が来た事を覺つた。彼女は死人の様に血の氣の無い顔をして、立ち上つた。續いてマリアとノエミも黙つて立ち上つた。マリアはジアンを注視めた。ノエミは姉婿の顔を熟と見た。ジアンは幽霊の様な顔と向ひ合つたチヨヴァニは、言葉が口に出て来なかつた。恐しい五六秒が過ぎた。併し沈黙はそれ以上續かなかつた。マリアは低い聲で云つた。

「參るんで御座いますか？」

彼女の夫は答へた。

「出掛ける方がよからう。」

この他何も云はれなかつた。

三人の婦人は外套と帽子とを着に行つた——ジアンは或る一室へ、マリアとノエミとは別の一室へ。チヨヴァニは妻とノエミとの後を追つた。如何？熱が大變高くなつたので、教授はもう見込はないと云つて居る。ノエミはそれを聞いて、帽子を手早く冠つて、ジアンが支度をして居る部屋へ行つた。ジアンは背後を向いて、ノエミが接吻しに来るのを見て、自分の唇に指を當て、手眞似で彼女を止めた。ノエミは彼女の心中を解した。今は忍耐の時である。ジアンは接吻も、言葉も、涙も受ける事を好まぬ。彼女は委しい事を話して呉れよとも云はず、質問をもしなかつた。四人は纏て落合つた。空が曇つて、羅馬の冬によくある雷雨が今にも始まりさうであつたから、マリアは低聲で、屋根のある馬車を二輛呼びに遣るやうに夫に頼んだ。チヨヴァニは、マイダ家の馬車に乗つて歸つたから、馬車を呼ぶ必要はない、と答へた。それで彼等は幌を下した馬車に乗つた。乗つてからジアンは、他の者が皆黒



つばい着物を着て居るのに、自分だけが派手過ぎる、餘りに流行的の、鼠色の着物を着て居る事に気が付いた。彼女はびくりとして少し身體を動かしたので、他の者等は訝し気に彼女を眺めた。彼女は一寸脚躑つたが、着替へる隙もなく、着替も持つて来て居ないのだと思ひ直して、何気なく答へた。

「何でも無いのです。」

馬車は動き出した。誰も再び口を開かなかつた。

テル・ピアントー町へ曲つた時に、馬車は或る故障の爲め止められた。先程から四邊が益々暗くなつて、雷が鳴つて居た。馬が驚いたのでマリアは心配さうに窓から外を眺めた。ジアンはチヨヴァニと向ひ合つて腰を掛けて居たが、低い聲で彼に、ドン・クレメンテに電報を打つたか、と問うた。チヨヴァニは、ドン・クレメンテは十時半に既にマイダ家の別荘へ来て居る、と答へた。馬車が動き出した。モンタナラの四辻まで来ると雨が降り始めた。馬は足早にだくを踏んで居た。稍あつて御者が馬の歩調を緩めて並足に歩ませかけたときに、マリアは夫の顔を見た——これはアヴェンティンの岡ではないか？もう直なのであらう。これは眼で話されたので、口で云はれたのではなかつた。ジアンは今日始めてこの邊を通つた

のであるが、彼女も亦、目的地に達するのは間もあるまいと感じた。彼女は身體をしやんと堅く伸して、目前を通つて行く塚を見詰めた。石と石との隙間の數を勘定しやうと努めて居るかのやうに、熱心に塚を見詰めた。馬が足並を早めて、跑を踏み始めた。サンタンセルモ修道院を通り越すと、道はだらだら下りになつて居る。兩側に立つて居た人々が馬車の中を覗き込んだ。チヨヴァニ・セルヴァは我知らず口走つた。

「さあ来た。」

その時ジアンは激しくびくりとした。そして兩手で顔を覆つた。隣合つて腰を掛けて居たマリアは、彼女の頸の周圍に腕をかけて、身體を屈めて摩り寄つて、囁いた。

「しつかりなさいよ！」

けれどもジアンは身體を片脇へ退いて、可成彼女を避けやうとした。ノエミは首を振つて、強ひて慰めやうとするなど、手真似で姉を止めた。マリアは歎息を洩した。其時馬車は兩側に重なり合つて立つて居る人の列の間を左へ曲つて、門を通り抜けた。車輪は砂利の上を軋つて、そして停つた。僕が入口へ出て来て、お客様に別荘の中へ這入つて頂くやうにこの教授の言葉を彼等に傳へた。其時始めてチヨヴァニは、ベネデットがもう別荘の中には居な



いといふ事、彼が住み馴れた園丁の住宅の中の小さな一室へ連れて行つて貰ひたいと求めたといふ事を同行者に話した。馬車は一二間向へ進んだ。そして四人は二つの棕櫚の樹の植込の間に在る白大理石の階段の前に下り立つた。雨はまだ降つて居たが、酷くはなかつた。そして、表門の邊に群集して居た人々も、外塀と並行して園丁の小さな家まで續いて居る蜜柑の樹を兩側に植ゑ付けた徑に立つて、新來の人を見て居た一團の人々も、それに頓着して居なかつた。誰か一人その一團を離れた者があつた。それはレイニであつた。彼はセルヴァの背後から大理石の階段を昇つて行つて、ボムペイ風の玄關の弓柱の下で彼を引き留めて目前の立派な景色には目も呉れずに、低聲で何か話した。白大理石の階段の兩側にある二叢生の棕櫚の間から見えた景色は實に立派なものであつた——芭蕉の岸の間を通つてアヴェンティンの岡の坂を流れ下る秋海棠の川、彼方聖保羅門の壁の上、カイオ・チエステイオの三角塔の上、詩人シエリーの奥津城から生ひ出でたサイブレス樹の小さな森の上の邊で白い綿の付いた、黒い荒模様の空。

セルヴァは玄關に這入つて行つたが、暫時して又妻と一緒に出て來た。二人はレイニと連れ立つて階段を降りて、蜜柑の樹の徑で彼等を待ち受けて居るらしく思はれる人々の方へ足を向けた。丁度その時、門前で云ひ争ふ腹立たし氣な大勢の聲が一時に聞えた。道路は人で埋まつて居た。彼等は、イエネの聖者はマイダ家の別荘へ歸つて來たが病氣だといふ噂がテスタツチオ一團に播まつた時から、今でもう數時間も其處に待つて居たのであつた。今までは彼等は唯だ様子を聞かして貰ひ度いと云つて居ただけであつたが、到頭、彼等の代表者が内へ這入つて聖者に面會する事を許して欲しいといふ要求を持ち出した。マイダ家の僕等はその要求を取次ぐ事を拒絶した。そして其結果は腹立たし氣な言葉の交換であつた。けれども、マイダ教授の丈の高い、黒い姿が蜜柑の樹の茂みから現れた時に、その争論はびたりと歇んだ。男子は皆帽子を脱いだ。教授は僕に門を開く事を命じて、そして人々に向つて、いづれ後刻皆の者にベネテツトに面會させて上げるが、今は未だいけない、まづそれまでは皆の者は庭へ這入つても宜しい、無論の事だ、可愛相に——と云つた。人々は靜に、恭しく、内へ這入つた。そして幾人かの者は教授の周圍に集つて、眼に涙を溜めて尋ねた。

「本當なんですか、先生？あの人が危篤だといふのは本當なんですか？何卒お話しなすつ



て下さい！」

尋ねて居る人々の背後から他の者が心配さうに返事を待ちながら、押して来た。

「噫！私に何が話せやう？」

教授の答はこれだけであつた。けれども彼の沈んだ、男らしい顔はその言葉よりも多くを語つた。そして群集は愁を含んで、緑の坂に沿つて歩いて行つた。その緑の徑は白い縞のあつた黒い空の下に蒼黒い色を帯びて、死——地上の影から天上の無限の光明に到る暗い道の、神秘的な象徴を成して居た。

其二

ベネテットはマイダ教授を愛して居た。彼は上院議員の家で、マイダ教授が彼をこの別荘へ連れて行く事に決したと聞いた時に、深い喜悅の色を現した。彼はこの人、多分未だ信仰を有つ事は出来ないかも知れぬが、科學の力を以て解決する事の出来ない謎の存在を堅く信じて居るこの人、親切で、上流の人に對する時は傲然として、微賤い者に接する時は柔和なこの人を愛して居た。彼は又、教授に對して友であり又僕であつたのと同じ様に、友として又僕として彼が旦暮世話をして居た別荘の庭園の樹木や花や草を愛して居た。この庭園の

中にありとあらゆる物には皆優しい、罪の無い魂が充ちて居て、彼は靈の大歡喜を味つた時には、花の上や、葉の上や、莖の上や、青々とした涼しい風の中にある、その小さな存在物に唇を當て、は、彼等と諸共に神を拜した事があつた。彼は彼等に圍まれて死ぬのかと思つて、嬉しく感じた。時としては、彼は風と音とに満ちた天蓋をキーンと岡の方に向けて立つて居る松の樹の下で、かの幻の終の光景を思ひ起して、ベネテット派の法衣を着た自分が、悲し氣な顔に圍まれながら、天つ國の不可思議な歌を歌ふその松の樹の下の草の上に、蒼白い顔をして、靜に横はつて居る様を想像の中に描いた事があつた。その様な事を思ふ度に、我儘な、人間の虚榮心の幾分か交つた、そして又、神の聖旨に服従する心に全くは制せられ抑へられて居ない、その喜悅の念を、彼は胸の中で壓し消した。けれども、彼はその念を根柢にする事は出来なかつた。

それ故彼は感謝の念を以て教授の方に腕を差出した。けれども直彼は良心の疑惑に襲はれた。彼の分別と彼の基督教的感情とは互に衝突した。彼は教授の子息の、今東洋に行つて居る海軍士官の妻となつて居る婦人に、嫌はれて居る事を知つて居た。そして、彼がマイダ家の別荘へ歸る事は、その婦人の氣に入らない事でもあり、又彼女とその男との間の不和の種



どなるといふ事を見て取つた。併しながら、今教授に左様と云つて、そして、自分の敵であるといふその事の爲めに殊更自分が愛しなければならぬ人の、正義と慈悲との心に缺けて居るといふ事を、自分の言葉の中に含ませない様にする事が、如何して出来やう？ 彼は教授に、何卒サントノフリオの方へ行かせて呉れよと願つた。彼の心の變り様が餘り急であつたから、マイダは驚いた。そして暫時考へて居たが、それと覺つて、眉を擡めながら云つた。

「貴方は我輩に、或る人が或る事をしたのを何時までも赦さないで置いて欲いんですかい？」

ベネデットはもうその上反對を唱へなかつた。併しその晩、馬車の居る所まで降りて行く時が来て、そして彼が一人では立つて居られないといふ事を知つた時に、彼は微笑みながら、教授の腕に手を掛けて、斯う云つた。

「若し引續いてこんな様子でしたら、明日か明後日には貴方のお宅に死人が一人出来るといふ事を、貴方は御承知で御座いますか？」

教授は、自分は彼に對しては嘘を吐かぬ、そんな事にならないとも限らないが、確には判らぬ、と云つた。

ベネデットは言葉を續けた、その顔には最早微笑は消えて居た。

「貴方は御承知で御座いますか、第一に貴方は——」

「貴方の思つて居る事は我輩に解つて居る。」と教授は彼の言葉を遮つて、「安心してお出でなさい。我輩は貴方と違つて信者ぢやないが、信者だと善いと思つて居る。そして我輩は誰でも貴方が會ひたいと思ふ人には、謹んで門戸を開放します。それは兎も角、これを持つて行きませうな？」

彼はベネデットが此家へ来る時に携へて来た聖十字架像が壁に懸つて居るのを下して、それから強い腕で病人を抱き上げた。

移轉は故障なく成就された。前よりも身長が縮まつたやうに思はれたベネデットは、馬車の中で堤のやうに積み重ねてある蒲團の上に横になつた儘、幾度も氣分を尋ねる教授の言葉に答へるのに、力の無い聲を以てするよりも微笑を以てした方が度數が多かつた。教授は絶えずベネデットの脈所に指を當て、居て、折々興奮劑を與へた。別荘の入口に着いた時に、感動の結果か疲勞の爲めか、病人の寢れた、肉の無い顔は蒼くなつて、汗で濡れた。そして彼は大な、光のある眼を閉ぢた。マイダは彼を自分の寢臺の上に臥させた。それで、